

坑夫

夏目漱石



さつきから松原を通つてゐるんだが、松原と云うものは絵で見たよりもよつぽど長いもんだ。いつまで行つても松ばかり生えていていつこう要領を得ない。こつちがいくら歩行たつて松の方で発展してくれなければ駄目な事だ。いつそ始めから突つ立つたまま松と睨めつ子をしてゐる方が増しだ。

東京を立つたのは昨夕の九時頃で、夜通しむちやくちやに北の方へ歩いて来たら草臥れて眠くなつた。泊る宿もなし金もないから暗闇の神樂堂へ上つてちよつと寝た。何でも八幡様らしい。寒くて目が覚めたら、まだ夜は明け離れていなかった。それからべつ平押しにここまでやつて来たようなものの、こうやたらに松ばかり並んでいては歩く精がない。

足はだいぶ重くなつてゐる。膨ら脛に小さい鉄の才槌を縛り

附けたように足搔あがきに骨が折れる。拾あわせの尻は無論端折はしおつてある。その上洋袴ズボン下さえ穿はいていないのだから不断なら競走でもできる。が、こう松ばかりじゃ所詮敵しよせんわない。

掛茶屋がある。葭簣よしずの影から見ると粘土ねばつちのへつついに、錆さびた茶釜ちやがまが掛かっている。床几しょうぎが二尺ばかり往来へ食はみ出した上から、二三足草鞋わらじがぶら下がって、裨天はんてんだか、どてらだか分らない着物を着た男が背中をこちらへ向けて腰を掛けている。

休もうかな、廃よそうかなと、通り掛りに横目で覗のぞき込んで見たら、例の裨天ちゆうとどてらの中ちゆうを行く男が突然こつちを向いた。煙草たばこの脂やにで黒くなつた齒を、厚い唇くちびるの間から出して笑っている。これとは少し気味が悪くなり掛ける途端とたんに、向うの顔は急に真面目まじめになった。今まで茶店の婆さんとさる面白い話をしていて、何の気もつかずに、ついそのままの顔を往来へ向けた時に、ふと自

分の面相に出^でつ喰^{くわ}したものと見える。ともかく向うが真面目になつたのでようやく安心した。安心したと思う間^まもなくまた氣味が悪くなつた。男は真面目になつた顔を真面目な場所^すに据^すえたまま、白眼^{しろめ}の運動が氣に掛かるほどの勢いで自分の口から鼻、鼻^{ひたい}から額^{ひたい}とじりじり頭の上へ登つて行く。鳥打帽の廂^{ひさし}を跨^{また}いで、脳天まで届いたと思う頃また白眼がじりじり下へ降^{さが}つて來た。今度は顔を素通りにして胸から臍^{へそ}のあたりまで來るとちよつと留^{とど}まつた。臍^{はら}の所には墓口^{がまぐち}がある。三十二錢^は這入^{はい}つてゐる。白眼は久留米^{くるめがすり}緋の上からこの墓口^{ねら}を覗^{のぞ}つたまま、木綿^{もめん}の兵児^{へこ}帶^{おび}を乗り越してやつと股倉^{またぐら}へ出た。股倉から下にあるものは空脛^{からすね}ばかりだ。いくら見たつて、見られるようなものは食^くツ附^ついちやいない。ただ不斷より少々重たくなつてゐる。白眼はその重たくなつてゐる所を、わざつと、じりじり見て、とうとう親指

の痕が黒くついた俎下駄あともまないたげたの台まで降くだつて行つた。

こう書くと、何だか、長く一所ひとところに立っていて、さあ御覧下さ

いと云わないばかりに振舞つたように思われるがそうじゃない。

実は白い眼の運動が始まるや否いなや急に茶店へ休むのが厭いやになつ

たから、すたすた歩き出したつもりである。にもかかわらず、

このつもりが少々覚束おぼつかなかつたと見えて、自分が親指にまむし

を拵こしらえて、俎下駄ねじを振る間際まぎわには、もう白い眼の運動は済んで

いた。残念ながら向うは早いものである。じりじり見るんだか

ら定めし手間が掛かるだろうと思つたら大間違い。じりじりに

は相違ない、どこまでも落ちついてゐる。がそれで滅法めつぼう早い。

茶屋の前を通り越しながら、世の中には、妙な作用を持つてる

眼があるものだと思つたくらいである。それにしても、ああ緩ゆる

くり見られないうちに、早く向き直る工夫はなかつたもんだろ

うか。さんざつ腹冷ばらひやかされて、さあ御帰り、用はないからと云う段になつて、もう御免蒙ごめんこうぶりますと立ち上つたようなものだ。こつちは馬鹿ばか氣げている。あつちは得意である。

歩き出してから五六間の間は変に腹が立つた。しかし不愉快は五六間ですぐ消えてしまつた。と思うとまた足が重くなつた。——この足だもの。何しろ鉄の才さい槌づちを双方の足へ縛しばり附けて歩いてるんだから、敏活の行動は出来ないはずだ。あの白い眼にじりじりやられたのも、満更持前まんざらの半間はんまからばかり来たとも云えまい。こう思い直して見ると下らない。

その上こんな事を氣にしていられる身分じゃない。いったん飛び出したからは、もうどうあつても家うちへ戻る了りようけん簡はない。東京にさえ居おり切れない身体からだだ。たとい田舎いなかでも落ちつく氣はない。休むと後うしろから追つ掛けられる。昨日きのうまでのいさくさが頭の

中を切つて廻つた日にはどんな田舎だつてやり切れない。だからただ歩くのである。けれども別段に目的めあてもない歩き方だから、顔の先一間四方がぼうとして何だか焼き損そくなつた写真のように曇っている。しかもこの曇つたものが、いつ晴れると云う的あてもなく、ただ漠然ぼくぜんと際限もなく行手に広がっている。いやしくも自分が生きている間は五十年でも六十年でも、いくら歩いてても走かけても依然として広がっているに違いない。ああ、つまらない。歩くのはいたたまれないから歩くので、このぼんやりした前途を抜出するために歩くのではない。抜け出そうとしたつて抜け出せないのは知れ切っている。

東京を立つた昨夜ゆうべの九時から、こう諦あきらめはつけてはいるが、さて歩き出して見ると、歩きながら気が気でない。足も重い、松あが厭あきるほど行列している。しかし足よりも松よりも腹の中が

一番苦しい。何のために歩いているんだか分らなくつて、しかも歩かなくつては一刻も生きていられないほどの苦痛は滅多にない。

のみならず歩けば歩くほどとうてい抜ける事のできない曇つた世界の中へだんだん深く潜り込んで行くような気がする。振り返ると日の照っている東京はもう代が違っている。手を出しても足を伸ばしても、この世では届かない。まるで娑婆が違つて、そのくせ暖かな朗かな東京は、依然として眼先にありありと写っている。おういと日蔭から呼びたくなるくらい明かに見える。と同時に足の向いてる先は漠々たるものだ。この漠々のうちへ——命のあらん限り広がっているこの漠々のうちへ——自分はふらふら迷い込むのだから心細い。

この曇つた世界が曇つたなりはびこつて、定業の尽きるまで

行く手を塞ふさいでいてはたまらない。留まつた片足を不安の念に
駆かられて一步前へ出すと、一步不安の中へ踏み込んだ訳わけになる。
不安に追い懸けられ、不安に引張られて、やむを得ず動いて
は、いくら歩いてもいくら歩いても埒らちが明くはずがない。生涯しょうがい
片づかない不安の中を歩いて行くんだ。とてものに曇つたも
のが、いつそだんだん暗くなつてくれればいい。暗くなつた所
をまた暗い方へと踏み出して行つたら、遠からず世界が闇やみになつ
て、自分の眼で自分の身体が見えなくなるだろう。そうなれば
気楽なものだ。

意地の悪い事に自分の行く路は明るくもなつてくれず、と云つ
て暗くもなつてくれない。どこまでも半陰半晴の姿で、どこまで
も片づかぬ不安が立て罩こめている。これでは生甲斐いきがいがない、さ
ればと云つて死に切れない。何でも人のいない所へ行つて、たつ

た一人で住んでいたい。それが出来なければいつその事……

不思議な事にいつその事と観念して見たが別にどきんともしなかつた。今まで東京にいた時分いつその事と無分別を起しかけた事もたびたびあるが、そのたびたびにどきんとしない事はなかつた。後あとからぞつとして、まあ善かつたと思わない事もなかつた。ところが今度は天からどきんともぞつともしない。どきんとでもぞつとでも勝手にするが善いいと云うくらいに、不安の念が胸一杯に広がっていたんだろう。その上いつその事を断行するのが今ではないと云う安心がどこかにあるらしい。明日あしたになるか明後日あさつてになるか、ことに由よつたら一週間も掛るか、まかり間違えば無期限に延ばしても差支さしつかえないと高たかを括くくつていたせいかも知れない。華嚴けげんの瀑たきにしても浅間あさまの噴火口ふんかこうにしても道程みちのりはまだだいぶあるくらいは知らぬ間まに感じていたんだろう。行

き着いていよいよとならなければ誰がどきんとするものじゃない。したがっていつその事を断行して見ようと云う気にもなる。この一面に曇った世界が苦痛であつて、この苦痛をどきんとしない程度において免れる望があると思えば重い足も前に出し甲斐がある。まずこのくらしいの決心であつたらしい。しかしこれはあとから考えた心理状態の解剖である。その当時はただ暗い所へ出ればいい。何でも暗い所へ行かなければならないと、ひたすら暗い所を目的に歩き出したばかりである。今考えると馬鹿馬鹿しいが、ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを責^{せめ}ても慰^{いしや}藉と心得るようになって来る。ただし目指す死は必ず遠方になければならないと云う事も事実だろうと思う。少くとも自分はそう考える。あまり近過ぎると慰藉になりかねるのは死と云う因果である。

ただ暗い所へ行きたい、行かなくつちやならないと思ひながら、雲を攫つかむような料簡りょうけんで歩いて来ると、後うしろからおいおい呼ぶものがある。どんなに魂がうろついてる時でも呼ばれて見ると性根しょうねがあるのは不思議なものだ。自分は何の気もなく振り向いた。応ずるためと云う意識さえ持たなかったのは事実である。しかし振り向いて見て始めて気がついた。自分はさつきの茶店からまだ二十間とは離れていない。その茶店の前の往来へ、例の絆天はんてんとどてらの合あいの子こが出て、脂やにだらけの齒をあらわに曝さらしながらしきりに自分を呼んでいる。

昨夕ゆうべ東京を立つてから、まだ人間に口を利きいた事がない。人から言葉を掛けられようなどとは夢にも予期していなかった。言葉を掛けられる資格などはまるで無いものと自信し切つていた。ところへ突然呼び懸かけられたのだから——粗末はなはな齒並はなはびだ

が向き出しに笑顔を見せてしきりに手招きをしているのだから、ぼんやり振り返った時の心持が、自然と判然はつきりすると共に、自分の足はいつの間にか、その男の方へ動き出した。

実を云うとこの男の顔も服装なりも動作もあんまり気に入っちゃいない。ことにさつき白い眼でじろじろやられた時などは、何となく嫌悪けんおの念が胸の裡うちに萌きざし掛けたくらいである。それがものの二十間とも歩かないうちに以前の感情はどこかへ消えてしまつて、打つて変つた一種の温味あたたかみを帯びた心持で後帰あとがえりをしたのはなぜだか分らない。自分は暗い所へ行かなければならないと思つていた。だから茶店の方へ逆戻りをし始めると自分の目的とは反対の見当けんとうに取つて返す事になる。暗い所から一歩立ち退のいた意味になる。ところがこの立退たちのかきが何となく嬉うれしかった。その後のちいろいろ経験をして見たが、こんな矛盾いたは到る所に転ころがつ

ている。けつして自分ばかりじゃあるまいと思う。近頃では
んで性格なんてものはないものだと考えている。よく小説家が
こんな性格を書くの、あんな性格をこしらえるのと云つて得意
がつている。読者もあの性格がこうだの、ああだのと分つたよ
うな事を云つてゐるが、ありや、みんな嘘うそをかいて楽しんだり、嘘
を読んで嬉しがつてゐるんだらう。本当の事を云うと性格なんて
纏まとつたものはありやしない。本当の事が小説家などにかけるも
のじゃなし、書いたつて、小説になる氣づかいはあるまい。本
当の人間は妙に纏まとめにくいものだ。神さまでも手古てこずるくらい
纏まとまらない物体だ。しかし自分だけがどうあつても纏まとまらなく
出来上つてゐるから、他人ひとも自分同様しな締しりのない人間に違ないと
はやがてん早合点はやがてんをしているのかも知れない。それでは失礼に当る。

とにかく引き返して目倉めくら編じまの傍そばまで行くと、どてらはさも馴な

れ馴れしい声で

「若い衆しゅさん」

と云いながら、大きな顎あごを心持襟えりの中へ引きながら自分の額ぬかのあたりを見詰めている。自分は好加減いいかげんなところで、茶色の足を二本立てたまま、

「何か用ですか」

と叮嚀ていねいに聞いた。これが平生へいぜいならこんなどて、から若い衆さんなんて云われて快よく返辞をする自分じゃない。返辞をするにしてもうんとか何だとかで済したろうと思う。ところがこの時に限って、人相のよくないどてらと自分とは全く同等の人間のような気持がした。別に利害の關係からしてわざと腰を低く出たんじゃ、けっしてない。するとどてらの方でも自分を同程度の人間と見倣みなしたような語気で、

「御前さん、おもえ働く了簡りようけんはないかね」

と云った。自分は今が今まで暗い所へ行くよりほかに用のない身と覚悟していたんだから、藪やぶから棒ぼうに働く了簡はないかねと聞かれた時には、何と答えて善いいか、さっぱり訳わけが分らずに、空腔からすねを突つ張つたまま、馬鹿見たような口を開けて、ぼんやり相手を眺ながめていた。

「御前さん、働く了簡はないかね。どうせ働かなくつちやならないんだろう」

とどてらがまた問い返した。問い返された時分にはこつちの腹じきようも、どうか、こうか、受け答の出来るくらいに眼前の事況えとくを会得するようになった。

「働いても善いいですが」

これは自分の答である。しかしこの答がいやしくも口に出て

来るほどに、自分の頭が間に合せの工面にせよ、やつと片づいたと云うものは、単純ながら一順の過程を通つておる。

自分はどこへ行くんだか分らないが、なにしろ人のいないところへ行く気でいた。のに振り向いてどてらの方へあるき出したのだから、歩き出しながら何となく自分に対して憫然びんぜんな感がある。と云うものはいくらどてらでも人間である。人間のいない方へ行くべきものが、人間の方へ引き戻されたんだから、これとほどこさように人間の引力が強いと云う事を証拠立てると同時に、自分の所志にもう背そむかねばならぬほどに自分は薄弱なものであつたと云う事をも証拠立てている。手短てみじかに云うと、自分は暗い所へ行く気でいるんだが、実のところはやむを得ず行くんで、何か引つかかりが出来れば、得えたり賢かしこしと普通の娑婆しゃばに留まる了簡りょうかんなんだろうと思われる。幸いに、どてらが向うから引つか

かつてくれたんで、何の気なしに足が後向きに歩き出してしまつたのだ。云わば自分の大目的に申し訳のない裏切りをちよつとして見た訳になる。だからどてらが働く気はないかねと出てくれずに、御前さん野にするかね、それとも山にするかねとでも切り出したら、しばらく安心して忘れかけた目的を、ぎよつと思ひ出させられて、急に暗い所や、人のいない所が怖くなつてぞつとしたに違ない。それほどの娑婆しやば気が、戻り掛ける途端とたんにもう萌きざしていたのである。そうしてどてらに呼ばれば呼ばれるほど、どてらの方へ近寄れば近寄るほど、この娑婆気は一步ごとに増長したものと見える。最後に空脛からすねを二本、棒のようにどてらの真向うに突つ立てた時は、この娑婆気が最高潮に達した瞬間である。その瞬間に働く気はないかねと来た。御粗末などてらだが非常に旨うまく自分の心理状態を利用した勧誘である。

だし抜けの質問に一時はぼんやりしたようなものの、ぼんやりから覚^さめて見れば、自分はいつか娑婆の人間になっている。娑婆の人間である以上は食わなければならない。食うには働かなくつちや駄目だ。

「働いても、いいですが」

答は何の苦もなく自分の口から滑^{すべ}り出してしまった。するとどてらはそうだろうそのはずさと云うような顔つきをした。自分は不思議にもこの顔つきをもつともだと首肯^{しゅこん}した。

「働いても、いいですが、全体どんな事をするんですか」

と自分はここで再び聞き直して見た。

「大変儲^{もう}かるんだが、やって見る気はあるかい。儲^{もう}かる事は受合^{うけあい}なんだ」

どてらは上機嫌^{てい}の体で、にこにこ笑いながら、自分の返事を

待っている。どうせどてらの笑うんだから、愛嬌あいぎょうにもなんにもなつちやいない。元来がんらい笑うだけ損になるようにでき上がってる顔だ。ところがその笑い方が妙になつかしく思われて

「ええやつて見ましょう」
と受けてしまった。

「やつて見る？ そいつあ結構だ。君儲もうかるよ」

「そんなに儲けなくつても、いいですが……」

「え？」

どてらはこの時妙な声を出した。

「全体どんな仕事なんですか」

「やるなら話すが、やるだろうね、お前さん。話した後で厭いやだなんて云われちゃ困るが。きつとやるだろうね」

どてらはむやみに念を押す。自分はそこで、

「やる気です」

と答えた。しかしこの答は前のように自然天然には出なかつた。云わばいきみ出した答である。大抵の事ならやつて退けるが、万一の場合には逃げを張る氣と見えた。だからやりますと云わずにやる氣ですと云つたんだろう。——こう自分の事を人の事のように書くのは何となく変だが、元來人間は締りのないものだから、はつきりした事はいくら自分の身の上だつて、こうだとは云い切れない。まして過去の事になると自分も人も區別はありやしない。すべてがだるうに變化してしまふ。無責任だと云われるかも知れないが本當だから仕方がない。これからさきも危^{あや}しいところはいつでもこの式で行くつもりだ。

そこでどてらは略^{ほぼ}話^{ましま}が纏^{まと}つたものと呑^のみ込んで

「じゃ、まあ御^お這^{はい}入り。緩^{ゆっ}くり御茶でも呑^のんで話すから」

と云う。別に異存もないから、茶店に這入つてどてらの隣りに腰をおろしたら、口のゆがんだ四十ばかりの神さんかみが妙な臭いにおのする茶を汲んで出した。茶を飲んだら、急に思い出したように腹が減つて来た。減つて来たのか、減つていたのに気がついたのか分らない。蝨口がまぐちには三十二錢這入っている、何か食おうかしらと考へていると

「君、煙草たばこを呑むかい」

と、どてらが「朝日」の袋を横から差し出した。なかなか御世辞がいい。袋の角かどが裂けてるのは仕方がないが、何だか薄穢うすぎたなく垢あかづいた上に、びしやりと押し潰つぶされて、中にある煙草がかたまつて、一本になつてゐるように思われる。袖そでのないどてらだから、入れ所に窮して腹掛はらがけの隠しへでも据ねじ込んで置くものと見える。

「ありがとうございます、たくさんです」

と断ると、どてらは別に失望の体もなく、自分でかたまつたうちの一本を、爪垢つまあかのたまつた指先で引つ張り出した。はたせるかな煙草は皺しわだらけになつて、太刀たちのように反そっている。それでも破けた所もないと見えて、すばすば吸うと鼻から煙けむが出る。際きわどいところで煙草の用を足しているから不思議だ。

「御前さん、幾年いくつになんさる」

どてらは自分の事を御前さんと云つたり君と云つたりするようだが、何で区別するんだか要領を得ない。今までのところで察して見ると、儲もくかるときには君になつて、不断の時には御前さんに復するようにも見える。何でも儲かる事がだいぶん気になつてゐるらしい。

「十九です」

と答えた。実際その時は十九に違なかつたのである。

「まだ若いんだね」

と口のゆがんだ神さんが、後向うしろむきになつて盆を拭ふきながら云つた。後向きだから、どんな顔つきをしているか見えない。独り言ひとりごとだかどてらに話しかけてるんだか、それとも自分を相手にする気なんだか分らなかつた。するとどてらは、さも調子づいた様子で、

「そうさ、十九じゃ若いもんだ。働き盛りだ」

と、どうしても働かなくつちやならないような語気である。自分しやうぎはだまつて床几しょうぎを離れた。

正面に駄菓子だがしを載のせる台があつて、縁ふちの毀とれた菓子箱の傍そばに、

大きな皿がある。上に青い布巾ふきんがかかつている下から、丸い揚げまんじゅうあげまんじゅうは揚饅頭はあげまんじゅうが食み出している。自分はこの饅頭が喰いたくなつたか

ら、腰を浮かして菓子台の前まで来たのだが、傍そばへ来て、つらつら饅頭まんじゅうの皿を覗のぞき込んで見ると、恐ろしい蠅だ。しかもそれが皿の前で自分が留いまるや否いなや足音にパツと四方に散ったんで、おやと思ひながら、気を落ちつけて少しく揚饅頭を物色していると、散らばった蠅は、もう大風が通り越したから大丈夫だと申し合せたように、再びぱつと饅頭の上へ飛び着いて来た。黄色きいろい油切った皮の上に、黒いぽちぽちが出鱈目でたらめにできる。手を出そうかなと思う矢先へもつて来て、急に黒い斑点はんでんが、晴夜せいやの星宿せいしゅくのごとく、縦横みおろに行列するんだから、少し辟易へきえきしてしまつて、ぼんやり皿を見下みおろしていた。

「御饅頭を上がんなさるかね。まだ新しい。一昨日おととい揚げたばかりだから」

かみさんは、いつの間まにか盆を拭いてしまつて、菓子台の向側むこうがわ

に立っている。自分は不意と眼を上げて神さんを見た。すると神さんは何と思つたか、いきなり、節太ふしふとの手を皿の上に翳かげして、「まあ、大変な蠅だ事」

と云いながら、翳した手をたて豎に切つて、二三度左右へ振つた。

「上がるんなら取つて上げよう」

神さんはたちまち棚の上から木皿を一枚おろして、長い竹の箸はしで、饅頭をぽんぽんぽんと七つほど挟はさみ込んで、

「こつちがいいでしょう」

と木皿を、自分の腰を掛けていた床几しょうぎの上へ持つて行つた。自分は仕方がないからまたもとの席へ帰つて、木皿の隣へ腰を掛けた。見ると、もう蠅が飛んで来ている。自分は蠅と饅頭と木皿を眺ながめながら、どてらに向つて

「一つどうです」

と云つて見た。これはあながち「朝日」の御礼のためばかりではない。幾分かはどてらが一昨日揚げた蠅だらけの饅頭を食うだろうか食わないだろうか試して見る腹もあつたらしい。するとどてらは

「や、すまない」

と云いながら、何の苦もなく一番上の奴やつを取つて頬張ほおばつちまつた。唇くちびるの厚い口をもごつかせているところを観察すると、満更まんざらでもなさそうに見えた。そこで自分も思い切つて、こちら側の下から、比較的奇麗きれいなのを摘つまみ出して、あんぐりやつた。油の味が舌の上へ流れ出したと思う間もなく、その中から苦い餡あんが卒然として味覚を冒おかして来た。しかしこの際だから別にしまつたとも思わなかつた。難なく餡も皮も油もぐいと胃の腑ふへ吞のみ下くだしてしまつたら、自然と手がまた木皿の方へ出たから不思議

なものだ。どてらはこの時もう第二の饅頭を平らげて、第三に移っている。自分に比較すると大變速力が早い。そうして食つてゐる間は口を利^きかない。働く事も儲^{もう}かる事もまるで忘れてゐるらしい。したがつて七つの饅頭は呼吸^{いき}を二三度するうちに無くなつてしまつた。しかも自分はたつた二つしか食わない。残る五つは瞬^{またた}く間^まにどてらのためにしてやられたのである。

いかに逡巡^{しりごみ}をするほどの汚^{きた}ならしいものでも、一度皮切りをやると、あとはそれほど神経に障^{さわ}らずに食えるものだ。これはあとで山へ行つてしみじみ経験した事で、今では何でもない陳腐^{ちんぷ}の真理になつてしまつたが、その時は饅頭^{まんじゅう}を食いながら少々呆^{あき}れたくらい後^{あと}が食いたくなつた。それに腹は減つてゐる。その上相手がどてらである。このどてらが事もなげに、砂のついた饅頭をぱくつくところを見ると、多少は競争の気味にもなつて、

神経などは有つても役に立たない、起すだけが損だと云う心持になる。そこで自分はとうとう神さんにたのんで饅頭の御代りおかわを貰つた。

今度は「一つ、どうです」とも何とも云わずに、木皿が床几しょうぎの上に乗るや否や、自分の方でまず一つ頬張ほおぼつた。するとどて、
らも、「や、すまない」とも何とも云わずに、だまつて一つ頬張つた。次に自分がまた一つ頬張る。次にどて、らがまた一つ頬張る。たがいちがい互違に頬張りつ子をして六つ目まで来た時、たつた一つ残つた。これが幸い自分の番に当っているので、どて、らが手を出さないうちに、自分が頬張つてしまった。それからまた御代りを貰つた。

「君だいぶやるね」

とどて、らが云つた。自分はだいぶやる気も何もなかったが、云

われて見るとだいぶやるに違ない。しかしこれは初手しよてにどてらの方で自分の食いたくないものを、むしやむしや食つて見せて、自分の食慾を誘致した結果が与あずつて力あるようだ。ところがどてらの方では全然こっちの責任でだいぶやつてるような口氣こうきであつた。だから自分は何だかどてらに対して弁解して見たい氣がしたが、弁解する言葉がちよつと出て来なかつた。ただ雲を攫つかむようにどてらにも責任があるんだろうと思うだけで、どこが責任なんだか分らなかつたから黙つていた。すると

「君、揚饅頭がよつぽど好きと見えるね」

と今度は云つた。饅頭にも寄り切りで、一昨日おととい揚げた砂だらけの蠅だらけの饅頭が好きな訳はない。と云つて現に三皿まで代えて食うものを嫌きらだとは無論云われない。だから今度も黙つていた。そこへ茶店の神さんが突然口を出した。――

「うちの御饅おまんは名代の御饅だから、みんなが旨うまがつて食べるだよ」

神さんの言葉を聞いた時自分は何だか馬鹿にされてるような気がした。そこでますます黙もくつてしまった。黙もくつて聞いてると、

「旨い事この上なしだ」

とどてらが云つてゐる。本当なんだか御世辞なんだかちよつと見当けんとうがつかなかった。とにかく饅頭はどうでも構かまわないから、肝心かんじんの労働問題を聞糾きぎただして見ようと思つて、

「先刻さつきの御話ですがね。実は僕もいろいろの事情があつて、働いて飯を食わなくっちゃならない身分なんです、いったいどんな事をやるんですか」

とこつちから口を切つて見た。どてらは正面の菓子台を眺ながめていたが、この時急に顔だけ自分の方へ向けて

「君、儲かるんだぜ。嘘じゃない、本当に儲かる話なんだから是非やりたまえ」

と、またぞろ自分を君呼わりにして、しきりに儲けさせたがつている。こつちへ向き直つて、自分を誘い出そうと力める顔つきを見ると、頬骨の下が自然と落ち込んで、落ち込んだ肉が再び顎の枠で角張つている。そこへ表から射し込む日の加減で、小鼻の下から弓形にでき上った皺が深く映つている。この様子を見た自分は何となく儲けるのが恐ろしくなった。

「僕はそんなに儲けなくつても、いいです。しかし働く事は働くです。神聖な労働なら何でもやるです」

どてらの頬の辺には、はてなと云う景色がちよつと見えたが、やがて、かの弓形の皺を左右に開いて、脂だらけの齒を遠慮なく剥き出して、そうして一種特別な笑い方をした。あとから考

えるとどてらには神聖な労働と云う意味が通じなかつたらしい。いやしくも人間たるものが金儲かねもうけの意味さえ知らないで、こむずかしい口巧者くちこうしゃな事を云うから、氣の毒だと云うのでどてらは笑つたのである。自分は今が今まで死ぬ氣でいた。死なないまでも人間のいない所へ行く氣でいた。それができ損そこなつたから、生きるために働く氣になつたまでである。儲もうかるとか儲からないとか云う問題は、てんで頭の中にはない。今ないばかりじゃない、東京にいて親の厄介やっかいになつてゐる時分からなかつた。どころじゃない儲主義もうけしゆぎは大いに輕蔑けいべつしていた。日本中どこへ行つてもそのくらいな考えは誰にもあるだろうくらいに信じていた。だからどてらがさつきから儲かる儲かると云うのを聞きたんびに何のためだろうと不思議に思つていた。無論癩しやくには障さわらない。癩に障るような身分でもなし、境遇でもないから、いつこう平氣で

はいたが、これが人間に対する至大の甘言で、勧誘の方法として、もつとも利目ききめのあるものだとは夢にも想いおも至らなかつた。そこで、どてらから笑われちまつた。笑われてさえいつこう通じなかつた。今考えると馬鹿馬鹿しい。

一種特別な笑い方をしたどてらは、その笑いの収まりかけに、「お前さん、全体今まで働いた事があんなさるのかね」

と少し真面目な調子で聞いた。働くにも働かないにも、昨日きのう自宅を逃げ出したばかりである。自分の経験で働いた試しは撃剣げっけんの稽古けいこと野球の練習ぐらいなもので、稼かせいで食った事はまだ一日もない。

「働いた事はないです。しかしこれから働かなくつちやあならない身分です」

「そうだろう。働いた事がなくつちや……じゃ、君、まだ儲け

た事もないんだね」

と当り前の事を聞いた。自分は返事をする必要がないから、黙つてると、茶店のかみさんが、菓子台のうしろ後から、

「働くからにや、儲けなくつちやあね」

と云いながら、立ち上がった。どてらが、

「全くだ。儲けようつたつて、今時そう儲け口が転がつてるもんじゃない」

と幾分か自分に対して恩に被きせるように答えるのを、

「そうさ」

と幾分かさげすむように聞き流して、裏へ出て行つた。このそうさが妙に氣になつて、ことによると、まだその後あとがあるかも知れないと思つたせいかな、何気なく後姿うしろかげを見送つていると、大きな黒松の根方ねがたのところへ行つて、立小便たちしょうべんをし始めたから、急

に顔を背^{そむ}けて、どてらの方を向いた。どてらはすぐ、

「私^{わたし}だから、お前さん、見^うず知らずの他人にこんな旨^{うま}い話をす

るんだ。これがほかのものだったら、受合^{うあ}つてただじゃ話^わしつ
こない旨^うい口^{くち}なんだからね」

とまた恩^きに被^かせる。自分は、面倒くさいからおとなしく、

「ありがたいです」

と四角張^{しかくぢやう}つて答^こえて置^おいた。

「実はこう云^いう口^{くち}なんだがね」

と、どてらが、すぐ云^いう。自分は黙^{もく}つて聞^きいていた。

「実はこう云^いう口^{くち}なんだがね。銅^{やま}山^{やま}へ行^いつて仕^し事^じをするんだが、

私^{わたし}が周旋^{しゆせん}さえすれば、すぐ坑^{くわ}夫^ふになれる。すぐ坑^{くわ}夫^ふになれりや

大^{だい}したもんじやないか」

自分^{うな}は何か返^へ事^じを促^{うなが}されるような氣^きがしたけれども、どうもど、

てらの調子に載^のせられて、そうですとは答える訳に行かなかつた。坑夫と云えば鉋山の穴の中で働く労働者に違ない。世の中に労働者の種類はだいぶんあるだろうが、そのうちでもつとも苦しくつて、もつとも下等なものが坑夫だとばかり考えていた矢先へ、すぐ坑夫になれりや大したものだと云われたのだから、調子を合すどころの騒ぎじゃない、おやと思うくらい内心では少からず驚いた。坑夫の下にはまだまだ坑夫より下等な種属がある^{とおみそか}と云うのは、大晦日^{あと}の後にまだたくさん日が余つてると云うのと同じ事で、自分にはほとんど想像がつかなかった。実を云うとどてらがこんな事を饒舌^{しゃべ}るのは、自分を若年^{じゃくねん}と侮^{あなど}つて、好い加減に人を瞞^{だま}すのではないかと考えた。ところが相手は存外真面目である。

「何しろ、取附^{とっつけ}からすぐに坑夫なんだからね。坑夫なら楽なも

んさ。たちまちのうちに金がうんと溜たまつちまつて、好きな事が出来らあね。なに銀行もあるんだから、預けようと思やあ、いつでも預けられるしさ。ねえ、御かみさん、初めつから坑夫になれりや、結構なもんだね」

とかみさんの方へ話の向むきを持つて行くとかみさんは、さつき裏で、立ちながら用を足したままの顔をして、

「そうとも、今からすぐ坑夫になつて置きやあ四五年立つうちにや、唸うなるほど溜うなるばかりだ。——何しろ十九だ。——働き盛りだ。——今のうち儲けなくつちや損だ」

と一句、一句間あいだを置いて独り言ひとごとのように述べている。

要するにこのかみさんも是非坑夫になれと云わぬばかりの口占くちうらで、全然どてらと同意見を持つているように思われた。無論それでよろしい。またそれでなくつてもいつこう構わない。妙な

事にこの時ほどおとなしい気分になれた事は自分が生れて以来始めてであつた。相手がどんな間違を主張しても自分はただはいはいと云つて聞いていたろうと思う。実を云うと過去一年間において仕出^{しで}かした不都合やら義理やら人情やら煩悶^{はんもん}やらが破裂して大衝突を引き起した結果、あてどもなくここまで落ちて来たのだから、昨日^{きのう}までの自分の事を考えると、どうしたつて、こんなに温和^{おとな}しくなれる訳がないのだが、實際この時は人に逆^{さか}うような気分は薬にしたくつても出て来なかつた。そうしてまたそれを矛盾とも不思議とも考えなかつた。おそらく考える余裕がなかつたんだろう。人間のうちで纏^{まと}つたものは身体^{からだ}だけである。身体が纏^{まと}つてるもんだから、心も同様に片づいたものだと思つて、昨日^{きのう}と今日^{きょう}とまるで反対の事をしながらも、やはりもとの通りの自分だと平気で済ましているものがだいぶある。

のみならずいったん責任問題が持ち上がって、自分の反覆^{はんぷく}を詰^{なじ}られた時ですら、いや私の心は記憶があるばかりで、実はばらばらなんですからと答えるものがないのはなぜだろう。こう云う矛盾をしばしば経験した自分ですら、無理と思いながらも、いささか責任を感じようだ。して見ると人間はなかなか重宝^{ちようほう}に社会の犠牲になるように出来上ったものだ。

同時に自分のばらばらな魂がふらふら不規則に活動する現状を目撃して、自分を他人扱いに観察した蟲^{むい}貞^い目^{きめ}なしの真相から割り出して考えると、人間ほどの^{あて}的にならないものはない。約束とか契^{ちかい}とか云うものは自分の魂を自覚した人にはとても出来ない話だ。またその約束を楯^{たて}にとつて相手をぎゅぎゅ押しつけるなんて蛮行^{やば}は野暮^{やぼ}の至りである。大抵の約束を実行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があるにもかかわら

ず、その無理を強^{しい}て圧^おしかくして、知らぬ顔でやつて退^のけるま
である。決して魂の自由行動じゃない。はやくから、ここに
気がついたなら、むやみに人を恨^{うら}んだり、悶^{もだ}えたり、苦しまぎ
れに自宅^{うち}を飛び出したりしなくつても済んだかも知れない。た
とい飛び出してもこの茶店まで来て、どてらと神さんに対する
自分の態度が、昨日までの自分とは打つて変つたところを、他
人扱いに落ち着き払つて比較するだけの余裕があつたら、少し
は悟れたろう。

惜しい事に当時の自分には自分に対する研究心と云うものが
まるでなかった。ただ口^く惜^やしくつて、苦しくつて、悲しくつて、
腹立たしくつて、そうして気の毒で、済^すまなくつて、世の中が厭^{いや}
になつて、人間が棄^すて切れないで、いても立つても、いたたまれ
ないで、むちやくちやに歩いて、どてらに引つ掛つて、揚饅頭^{あげまんじゅう}

を喰つたばかりである。昨日は昨日、今日は今日、一時間前は
一時間前、三十分後は三十分後、ただ眼前の心よりほかに心と
云うものがまるでなくなつちまつて、平生から繫続つなぎの取れない
魂がいとどふわつき出して、実際あるんだか、ないんだかすこ
ぶる明瞭めいりょうでない上に、過去一年間の大きな記憶が、悲劇の夢の
ように、朦朧もうろうと一団の妖氛ようふんとなつて、虚空遥こくうはるかに際限もなく立て
罩こめてるような心持ちであつた。

そこで平生の自分なら、なぜ坑夫になれば結構なんだとか、
どうして坑夫より下等なものがあるんだとか、自分は儲もうける事
ばかりを目的に働く人間じゃないとか、儲けさえすりやどこが
いいんだとか、何とかかとか理窟りくつを捏こねて、出来るだけ自己を
主張しなければ勘弁かんべんしないとこころを、ただおとなしく控えてい
た。口だけおとなしいのではない、腹の中からまるで抵抗する

氣が出なかつたのである。

何でもこの時の自分は、単に働けばいいと云う事だけを考えていたらしい。いやしくも働きさえすれば、——いやしくもこのふわふわの魂が五体のうちに、うろつきながらもいられさえすれば、——要するに死に切れないものを、強て殺してしまうほどの無理を冒さない以上は、坑夫以上だろうが、坑夫以下だろうが、儲かろうが、儲かるまいが、とんと問題にならなかつたものと見える。ただ働く口さえ出来ればそれで結構であるから、働き方の等級や、性質や、結果について、いかに自分の意見と相容れぬ法螺ほらを吹かれても、またその法螺が、単に自分を誘致するためにする打算的の法螺であつても、またその法螺に乗る以上は理知の人間として自分の人格にすくな虧からぬ汚点を貽すのこ恐れがあつても、まるで氣にならなかつたんだらう。こんな時

には複雑な人間が非情に単純になるもんだ。

その上坑夫と聞いた時、何となく嬉しい心持がした。自分は第一に死ぬかも知れないと云う決心で自宅を飛出したのである。それが第二には死ななくっても好いから人のいない所へ行きたいと移つて来た。それがまたいつの間にか移つて、第三にはともかくも働こうと変化しちまつた。ところで、さて働くとなると、並の働き方よりも第二に近い方がいい、一歩進めて云えば第一に縁故のある方が望ましい。第一、第二、第三と知らぬ間に心変りがしたようなものの、変りつつ進んで来た、心の状態は、うやむやの間に縁を引いて、擦れ落ちながらも、振り返つて、もとの所を慕いつつ押されて行くのである。単に働くと云う決心が、第二を振り切るほど突飛でもなかったし、第一と交渉を絶つほど遠くにもいなかったと見える。働きながら、人の

いない所にいて、もつとも死に近い状態で作業が出来れば、最後の決心は意のごとくに運びながら、幾分か当初の目的にも叶う訳になる。坑夫と云えば名前の示すごとく、坑の中で、目の見ない家業である。娑婆にいなながら、娑婆から下へ潜り込んで、暗い所で、鉤塊土塊を相手に、浮世の声を聞かないで済む。定めて陰気だろう。そこが今の自分には何よりだ。世の中に人間はごてごてにいるが、自分ほど坑夫に適したものはけつしてないに違ない。坑夫は自分に取って天職である。——とここまで明瞭には無論考えなかったが、ただ坑夫と聞いた時、何となく陰気な心持ちがして、その陰気がまた何となく嬉しかった。今思い出して見ると、やっぱりどうあっても他人の事としか受け取れない。

そこで自分はどてらに向つてこう云つた。

「僕は一生懸命に働くつもりですが、坑夫にしてくれるでしょうか」

するとどてらはなかなか鷹揚な態度で、

「すぐ坑夫になるのはなかなかむずかしいんだが、私が周旋さ
えすりやきつとできる」

と云うから自分もそんなものかなと考えて、しばらく黙つてい
ると、茶店のかみさんがまた口を出した。

「長蔵さんが口を利きさえすりや、坑夫は受合だ」
ちようぞう うけあい

自分はこの時始めてどてらの名前が長蔵だと云う事を知った。

それからいつしよに汽車に乗ったり、下りたりする時に、自分
もこの男を捕えて二三度長蔵さんと呼んだ事がある。しかし長
蔵とはどう書くのか今もつて知らない。ここに書いたのはもち
ろん当字である。始めて家庭を飛出した鼻をいきなり引つ張つ

て、思いも寄らない見当けんとうに向けた、云わば自分の生活状態に一転化を与えた人の名前を口で覚えていながら、筆に書けないのは異いな事だ。

さてこの長蔵さんと、茶店のかみさんがきつと坑夫になれると受合うから、自分もなれるんだろうと思つて、

「じゃ、どうか何分願います」

と頼んだ。しかしこの茶店に腰を掛けているものが、どうして、どこへ行つて、どんな手続で坑夫になるんだかその辺へんはさつぱり分らなかつた。

何しろ先方でこのくらい勧めるものだから、何分願いますと云つたら、長蔵さんがどうかするに違ないと思つて、あとは聞かずに黙つていた。すると長蔵さんは、勢いよくどてらの尻しやうぎを床几から立てて、

「それじゃこれから、すぐに出掛けよう。御前さん、支度したくはいかい。忘れものがないようによく気をつけて」

と云った。自分はうちを出る時、着のみ着のままで出たのだから、身体からだよりほかに忘れ物のあるはずがない。そこで、

「何にも無いです」

と立ち上がったが、神さんと顔を見合せて気がついた。肝心かんじんの揚げまんじゅう

揚げ饅頭の代を忘れている。長蔵ながぞうさんは平気な面つらをして、もう半

分ほど葎よしず簀すの外に出て往来を眺ながめていた。自分は懷中から三十

二銭入りの墓口がまぐちを出して饅頭三皿の代を払って、ついでだから

茶代として五銭やった。饅頭の代はとうとう忘れちまつて思い出せない。ただその時かみさんが、

「坑夫になつて、うんと溜めて歸りにまた御寄おより」

と云つたのを記憶している。その後坑夫のちはやめたが、ついにこ

の茶店へは寄る機会がなかった。それから長蔵さんに尾^ついて、例の飽き飽きした松原へ出て、一本筋を足の甲^{ほこり}まで埃^{ほこり}を上げて、やって来ると、さつきの長たらしいのに引き易^かえて今度は存外早く片づいちまった。いつの間^まにやら松がなくなったら、板橋街道のような希^け知^ちな宿^{しゆく}の入口に出て来た。やッぱり板橋街道のように我^が多^た馬^ば車^{しや}が通る。一足先へ出た長蔵さんが、振り返って、

「御前さん馬車へ乗るかい」

と聞くから、

「乗つても好いです」

と答えた。そうしたら今度は

「乗らなくつてもいいかい」

と反対の事を尋ねた。自分は

「乗らなくつてもいいです」

と答えた。長蔵さんは三度目に

「どうするね」

と云ったから、

「どうでもいいです」

と答えた。その内に馬車は遠くへ行つてしまった。

「じゃ、歩く事にしよう」

と長蔵さんは歩き出した。自分も歩き出した。向うを見ると、

今通つた馬車の埃が日光にまぶれて、往來が濁つたように黄色

く見える。そのうちに人通りがだんだん多くなる。町並がしだ

いに立派になる。しまいには牛込の神樂坂くらいな繁昌する所

へ出た。ここいらの店付や人の様子や、衣服は全く東京と同じ

事であつた。長蔵さんのようなのはほとんど見当らない。自分

は長蔵さんに、

「ここは何と云う所です」

と聞いたら、長蔵さんは、

「ここ？　ここを知らないのかい」

と驚いた様子であつたが、笑いもせずすぐ教えてくれた。それで所の名は分つたがここにはわざと云わない。自分がこの繁華な町の名を知らなかつたのをよほど不思議に感じたと見えて、長蔵さんは、

「お前さん、いつたい生れはどこだい」

と聞き出した。考えると、今まで長蔵さんが自分の過去や経歴について、ついぞ一と口も自分に聞いた事がなかつたのは、人を周旋する男の所為しよゐとしては、少しく無頓着むとんじやく過ぎるようにも思われたが、この男は全くそんな事に冷淡な性たちであつた事が後あとで分つた。この時の質問は全く自分の無知に驚いた結果から出た

好奇心に過ぎなかつた。その証拠には自分が、

「東京です」

と答えたら、

「そうかい」

と云つたなり、あとは何にも聞かずに、自分を引つ張るようにして、ある横町を曲つた。

実を云うと自分は相当の地位を有つたものの子である。込み入つた事情があつて、耐え切れずに生家うちを飛び出したようなものの、あながち親いやに対する不平や面当つらあてばかりの無分別むふんべつじゃない。何となく世間が厭いやになつた結果として、わが生家まで面白くなくなつたと思つたら、もう親の顔も親類の顔も我慢にも見ていられなくなつていた。これは大変だと気がついて、根氣に心を取り直そうとしたが、遅かつた。踏み答えて見ようと百方に焦慮あせ

れば焦慮るほど厭になる。揚句あげくの果は踏張ふんばりの栓せんが一度にどつと抜けて、堪忍かんにんの陣立そうくずが総崩れとなつた。その晩にとうとう生家を飛び出してしまつたのである。

事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がいる。そしてその少女の傍そばにまた一人の少女がいる。この二人の少女の周囲まわりに親がある。親類がある。世間が万遍なく取り捲まいている。ところが第一の少女が自分に対して丸くなつたり、四角になつたりする。すると何かの因縁いんねんで自分も丸くなつたり四角になつたりしなくつちやなくなる。しかし自分はそう丸くなつたり四角になつたりしては、第二の少女に対して済まない約束をもつて生れて来た人間である。自分は年の若い割には自分の立場をよく弁別わきまえていた。が済まないと思えば思うほど丸くなつたり四角になつたりする。しまいには形態ばかりじゃない組織

まで変るようになって来た。それを第二の少女が恨めしうらに見ている。親も親類も見ている。世間も見ている。自分は自分の心が伸びたり縮んだり、曲ったりくねったりするところを、どうかして隠そうと力めたが、何しろ第一の少女の方で少しもやめてくれないで、むやみに伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから、隠し終せる段じやない。親にも親類にも目つかってしまった。怪しからんと云う事になった。怪しかるとは自分でも思っていないが、だんだん聞き糾して見ると、怪しからん意味がだいぶ違つてゐる。そこでいろいろ弁解して見たがなかなか聞いてくれない。親の癖に自分の云う事をちつとも信用しないのが第一不都合だと思ふと同時に、第一の少女の傍にいたら、この先どうなるか分らない、ことに因ると實際弁解の出来ないような怪しからん事が出来するかも知れないと考え出

した。がどうしても離れる事が出来ない。しかも第二の少女に
対しては氣の毒である、濟まん事になったと云う念が日々烈し
くなる。——こんな具合で三方四方から、両立しない感情が攻
め寄せて来て、五色の糸のこんがらかったように、こつちを引
くと、あつちの筋が詰る、あつちをゆるめるところこつちが釣れる
と云う按排あんばいで、乱れた頭はどうあつても解けないほど。いろいろに
工夫を積んで自分に愛想あいその尽きるほどひねくつて見たが、とう
てい思うように纏まとまらないと云う一点張いってんばりに落ちて来た時に——
やつと氣がついた。つまり自分が苦しんでるんだから、自分で
苦みを留めるよりほかに道はない訳だ。今までは自分で苦しみ
ながら、自分以外の人を動かして、どうにか自分に都合のいい
ような解決があるだろうと、ひたすらに外のみを当あてにしていた。
つまり往来で人と行き合った時、こつちは突ツ立ったまま、向

うが泥濘^{ぬかるみ}へ避^よけてくれる工面^{くめん}ばかりしていたのだ。こつちが動かない今のままのこつちで、それで相手の方だけを思う通りに動かそうと云う出来ない相談を持ち懸^かけていたのだ。自分が鏡の前に立ちながら、鏡に写る自分の影を気にしたつて、どうなるもんじやない。世間の掟^{おきて}という鏡が容易に動かせないとする、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である。

そこで自分はこの入り組んだ関係の中から、自分だけをふいと煙^{けむ}にしてしまおうと決心した。しかし本当に煙にするには自殺するよりほかに致し方がない。そこでたびたび自殺をしかけて見た。ところが仕掛けるたんびにどきんとしてやめてしまった。自殺はいくら稽古^{けいこ}をしても上手にならないものだと言ふ事をようやく悟った。自殺が急に出来なければ自滅するのが好かろうとなった。しかし自分は前に云う通り相当の身分のある親

を持つて朝夕に事を欠かぬ身分であるから生家うちにいては自滅しようがない。どうしても逃亡かけおちが必要である。

逃亡かけおちをしてもこの関係を忘れる事は出来まいとも考えた。また忘れる事が出来るだろうとも考えた。要するに、して見なければ分らないと考えた。たとい煩悶はんもんが逃亡につき纏まとつて来るにしてもそれは自分の事である。あとに残った人は自分の逃亡のために助かるに違いないと考えた。のみならず逃亡をしたつて、いつまでも逃亡かけおちちている訳じゃない。急に自滅がしにくいから、まずその一着として逃亡ちて見るのである。だから逃亡ちて見てもやつぱり過去に追われて苦しいようなら、その時徐おもむろに自滅の計はかりごとを廻めぐらしても遅くはない。それでも駄目ときまればその時こそきつと自殺して見せる。——こう書くと自分はいかにも下らない人間になってしまふが、事実を露骨に云うとこれだけの

事に過ぎないんだから仕方がない。またこう書けばこそ下らなくなるが、その当時のぼんやりした意気込いきごみを、ぼんやりした意気込のままに叙したなら、これでも小説の主人公になる資格は十分あるんだろうと考える。

それだけでなくつても実際その当時の、二人の少女の有様やら、日ひごとに変る局面の転換やら、自分の心配やら、煩悶やら、親の意見や親類の忠告やら、何やらかやらを、そっくりそのまま書き立てたら、だいぶん面白い続きものができるんだが、そんな筆もなし時もないから、まあやめにして、せつかくの坑夫事件だけを話す事にする。

とにかくこう云う訳で自分はいよいよとなつて出奔しゅつぽんしたんだから、固もとより生きながら葬ほうごられる覚悟でもあり、また自ら葬みづかつてしまふ了簡りようけんでもあつたが、さすがに親の名前や過去の歴史は

いくら棄鉢すてばちになつても長蔵さんには話したくなかつた。長蔵さんばかりじゃない、すべての人間に話したくなかつた。すべての人間は愚か、自分にさえできる事なら語りたくないほど情ない心持でひよろひよろしていた。だから長蔵さんが人を周旋する男にも似合わず、自分の身元について一言も聞き糺たださなかつたのは、変と思ひながらも、内々嬉しかった。本当を云うと、当時の自分はまだ嘘うそをつく事をよく練習していなかつたし、ごまかすと云う事は大変な悪事のように考えていたんだから、聞かれたら定めし困つたろうと思う。

そこで長蔵さんに尾ついて、横町を曲つて行くと、一二丁行つたか行かないうちに町並まちばらが急に疎まばらになつて、所々は田圃たんぼの片割れが細く透いて見える。表はあんなに繁昌しても、繁昌は横幅だけであるなと気がついたら、また急に横町を曲らせられて、

また賑にぎやかな所へ出された。その突当りが停車場ステーションであつた。汽車に乘らなくつては坑夫になる手続きが済まないんだと云う事をこの時ようやく知つた。実は鉾山の出張所でもこの町にあつて、まずそこへ連れて行かれて、そこからまた役人が山へでも護送してくれるんだらうと思つていた。

そこで停車場へ這入はいる五六間手間になつてから、

「長蔵さん、汽車に乗るんですか」

と後うしろから、呼び掛けながら聞いて見た。自分がこの男を長蔵さんと云つたのはこの時が始めてである。長蔵さんはちよつと振り返つたが、あかの他人から名前を呼ばれたのを不審がる様子もなく、すぐ、

「ああ、乗るんだよ」

と答えたなり、停車場に這入つた。

自分は停車場の入口に立つて考え出した。あの男はいつたい自分といっしょに汽車へ乗って先方まで行く気なんだろうか、それにしては余り親切過ぎる。なんぼなんでも見ず知らずの自分にこう叮嚀ていねいな世話を焼くのはおかしい。ことによると彼奴あいつは詐欺師かたりかも知れない。自分は下らん事に今更のごとくはつと気がついて急に汽車へ乗るのが厭いやになって来た。いつその事また停車場を飛び出そうかしらと思つて、今までプラットフォームの方を向いていた足を、入口の見当けんとうに向け易えた。しかしまだ歩き出すほどの決心もつかなくつたと見えて、茫然ぼうぜんとして、停車場前の茶屋の赤い暖簾のれんを眺めながてしていると、いきなり大きな声を出して遠くから呼びとめられた。自分はこの声を聞くと共に、その所有者は長蔵さんであつて、松原以来の声であると云う事を悟つた。振り返ると、長蔵さんは遠方から顔だけ斜はすに出して、

しきりにこちらを見て、首を豎に振っている。何でも身体は便所の塀にかくれているらしい。せつかく呼ぶものだからと思つて、自分は長蔵さんの顔を目的に歩いて行くと、

「御前さん、汽車へ乗る前にちよつと用を足したら善かろう」と云う。自分はそれには及ばんから、一応辞退して見たが、なかなか承知しそうなないから、そこで長蔵さんと相並んで、きたない話だが、小便を垂れた。その時自分の考えはまた変つた。自分は身体よりほかに何にも持つていない。取られようにも瞞られようにも、名誉も財産もないんだから初手から見込の立たない代物である。昨日の自分と今日の自分とを混同して、長蔵さんを恐ろしがったのは、免職になりながら俸給の差し押を苦にするようなものであつた。長蔵さんは教育のある男ではあるまいが、自分の風体を見て一目騙るべからずと看破するには教

育も何も要^いつたものではない。だからことによると、自分を坑夫に周旋して、あとから周旋料でも取るんだろうと思ひ出した。それならそれで構わない。給料のうちの幾分かやれば済む事だなどと考えながら用を足した。——実は自分がこれだけの結論に到着するためには、わずかの時間内だがこれほどの手数^{てすう}と推論とを要したのである。このくらい骨を折つてすら、まだ長蔵さんのポン引きなる事をいわゆるポン引きなる純粹の意味において会得^{えとく}する事が出来なかつたのは、年が十九だつたからである。

年の若いのは実に損なもので、こんなにポン引きの近所までどうか、どうか、漕^こぎつけながら、それでも、もしや好意ずくの世話ずきから起つた親切じゃあるまいかと思つて、飛んだ気兼をしたのはおかしかつた。

実は二人して、用を足して、のそのそ三等待合所の入口まで来た時、自分は比較的威儀を正して長蔵さんに、こんな事を云つたのである。

「あなたに、わざわざ先方^{さき}まで連れて行つていただいては恐縮ですから、もうこれでたくさんです」

すると長蔵さんは返事もせずに変な顔をして、黙つて自分の方を見ているから、これは礼の云いようがわるいのかとも思つて、

「いろいろ御世話になつてありがとうございます。これから先はもう僕一人でやりますから、どうか御構いなく」

と云つて、しきりに頭を下げた。すると、

「一人でやれるものかね」

と長蔵さんが云つた。この時だけは御前^{はま}さんを省いたようであ

る。

「なにやれます」

と答えたら、

「どうして」

と聞き返されたんで、少し面喰めんくらったが、

「今貴方あなたに伺って置けば、先へ行って貴方の名前を云って、ど

うかしますから」

ともじもじ述べ立てると、

「御前さん、私わたしの名前くらいで、すぐ坑夫になれると思ってるの

は大間違いだよ。坑夫なんて、そんなに容易になれるもんじや

ないよ」

と跳はねつけられちまった。仕方がないから

「でも御気の毒ですから」

と言訳かたがた挨拶あいさつをすると、

「なに遠慮さきしないでもいい、先方まで送おくつてあげるから心配しないがいい。——袖そで摩すり合うも何とかの因縁いんねんだ。ハハハハハ」と笑った。そこで自分は最後に、

「どうも済みません」

と礼を述べて置いた。

それから二人でベンチへ隣り合せに腰を掛けていると、だん

だん停車場ステーションへ人が寄よつてくる。大抵は田舎者いなかものである。中には長

蔵さんのような裨天兼はんてんけんどてらを着た上に、天秤棒てんびんぼうさえ荷かついだの

がある。そうかと思うと光沢つやのある前掛を締めて、中折帽を妙

に凹へこました江戸ッ子流あきゆうどの商人もある。その他の何やらかやらで

ベンチの四方が足音と人声でざわついて来た時に、切符口の戸が
かたりと開あいた。待ち兼ねた連中は急いで立ち上がって、み

んな鉄網かなあみの前へ集ってくる。この時長蔵さんの態度は落ちつき
払ったものであった。例の太刀たちのごとくそつくりかえった「朝
日」を厚い唇くちびるの間に啣くわえながら、あの角張かどばった顔を三さんが二にほど
自分の方へ向けて、

「御前さん、汽車賃を持っていなさるかい」

と聞いた。また自分の未熟なところを発表するようだが、実を云
うと汽車賃の事は今が今まで自分の考えには毫ごうも上のぼらなかった
のである。汽車に乗るんだなと思ひながら、いくら金を払うも
のか、また金を払う必要があるものか、とんと思ひ至いたらなかった
のは愚ぐの至いたである。愚はどこまでも承認するがこの質問に出逢であ
うまでは無賃ただで乗れるかのごとき心持で平気でいたのは事実で
ある。よく分らないけれども、何でも自分の腹の底には、長蔵さ
んにさえ食くついてさえおれば、どうかしてくれるんだらうと

云う依頼心が妙に潜^{ひそ}んでいたんだろう。ただし自分じゃけつしてそう思っていないかった。今でもそうだとはい自分の事ながら申しにくい。けれども、こう云う安心がないとすれば、いくら馬鹿だつて、十九だつて、停車場^{ステーション}へ来て汽車賃の汽^きの字も考えずにいられるもんじゃない。その癖こんなに依頼している長蔵さんに対して、もう御世話にならなくつても、好^{こう}うございますの、これから一人で行きますのと平^{ひら}に同行を断つたのは、どう云う了^{りよう}簡^{けん}だろう。自分はこう云う場合にたびたび出逢^{であ}つてから、しまいには自分で一つの理論を立てた。――病気に潜伏期があるごとく、吾^{われわれ}々の思想や、感情にも潜伏期がある。この潜伏期の間には自分でその思想を有^もちながら、その感情に制せられながら、ちつとも自覚しない。またこの思想や感情が外界の因縁^{いんねん}で意識の表面へ出て来る機会がないと、生涯^{しょうがい}その思想や感情の支

配を受けながら、自分はけつしてそんな影響を蒙^{こうぶ}つた覚^{おぼえ}がないと主張する。その証拠はこの通りと、どしどし反対の行為言動をして見せる。がその行為言動が、傍^{はた}から見ると矛盾になつてゐる。自分でもはてなと思う事がある。はてなと気がつかないでもとんだ苦しみを受ける場合が起つてくる。自分が前に云つた少女に苦しめられたのも、元はと云えば、やつぱりこの潜伏者を自覚し得なかつたからである。この正体の知れないものが、少しも自分の心を冒^{おか}さない先に、劇薬でも注射して、ことごとく殺し尽す事が出来たなら、人間幾多の矛盾や、世上幾多の不幸は起らずに済んだらうに。ところがそう思うように行かんのは、人にも自分にも気の毒の至りである。

それで、自分が長蔵さんから「御前さん汽車賃を持つていなさるか」と問われた時に、自分ははつと思つて、少からず狼狽^{うろた}え

た。三十二銭のうちで饅頭まんじゅうの代と茶代を引くと何にもありやしない。汽車賃もない癖に、坑夫になろうなんて呑込のみこみ顔に受合つたんだから、自分は少し図迂ずうずう迂迂しい人間であつたんだと気がついたら、急に頬辺ほつべたが熱くなつた。その時分の事を考えると自分ながら可愛らしい。これが今だったら、たとい電車の中で借金しんきんの催促をされようとも、ただ困るだけで、けつして赤面しやくめんはしない。ましてぼん引きの長蔵さんなどに対して、神聖なる羞恥しゆううちの血色を見せるなんてもつたない事は、夢にもやる氣遣きづかいはありやしない。

自分はとう云うものか、長蔵さんに対して汽車賃はありますと答えたかつた。しかし實際がないんだから嘘うそを吐く訳には行かない。嘘を吐きつ放ばなしにして済ませられるなら、思い切つて、嘘を吐く事にしようが、とにかく今切符をかうと云う間際まぎわで、

吐けばすぐ露現ろけんしてしまうんだから始末がわるい。と云つて汽車賃はありませんと答えるのがいかにも苦痛である。どうも子供だから、しかも満更まんざらの子供でなくつて、少し大きくなりかけた、色気のついた、煩悶はんもんをしている、つまらん常識があるような、ないような子供だから、なおなお不都合だった。そこで汽車賃はありますとも、ありませんとも云いにくかったもんだから、

「少しあります」

と答えた。それも響の物に応ずるごとく、停滞なく出ればよかったが、何しろもったいなくも頬辺を赤くしたあとで、はなはだ恐縮の態度で出したんだから、馬鹿である。

「少しつて、御前さん、いくら持つてるい」

と長蔵さんが聞き返した。長蔵さんは自分が頬辺を赤くしても、

恐縮しても、まるで頓着とんじやくしない。ただいくら持つてるか聞きたい様子であつた。ところがあいにく肝心かんじんの自分にはいくらあるか判然しない。何しろしめめて三十二銭のうち、饅頭まんじゅうを三皿食つて、茶代を五銭やつたんだから、残るところはたくさんじゃない。あつても無くつても同じくらいなものだ。

「ほんのわずかです。とても足りそうもないです」

と正直なところを云うと、

「足りないところは、私わたしが足して上げるから、構わない。何しろ有るだけ御出し」

と、思ったよりは平気である。自分はこの際一銭銅や二銭銅を勘定するのは、いかにも体裁ていさいがわるいと考えた上に、有るものを無いと隠すように取られては厭いやだから、懐ふところから例の臺口がまぐちを取り出して、臺口ごと長蔵さんに渡した。この臺口は鰐わにの皮で拵こしら

えたすこぶる上等なもので、親父から貰う時も、これは高価な品であると云う講釈をとくと聴かされた贅沢物である。長蔵さんは墓口を受け取つて、ちよつと眺めていたが、

「ふふん、安くないね」

と云つたなり中味も改めずに腹掛の隠しへ入れちまつた。中味を改めないところはよかつたが、

「じゃ、私が切符を買つて来て上げるから、ちゃんとここに待っていないくつちや、いけない。はぐれると、坑夫になれないんだからね」

と念を押して、ベンチを離れて切符口の方へすたすた行つてしまった。見ていると人込の中へ這入つたなり振り返りもしないで切符を買う番のくるのを待つてゐる。さつき松原の掛茶屋を出てから、今先方までの長蔵さんは始終自分の傍に食つついて

いて、たまに離れると便所からでも顔を出して呼ぶくらいであつたのに、墓口を受け取つて、切符を買う時はまるで自分を忘れてゐるように見受けられた。あんまり人が多くつて、こつちへ眼をつける暇がなかつたんだろう。これに反して自分は一生懸命に長蔵さんの後姿を見守つて、札を買う順番が一人一人に廻つて来るたんびに長蔵さんがだんだん切符口へ近づいて行くのを、遠くから妙な神経を起して眺^{なが}めていた。墓口は立派だが中を開けられたら銅貨が出るばかりだ。開けて見て、何だこれっぱかりしか持つていないのかと長蔵さんが驚くに違ない。どうも気の毒である。いくら足し前をするんだらうなどと入らざる事を苦^くに病^やんでゐると、やがて長蔵さんは平生^{へいぜい}の顔つきで帰つて来た。

「さあ、これが御前さんの分だ」

と云いながら赤い切符を一枚くれたぎりいくら不足だとも何とも云わない。きまりが悪かったから、自分もただ

「ありがとう」

と受取ったぎり賃銭の事は口へ出さなかった。墓口の事もそれなりにして置いた。長蔵さんの方でも墓口の事はそれつきり云わなかった。したがって墓口はついに長蔵さんにやった事になる。

それから、とうとう二人して汽車へ乗った。汽車の中では別

にこれと云う出来事もなかった。ただ自分の隣りに腫物できものだらけ

の、腐爛ただれめ目の、痘痕あばたのある男が乗ったので、急に心持が悪くなつ

て向う側へ席を移した。どうも当時の状態を今からよく考えて

見るとよつぽどおかしい。生家うちを逃亡かけおちて、坑夫にまで、なり下さが

る決心なんだから、大抵の事に辟易へきえきしそうもないもんだがやつ

ぱり醜きたないものの傍そばへは寄りつきたくなかった。あの按排あんばいでは自殺の一日前でも、腐爛目の隣を逃げ出したに違ない。それなら万事さちようめんこう几帳面に段落をつけるかと思うと、そうでないから困る。第一長蔵さんや茶店のかみさんに逢あった時なんぞは平生の自分にも似ず、喁ぐうの音ねも出さずに心しんからおとなしくしていた。議論も主張も気概きがいも何もあつたもんじゃありやしない。もつともこれはだいぶ餓ひもじい時であつたから、少しは差引いて勘定を立たてるのが至当だが、けつして空腹のためばかりとは思えない。どうも矛盾——また矛盾が出たから廃よそう。

自分は自分の生活中もつとも色彩の多い当時の冒険を暇さえあれば考え出して見る癖がある。考え出すたびに、昔の自分の事だから遠慮なく厳密なる解剖の刀を揮ふるつて、縦横たてよこ十文字に自分の心緒しんしよを切りさいなんで見るが、その結果はいつも千遍一律

で、要するに分らないとなる。昔^{むか}しだから忘れちまつたんだな
どと云つてはいけない。このくらい切実な経験は自分の生涯^{しょうがい}中
に二度とありやしない。二十^{はたち}以下の無分別から出た無茶だから、
その筋道が入り乱れて要領を得んのだと評してはなおいけない。
経験の当時こそ入り乱れて滅^{めつた}多やたらに盲動するが、その盲動
に立ち至るまでの経過は、落ち着いた今日^{こんにち}の頭腦の批判を待た
なければとても分らないものだ。この鉾山^{ゆき}行だつて、昔の夢の
今日だから、このくらい人に解るように書く事が出来る。色気
がなくなつたから、あらいざらい書き立てる勇氣があると云う
ばかりじゃない。その時の自分を今の眼の前に引^{ひきず}擦り出して、
根掘り葉掘り研究する余裕がなければ、たといこれほどにだつ
てとうてい書けるものじゃない。俗人はその時その場合に書い
た経験が一番正しいと思うが、大間違である。刻^{こっか}下の事情と云

うものは、てんしゅん 転瞬の客氣に驅られて、とんでもない誤謬ごびゅうを伝え勝ちのものである。自分の鉾山行などもその時そのままの心持を、日記にでも書いて置いたら、定めし乳臭い、氣取った、偽りの多いものが出来上ったろう。とうてい、こうやって人の前へ御覽下さいと出された義理じゃない。

自分が腐爛目の難を避けて、向う側に席を移すと、長蔵さんは一目ちよつと自分と腐爛目を見たなりで、やはり元の所へ腰を掛けたまま動かなかつた。長蔵さんの神経が自分よりよほど剛健なものには少からず驚嘆した。のみならず、平氣な顔で腐爛目と話し出したに至つて、少しく愛想あいそが尽きた。

「また山行きかね」

「ああまた一人連れて行くんだ」

「あれかい」

と腐爛目は自分の方を見た。長蔵さんはこの時何か返事をしかけたんだろうがふと自分と顔を見合せたものだから、そのまま厚い唇を閉じて横を向いてしまった。その顔について廻って、腐爛目は、

「まただいぶん儲かるね」

と云った。自分はこの言葉を聞くや否やたちまち窓の外へ顔を出した。そうして窓から唾液つばきをした。するとその唾液が汽車の風で自分の顔へ飛んで来た。何だか不愉快だった。前の腰掛で知らない男が二人弁じている。

「泥棒が這入はいるとするぜ」

「こそそこそがかい」

「なに強盗がよ。それでもつて、拔身ぬきみか何かで威嚇おどした時によ」

「うん、それで」

「それで、主人が、泥棒だからってんで贖錢にせがねをやつて歸したとするんだ」

「うんそれから」

「後あとで泥棒が贖錢と気がついて、あすこの亭主は贖錢つかい使だつて方々振れて歩くんだ。常公つねこうの前めえだが、どつちが罪が重
いと思う」

「どつちたあ」

「その亭主と泥棒がよ」

「そうさなあ」

と相手は解決に苦しんでいる。自分は眠ねぶくなつたから、窓の所へ頭を持たしてうとうとした。

寝ると急に時間が無くなつちまう。だから時間の経過が苦痛になるものは寝るに限る。死んでもおそろく同じ事だろう。し

かし死ぬのは、やさしいようでなかなか容易でない。まず凡人は死ぬ代りに睡眠で間に合せて置く方が軽便である。柔道^{ひなが}をやる人が、時々^{ほうゆう}朋友に咽喉^{のど}を締めて貰う事がある。夏の日永^{ひなが}のだるい時などは、絶息したまま五分も道場に死んでいて、それから^{かつ}活を入れさせると、生れ代るような好い気分になる——ただし人の話だが。——自分は、もしや死につきりに死んじまやしないかと云う神経のために、ついぞこの荒療治^{あらりようじ}を頼んだ事がない。睡眠はこれほどの効験もあるまいが、その代り生き戻り^{そこな}損う危険^{ともな}も伴っていないから、心配のあるもの、煩悶^{はんもん}の多いもの、苦痛に堪^たえぬもの、ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるものに取っては、至大なる自然の賚^{たまもの}である。その自然の賚が偶然にも今自分の頭の上に落ちて来た。ありがたいと礼を云う閑^{ひま}もないうちに、うつとりとしちまつて、生きている以上は是非

共その経過を自覚しなければならぬ時間、丸潰しに潰して
いた。ところが眼が覚めた。後から考えて見たら、汽車の動
てる最中に寝込んだから、汽車の留つたために、眠りが
調子を失つてどこかへ飛んで行つたのである。自分は眠つて
ると、時間の経過だけは忘れてゐるが、空間の運動には依然と
して反応を呈する能力があるようだ。だから本当に煩悶を忘れ
るためにはやはり本当に死ななくつては駄目だ。ただし煩悶が
なくなつた時分には、また生き返りたくなるにきまつてゐるから、
正直に理想を云うと、死んだり生きたり互違にするのが一番よ
ろしい。——こんな事をかくと、何だか剽軽な冗談を云つてゐ
ようだが、けつしてそんな浮いた見じやない。本気に真面目を
話してゐるつもりである。その証拠にはこの理想はただ今過去を
回想して、面白半分興に乗じて、好い加減につけ加えたんじや

ない。實際汽車が留つて、不意に眼が覚めた時、この通りに出て来たのである。馬鹿ばか氣げた感じだから滑稽こっけいのように思われるけれどもその時は正直にこんな馬鹿氣た感じが起つたんだから仕方がない。この感じが滑稽に近ければ近いほど、自分は当時の自分を可愛想かわいそうに思うのである。こんな常識をはずれた希望を、真面目まじめに抱いだかねばならぬほど、その時の自分は情なさけない境遇におつたんだと云う事が判然するからである。

自分がふと眼を開けると、汽車はもう留つていた。汽車が留まつたたと云う考えよりも、自分は汽車に乗つていたんだなと云う考えが第一に起つた。起つたと思うが早いかな、長藏さんがいるんだ、坑夫になるんだ、汽車賃がなかったんだ、生家うちを出奔しゅつぽんしたんだ、どうしたんだ、こうしたんだとまるで十二三のたん、だがむらむらと塊かたまつて、頭の底から一度に湧わいて来た。その

速い事と云つたら、言語に絶すると云おうか、電光石火と評しようか、実に恐ろしいくらいだった。ある人が、溺れかかったその刹那に、自分の過去の一生を、細大漏らさずありありと、目の前に見た事があると云う話をその後聞いたが、自分のこの時の経験に因つて考えると、これはけつして嘘じゃなかうと思ふ。要するにそのくらい早く、自分は自分の実世界における立場と境遇とを自覚したのである。自覚すると同時に、急に厭な心持になつた。ただ厭では、とても形容が出来ないんだが、さればと云つて、別に叙述しようもない心持ちだからただの厭でとめて置く。自分と同じような心持ちを経験した人ならば、ただこれだけで、なるほどあれだなと、直勘すぐかんづくだろう。また経験した事がないならば、それこそ幸福だ、けつして知るに及ばない。

その内同じ車室に乗っていたものが二三人立ち上がる。外からも二三人這入^{はい}つて来る。どこへ陣取ろうかと云う眼つきできよろきよろするのと、忘れものはないかと云う顔つきでうろうろするのと、それから何の用もないのに姿勢を更^かえて窓へ首を出したり、欠伸^{あくび}をしたりするのと、が一度に合併して、すべて動揺の状態に世の中を崩^{くず}し始めて来た、自分は自分の周囲のものが、ことごとく活動しかけるのを自覺していた。自覺すると共に、自分は普通の人間と違つて、みんなが活動する時分でさえ、他に釣り込まれて気分が動いて来ないような仲間外^{はず}れだと考えた。袖^{そで}が触^すれ違つて、膝^{ひざ}を突き合せていながらも、魂だけはまるで縁^{ゆかり}も由緒もない、他界から迷い込んだ幽霊のような氣持であつた。今までは、どうか、どうか、人並に調子を取つて来たのが汽車が留まるや否や、世間は急に陽氣になつて上へ騰^{あが}る。

自分は急に陰気になつて下へ降る、とうてい交際つきあいはできないんだと思うと、背中と胸の厚さがしゅうと減つて、臟腑ぞうふが薄うすつ片な一枚の紙のように圧おしつけられる。途端に魂だけが地面の下へ抜け出しちまつた。まことに申訳のない、御恥ずかしい心持ちをふらつかせて、凹へこんでいた。

ところへ長蔵さんが、立つて来て、

「御前さん、まだ眼が覚めないかね。ここから降りるんだよ」と注意してくれた。それでようやくなるほどと気がついて立ち上つた。魂が地の底へ抜け出して行く途中でも、手足に血が通かよつてゐるうちは、呼ぶと返つて来るからおかしなものだ。しかしこれがもう少し烈はげしくなると、なかなか思うように魂が身体からだに寄りついてくれない。その後台湾沖で難船した時などは、ほとんど魂に愛想あいそを尽かされて、非常な難義をした事がある。何なんにで

も上には上があるもんだ。これが行き留りだの、突き当りだの
と思つて、安心してかかると、とんだ目に逢う。しかしこの時
はこの心持が自分に取つてもつとも新しくて、しかもはなはだ
苦^{にが}い経験であつた。

長蔵さんのどてらの尻を嗅^かぎながら改札場から表へ出ると、
大きな宿^{しゆく}の通りへ出た。一本筋の通りだが存外広い、ばかりで
はない、心持の判然^{はつきり}するほど真直^{まつすぐ}である。自分はこの広い往還^{おうかん}
の真中に立つて遙^{はる}か向うの宿外^{しゆくはずれ}を見下^{みおろ}した。その時一種妙な心
持になつた。この心持ちも自分の生涯^{しょうがい}中にあつて新らしいもの
であるから、ついでにここに書いて置く。自分は肺の底が抜け
て魂が逃げ出しそうなところを、ようやく呼びとめて、多少人
間らしい了簡^{りようけん}になつて、宿の中へ顔を出したばかりであるから、
魂が吸^ひく息につれて、やつと胎内に舞い戻つただけで、まだふ

わふわしている。少しも落ちついていない。だからこの世にいても、この汽車から降りても、この停車場ステーションから出ても、またこの宿の真中に立つても、云わば魂がいよいよやながら、義理に働いてくれたようなもので、けっして本気の沙汰さたで、自分の仕事として引き受けた専門の職責とは心得られなかつたくらい、鈍い意識の所有者であつた。そこで、ふらついている、気の遠くなっている、すべてに興味を失つた、かなつぽ眼まなこを開いて見ると、今までは汽車の箱に詰め込まれて、上下四方とも四角に仕切られていた限界が、はつと云う間まに、一本筋の往還を沿うて、十丁ばかり飛んで行つた。しかもその突当りに滴したたるほどの山が、自分の眼を遮りながらも、邪魔にならぬ距離を有もつて、どろんとしたわが眸ひとみを翠みどりの裡うちに吸寄せている。——そこで何んとなく今云つたような心持になつちまつたのである。

第一には大道砥のごとしと、成語にもなつてゐるくらいで、平た

い真直な道は蟠まりのない爽さわやかなものである。もつと分り安く云

うと、眼を迷まよつかせない。心配せずにこつちへ御出おいでと誘うよう

にでき上つてゐるから、少しも遠慮や気兼きがねをする必要がない。ば

かりじゃない。御出と云うから一本筋の後あとを喰ツついて行くと、

どこまでも行ける。奇体な事に眼が横町へ曲りたくない。道が

真直に続いていればいるほど、眼も真直に行かなくなつては、窮

屈でかつ不愉快である。一本の大道は眼の自由行動と平行して

成り上つたものと自分は堅く信じている。それから左右の家並いえなみ

を見ると、——これは瓦葺かわらぶきも藁葺わらぶきもあるんだが——瓦葺だろう

が、藁葺だろうが、そんな差別はない。遠くへ行けば行くほど

しだいしだいに屋根が低くなつて、何百軒とある家が、一本の

針金で勾配こうばいを纏まとめられるために向うのはずれからこつちまで突

き通されてるように、行儀よく、斜はすに一筋を引つ張つて、どこまでも進んでいる。そうして進めば進むほど、地面に近寄つてくる。自分の立つている左右の二階屋などは——宿屋のように覚えてゐるが——見上げるほどの高さであるのに、宿外れの軒を透すかして見ると、指の股またに這入はいると思われるくらい低い。その途中に暖簾のれんが風に動いていたり、腰障子こししょうじに大きな蛤はまぐりがかいてあつたりして、多少の変化は無論あるけれども、軒並のきなみだけを遠くまで追つ掛けて行くと、一里はんセコンドが半秒で眼の中に飛び込んで来る。それほど明瞭めいりようである。

前に云つた通り自分の魂は二日酔ふつかえいの体ていたらくで、どこまでもとろんとしていた。ところへ停車場ステーションを出るや否や断りなしにこの明瞭な——盲目めくらにさえ明瞭なこの景色けしきにぼったりぶつかったのである。魂の方では驚かなくつちやならない。また實際驚いた。

驚いたには違いないが、今まであやふやに不精不精に徘徊して
いた情性を一変して屹となるには、多少の時間がかかる。自分
の前に云った一種妙な心持ちと云うのは、魂が寝返りを打たな
いさき、景色がいかに明瞭であるかと心づいたあと、——そ
の際どい中間に起った心持ちである。この景色はかように暢達
して、かように明白で、今までの自分の情緒とは、まるで似つ
かない、景気のいいものであつたが、自身の魂がおやと思つて、
本気にこの外界に對い出したが最後、いくら明かでも、いくら
暢びりしていても、全く実世界の事実となつてしまう。実世界
の事実となるといかな御光でもありがた味が薄くなる。仕合せ
な事に、自分は自分の魂が、ある特殊の状態にいたため——明
かな外界を明かなりと感受するほどの能力は持ちながら、これ
は実感であると自覚するほど作用が鋭くなかつたため——この

真直な道、この真直な軒を、事実^{じじつ}に等しい明かな夢と見たのである。この世でなければ見る事の出来ない明瞭な程度と、これに伴う爽涼^{はつきり}した快感をもつて、他界の幻影^{まぼろし}に接したと同様の心持になったのである。自分は大きな往来の真中に立っている。その往来はあくまでも長くつて、あくまでも一本筋に通っている。歩いて行けばその外^{はずれ}まで行かれる。たしかにこの宿^{しゆく}を通り抜ける事はできる。左右の家は触^{さわ}れば触る事が出来る。二階へ上^{のぼ}れば上る事が出来る。できると云う事はちゃんと心得ていながらも、できると云う觀念を全く遺失して、単に切実なる感能の印象だけを眸^{ひとみ}のなかに受けながら立っていた。

自分は学者でないから、こう云う心持は何と云うんだか分らない。残念な事に名前を知らないものでついこう長くかいてしまった。学問のある人から見たら、そんな事と笑われるかも

知れないが仕方がない。その後^{のち}これに似た心持は時々経験した事がある。しかしこの時ほど強く起った事はかつてない。だから、ひよつとすると何かの参考になりはすまいかと思つて、わざわざここに書いたのである。ただしこの心持ちは起るとたちまち消えてしまった。

見ると日はもう傾^{かたぶ}きかけている。初夏^{しよか}の日永^{ひなが}の頃だから、日差^{ひざし}から判断して見ると、まだ四時過ぎ、おそらく五時にはなるまい。山に近いせいか、天気は思つたほどよくないが、現に日が出ているくらいだから悪いとは云^なわれぬ。自分は斜^{はす}かけに、長い一筋の町を照らす太陽を眺^{なが}めた時、あれが西の方だと思つた。東京を出て北へ北へと走つたつもりだが、汽車から降りて見ると、まるで方角がわからなくなつていた。この町を真直に町の通つてゐるなりに、下^{くだ}ると、突き当りが山で、その山は方角

から推^おすと、やはり北であるから、自分と長蔵さんは相変らず、北の方へ行くんだと思つた。

その山は距離から云うとだいぶんあるように思われた。高さもけつして低くはない。色は真蒼^{まっさお}で、横から日の差す所だけが光るせいか、陰の方は蒼^{あお}い底が黒ずんで見えた。もつともこれは日の加減と云うよりも杉^{すぎ}櫨^{ひのき}の多いためかも知れない。ともかくも蓊鬱^{こんもり}として、奥深い様子であつた。自分は傾^{かたむ}きかけた太陽から、眼を移してこの蒼い山を眺めた時、あの山は一本立だらうか、または続きが奥の方にあるんだらうかと考えた。長蔵さんと並んで、だんだん山の方へ歩いて行くと、どうあつても、向うに見える山の奥のまたその奥が果しもなく続いていて、そうしてその山々はことごとく北へ北へと連なつているとしか思われなかつた。これは自分達が山の方へ歩いて行くけれど、ただ

行くだけでなかなか麓^{ふもと}へ足が届かないから、山の方で奥へ奥へと引き込んでいくような気がする結果とも云われるし。日がだんだん傾^{かたむ}いて陰の方は蒼い山の上皮^{うわかわ}と、蒼い空の下層^{したがわ}とが、双方で本分を忘れて、好い加減に他の領分^{ひと}を犯^{おか}し合ってるんで、眺める自分の眼にも、山と空の区劃^{くかく}が判然しないものだから、山から空へ眼が移る時、つい山を離れたと云う意識を忘却して、やはり山の続きとして空を見るからだとも云われる。そうしてその空は大変広い。そうして際限なく北へ延びている。そうして自分と長蔵さんは北へ行くのである。

自分は昨夕^{ゆうべ}東京を出て、千住^{せんじゅ}の大橋まで来て、拾^{あわせ}の尻^{はしよ}を端折^{はしよ}つたなり、松原へかかつて、茶店へ腰を掛けても、汽車へ乗つても、空脛^{からすね}のまままで押し通して来た。それでも暑いくらいであつた。ところがこの町へ這^{はい}入ってから何だか空脛では寒い氣持が

する。寒いと云うよりも淋しいんだろう。長蔵さんと黙って足だけを動かしていると、まるで秋の中を通り抜けてるようである。そこで自分はまた空腹になった。たびたび空腹になった事は、どうも詩的ではないが、致し方がない。実際自分は空腹になった。家を出てから、ただ歩くだけで、人間の食うものを食わないから、たちまち空腹になっちまう。どんなに気分がわるくつても、煩悶はんもんがあつても、魂が逃げ出しそうでも、腹だけは十分減るものである。いや、そう云うよりも、魂を落つけるためには飯を供えなくっちゃいけないと云い換えるのが適当かも知れない。品の悪い話だが、自分は長蔵さんと並んで往來の真中を歩きながら、左右に眼をくばって、両側の飲食店を覗のぞき込むようにして長い町を下くだつて行つた。ところがこの町には飲食店が

だいぶんある。旅屋はたごやとか料理屋とか云う上等なものは駄目としても、自分と長蔵さんが這入はいりつてしかるべきや、たいち流りゅうのがあるすこにもここにも見える。しかし長蔵さんは毫ごうも支度したくをしそうにない。最前の我多馬車がたばしやの時のように「御前さん夕食ゆうめしを食うかね」とも聞いてくれない。その癖自分と同じように、きよろきよろ両側に眼を配はきつて何だか発見けしきしたいような気色けしきがありありと見える。自分は今に長蔵さんが恰好かつこうな所を見つけて、晩食ばんめしをしたために自分を連れ込む事と自信して、氣を永く辛抱しながら、長い町を北へ北へと下くだつて行いつた。

自分は空腹を自白さつきしたが、倒れるほどひもじくは無かつた。胃の中にはまだ先刻まんじゅうの饅頭まんじゅうが多少残ざんつてるようにも感ぜられた。だから歩けば歩かれる。ただ汽車を下りるや否や減めり込みこみそうな精神まつすぐが、真直な往来の真中に抛ほうり出されて、おやと眼を覚し

たら、山里の空氣がひやりと、夕日の間から皮膚を冒おかして來た
んで、心機一転の結果としてここに何か食つて見たくなつたん
である。したがつて食わなければ食わないでも済む。長藏さん
何か食わしてくれませんかと言うほど苦しくもなかつた。しか
し何だか口が淋さびしいと見えて、しきりに縄なわ暖簾のれんや、お煮にしめや、
御中食所おちゆうじきどころが氣にかかる。相手の長藏さんがまた申し合せたよう
に右左と覗のぞき込むので、こつちはますます食意くいいじ地が張つてくる。
自分はこの長い町を通りながら、自分らに適當と思う程度の一膳いちぜん
めし屋をついに九軒まで勘定した。数えて九軒目に至つたら、
さしもに長い宿しゆくはとうとうおしまいになり掛けて、もう一町も
行けば宿外しゆくはすれへ出拔ずぬけそうである。はなはだ心細かつた。時に
ふと右側を見ると、また酒めしと云う看板に逢着ほうちやくした。すると
自分の心のうちにこれが最後だなど云う感じが起つた。それが

ためか煤すすけた軒の腰障子こししょうじに、肉太しただに認めた酒めし、御肴おんさかなと云う文字がもつとも劇烈な印象をもつて自分の頭に映じて来た。その映じた文字がいまだに消えない。酒の字でも、めしの字でも、御肴おんさかなの字でもありあり見える。この様子では、いくら耄碌もうろくしてもこの五字だけは、そっくりそのまま、紙の上に書く事が出来るだろう。

自分が最後の酒、めし、御肴をしみじみ見ていると、不思議な事に長蔵さんも一生懸命に腰障子の方に眼をつけている。自分はさすが頑強がんきょうの長蔵さんも今度こそ食いに這入はいるに違なからうと思つた。ところが這入らない。その代りぴたりと留つた。見ると腰障子の奥の方では何だか赤いものが動いている。長蔵さんの顔色を窺うかがうと、何でもこの赤いものを見詰めているらしい。この赤いものは無論人間である。が長蔵さんがなぜ立ち留つて

この赤い人間を覗き込むのか、とんと自分には分らなかつた。人間には違ひないが、ただ薄暗く赤いばかりで、顔つきなどは無論判然しやしない。がと思つて、自分も不審かたがた立ち留つてみると、やがて障子の奥から赤毛布あかげつとが飛び出した。いくら山里でも五月の空に毛布は無用だろうと云う人があるかも知れないが、實際この男は赤毛布で身を堅めていた。その代り下には手織の単衣ひとえもの一枚だけしきや着ていないんだから、つまりしめ見て見ると自分と大した相違はない事になる。もつとも単衣一枚で凌いでると云う事は、あとからの発見で、障子の影から飛び出した時にはただ赤いばかりであつた。

すると長蔵さんは、いきなり、この赤い男の側そばへつかつかやつて行つて、

「お前さん、働く気はないかね」

と云つた。自分が長蔵さんに捕つかまつた時に聞かされた、第一の質問はやはり「働く気はないかね」であつたから、自分はおやまた働かせる気かなと思つて、少からぬ興味の念に駆かられながら二人を見物していた。その時この長蔵さんは、誰を見ても手頃な若い衆しゅとさえ鑑定すれば、働く気はないかねと持ち掛ける男だと云う事を判然はんぜんと覺さとつた。つまり長蔵さんは働かせる事を商売にするんで、けつして自分一人を非常な適任者と認めて、それで坑夫に推挙した訳ではなかつた。おおかたどこで、どんな人に、幾人逢いくたりあおうとも、版行はんこうで押したような口調で御前さん働く気はないかねを根気よく繰返し得る男なんだろう。考えると、よくこんな商売を厭あきもせず、長の歲月としつきやられたものだ。長蔵さんだつて、天性御前さん働く気はないかねに適した訳でもあるまい。やつぱり何かの事情やむを得ず御前さんを復習してい

るんだらう。こう思えば、まことに罪のない男である。要するに芸がないからほかの事は出来ないんだが、ほかの事が出来ないんだと意識して煩悶はんもんする気色けしきもなく、自分でなくつちや御前さん、をやり得る人間は天下広しといえども二人と有るまいと云うほどの平氣な顔で、やっている。

その当時自分にこれだけの長蔵観ちようぞうかんがあつたらだいぶ面白かつたろうが、何しろ魂に逃げだされ損なつてゐる最中だつたから、なかなかそんな余裕は出て来なかつた。この長蔵観は当時の自分を他人と見倣みなして、若い時の回想を紙の上に写すただ今、始めて序じよの節せつに浮かんだのである。だからやッぱり紙の上だけで消えてなくなるんだらう。しかしその時その砌みぎりの長蔵観と比較して見るとだいぶ違つてゐるようだ。――

自分は長蔵さんと赤毛布あかげつとの立談たちばなしを聞きながら、自分は長蔵さ

んから毫ごうも人格を認められていなかったと云う事を見出した。
——もつとも人格はこの際少しおかしい。いやしくも東京を出奔しゅつぽん
して坑夫にまでなり下がるものが人格を云々するうんぬんのは変挺へんてこな矛盾である。それは自分も承知している。現に今筆を執とつて人格と書き出したら、何となく馬鹿ばか氣けでいて、思わず噴ふき出しそうになつたくらいである。自分の過去を顧かえりみて噴き出しそうになる今の身分を、昔と比くらべて見ると実に結構の至りであるが、その時はなかなか噴き出すどころの騒ぎではなかつた。——長蔵さんは明かに自分の人格を認めていなかつた。

と云うのは、彼れはこの酒、めし、御着おんさかなの裏うちから飛び出した若い男を捕つかまえて、第二世の自分であるごとく、全く同じ調子と、同じ態度と、同じ言語と、もつと立ち入つて云えば、同じ熱心の程度をもつて、同じく坑夫になれと勧誘している。それ

を自分はなぜだか少々怪^けしからんように考えた。その意味を今から説明して見ると、ざつとこんな訳^{わけ}なんだろう。――

坑夫は長蔵さんの云うごとくすこぶる結構な家業^{かぎよう}だとは、常識を質に入れた当時の自分にももつとも思ひようがなかった。まず牛から馬、馬から坑夫という位の順だから、坑夫になるのは不名誉だと心得ていた。自慢にやならないと覺^{さと}つていた。だから坑夫の候補者が自分ばかりと思^{おも}いのほか突然居酒屋の入口から赤毛布になつて、あらわれようともし別段神経を悩ますほどの大事件じゃないくらいは分りきつてゐる。しかしこの赤毛布の取扱方が全然自分と同様であると、同様であると云う点に不平があるよりも、自分は全然赤毛布と一般的な人間であると云う氣になつちまう。取扱方の同様なのを延^ひき伸ばして行くと、つまり取り扱われるものが同様だからと云う妙な結論に到着してくる。

自分はふらふらとそこへ到着していたと見える。長蔵さんが働かないかと談判しているのは赤毛布で、赤毛布はすなわち自分である。何だか他人ひとが赤毛布を着て立つてるようには思われない。自分の魂が、自分を置き去りにして、赤毛布の中に飛び込んで、そうして長蔵さんから坑夫になれと談じつけられている。そこで、どうも情なさけなくなっちまった。自分が直接に長蔵さんと応対している間は、人格も何も忘れてるんだが、自分が赤毛布になって、君儲もつかるんだぜと説得ていさされている体裁を、自分が傍わきへ立つて見た日には方かたなしである。自分ははたしてこんなものかと、少しく興を醒さまして赤毛布を、つらつら観察くわんさつしていた。ところが不思議にもこの赤毛布がまた自分と同じような返事をする。被かぶつてゐる赤毛布ばかりじゃない、心底しんぞこから、この若い男は自分と同じ人間だった。そこで自分はつくづくつまらない

なと感じた。その上もう一つつまらない事が重なったのは、長蔵さんが、にくにくしいほど公平で、自分の方が赤毛布あかげつとよりも坑夫に適していると云うところを少しも見せない。全く器械的にやっている。先口せんくちだから、もう少しこつちをひいき鼻屑にしたら好かろうと思うくらいであつた。——これで見ると人間の虚栄心はどこまでも抜けないものだ。窮して坑夫になるとか、ならなもいとか云う切齒詰せつぽつた時でさえ自分はこれほどの虚栄心を有つていた。泥棒に義理があつたり、乞食に礼式があるのも全くこの格なんだろう。——しかしこの虚栄心の方は、自分すなわち赤毛布であると云うことを自覚して、大おおにつまらなくなつたよりも、よほどつまらなさ加減が少かつた。

自分が大まにつまらなくなつて、ぼんやり立っていると、二人ふたりの談判は見る間に片づいてしまった。これは必ずしも長蔵さん

がことほどこように上手だからと云う訳ではない。赤毛布の方がことほどこように馬鹿だったからである。自分はこの男を一概に馬鹿と云うが、あながち、自分に比較して輕蔑けいべつする氣じゃけっしてない。自分の当時は、長蔵さんの話をはいい聞くん点において、すぐ坑夫になろうと承知する点において、その他いろいろの点において、全くこの若い男と同等すなわち馬鹿であつたのである。もし強しいて違ちがうところを詮議せんぎしたら赤毛布を被かぶつてゐると緋かすりを着てゐるとの差違ちがひくらいなものだろう。だから馬鹿と云うのは、自分と同じく氣の毒な人と云う意味で、馬鹿のうちに少しぐらいは同情の意を寓ぐうしたつもりである。

で、馬鹿が二人長蔵さんに尾ついていっしよに銅山まで引つ張られる事になった。しかるに自分が赤毛布と肩を並べて歩き出した時、ふと氣がついて見ると、さっきのつまらない心持ちが

もう消えていた。どうも人間の了見^{りようけん}ほど出たり引つ込んだりするものはない。有るんだなと安心していると、すでにない。ないから大丈夫と思つてると、いや有る。有るようで、ないようでその正体はどこまで行つても捕まらない。その後^{のち}さる温泉場で退屈だから、宿の本を借りて読んで見たらいろいろ下らない御経の文句が並べてあつたなかに、心は三世にわたつて不可得^{ふかどく}なりとあつた。三世にわたるなんてえのは、大袈裟^{おおげさ}な法螺^{ほら}だろ^うが、不可得^{ふかどく}と云うのは、こんな事を云うんじゃないかと思う。もつともある人が自分の話を聞いて、いやそれは念^{ねん}と云うもので心^{こころ}じやないと反対した事がある。自分はいずれでも御随意だから黙つていた。こんな議論は全く余計な事だが、なぜ云いたくなるかという、世間には大変利口な人物でありながら、全く人間の心を解していないものがだいぶんある。心は固

形体だから、去年も今年も虫さえ食わなければ大抵同じもんだろ。うくらいに考へてゐるには弱らせられる。そうして、そう云う呑気な料簡で、人を自由に取り扱うの、教育するの、思うようにして見せるのと騒いでゐるから驚いちゃう。水だつて流れりや返つて来やしない。ぐずぐずしていりや蒸発しちゃう。

とにかくこの際は、赤毛布と並んで歩き出した時、もう先刻のつまらない考へが蒸発してゐたと云う事だけを記憶して置いて貰えばいい。——そうして吾ながら驚いたのは、どうも赤毛布と並んで歩くのが愉快になつて来た。もつともこの男は茨城か何かの田舎もので、鼻から逃げる妙な発音をする。芋の事を芋と訓じたのはこれからさきの逸話に属するが、歩き出したてから、あんまりありがたい音声ではなかつた。その上顔が人並にできてゐなかつた。この男に比べると角張つた顎の、厚唇の長

蔵さんなどは威風堂々たるものである。のみならず茨城の田舎を突つ走つたのみで、いまだかつて東京の地を踏んだことがない。そうして、赤い毛布けつとが妙に臭い。それにもかかわらず自分はこの山里で、銅山行きの味方を得たような心持ちがして嬉しうれかった。自分はどうせ捨てる身だけれども、一人で捨てるより道伴みちづれがあつて欲しいほし。一人で零落おちぶれるのは二人で零落れるのよりも淋しいものだ。そう明らさまに申しては失礼に当るが、自分はこの男について何一つ好いてるところはなかったけれども、ただいっしょに零落れてくれると云う点だけがありがたいのでそれがため大いに愉快を感じた。それで歩き出すや否や、少し話もし掛けて見たくらいに、近しい仲となつてしまった。これから推おして考えると、川で死ぬ時は、きつと船頭の一人や二人を引き擦すり込みたくなるに相違ない。もし死んでから地獄へで

も行くような事があつたなら、人のいない地獄よりも、必ず鬼のいる地獄をえら択ぶだろう。

そう云う訳で、たちまち赤毛布が好きになつて、約一二町も歩いて来たら、また空腹を覚え出した。よく空腹を覚えるようだが、これは前段の続きでけつして新しい空腹ではない。順序を云うと、第一に精神が稀薄になつて、もつとも刻下感こつかかんに乏しい時に汽車を下りたんで、次に真直まっすぐな往来を真直まっすぐに突き当りの山まで見下みおろしたもんだからようやく正氣づいたのは前申まえした通りである。それが機縁になつて、今度は食氣くいけがついて、それから人格を認められていない事を認識して、はなはだつまらなくなつて、つまらなくなつたと思つたら坑夫の同類が出来て、少しく頹勢たいせいを挽回ばんかいしたと云うしだいになる。だに困よつてまた空腹に立ち戻つたと説明したら善く呑み込めるだろう。さて空腹に

はなつたが、最後の膳飯屋いちぜんめしやはもう通り越している。宿しゆくはすでに尽きかかった。行く手は暗い山道である。とうてい願かなは叶ないそうもない。それに赤毛布は今食ったばかりの腹だから、勇ましくどンドン歩く。どうも、降参しちまった。そこで思い切つて、最後の手段として長蔵さんに話しかけて見た。

「長蔵さん、これからあの山を越すんですか」

「あの取附とつぎの山かい。あれを越しちや大変だ。これから左へ切れるんさ」

と云つたなりまたすたすた歩いて行く。どうも是非に及ばない。

「まだよつぽどあるんですか、僕は少し腹が減ったんだが」

と、とうとう空腹の由を自白した。すると長蔵さんは

「そうかい。芋でも食うべい」

と、云いながら、すぐさま、左側の芋屋へ飛び込んだ。よく約

束したように、そこん所とこに芋屋があつたもんだ。これを大袈裟おおげさに云えば天佑てんゆうである。今でもこの時の上出来に行つた有様を回顧すると、おかしいばかりじゃない、嬉しい。もつとも東京の芋屋のように奇麗きれいじゃなかった。ほとんど名状しがたいくらいに真黒になつた芋屋で、芋屋と云えば芋屋だが、芋専門じゃない。と云つて芋のほかは何を売つてゐるんだつたか、今は忘れちまつた。食う方に氣を取られ過ぎたせいかとも思う。

やがて長蔵さんは両手に芋を載のせて、真黒な家うちから、のそりと出て来た。入れ物がないもんだから、両手を前へ出して、

「さあ、食つた」

と云う。自分は眼前に芋を突きつけられながら、ただ

「ありがとう」

と礼を述べて、芋を眺ながめていた。どの芋にしようかと考えた訳で

はない。そんな選択を許すような芋ではなかった。赤くつて、黒くつて、瘡やせていて、湿しめつぽそうで、それで所々皮が剥はげて中から緑青を吹いたような味みが出ている。どれにぶつかつたつて大同小異である。そんなら一目慘澹いちもくさんたんたるこの芋の光景に辟易へきえきして、手を出さなかったかと云うと、そうでもない。自分の胃の状況から察すると、芋中いもちゅうの、とも云わるべきこの御薩おさつを快よく賞翫しょうがんする食欲は十分有つたように思う。しかし「さあ、食つた」と突きつけられた時は、何だかおびえたような気分で、おいきたと手を出し損そくなつた。これはおおかた「さあ、食つた」の云い方が悪かつたんだらう。

自分が芋を取らないのを見て、長蔵さんは、少々もどかしいと云う眼つきで、再び

「さあ」

と、例の顎で芋を指しながら、前へ出した手頸を、食えと云う相
図にちよつと動かした。よく考えて見ると、両手が芋で塞つて
るんで、自分がどうかしてやらないと、長蔵さんは、いくら芋が
食いたくても、口へ持つて行く事ができないんであつた。じれ
たのももつともである。そこで自分はようやく気がついて、二
の腕で、変な曲線を描いて、右の手を芋まで持つて行こうとす
ると、持つて行く途中で、芋の方が一本ころろと往来の中へ
落ちた。これはすぐさま赤毛布が拾つた。拾つたと思つたら、

「この芋は好芋だ。おれが貰おう」

と云つた。それでこの男は芋を芋と発音すると云う事が分つた。

自分はこの時長蔵さんから、最初に二本、あとから一本締て五
本、前後二回に受取つたと記憶している。そうしてそれを懐か
しげに食いながら、いよいよ宿外れまで来るとまた一事件起つ

た。

宿しゆくの外はずれには橋がある。橋の下は谷川で、青い水が流れてい

る。自分はもう町が尽きるんだとは思ひながら、つい芋に心を奪われて、橋の上へ乗つかかるまでは川があるとも気がつか
なかつた。ところが急に水の音がするんで、おやと思うと橋へ
出ている。川がある。水が流れている。——何だか馬鹿氣た話

だが、事実にもっとも近い叙述をやろうとすると、まあ、こ
う書くのが一番適切だろう、こう書いて置く。けつして小説家の
弄もてあそぶような法螺ほら七分の形容ではない。これが形容でないとする

とその時の自分がいかに芋を旨うまがったのかがおのずから分明ぶんめい
なる。さて水音に驚いて、欄干らんかんから下を見ると、音のするのは

もつともで、川の中に大きな石がだいぶんある。そうしてその
形状かっこうがいかに不ふ作法さほうにでき上つて、あたかも水の通り道の邪

魔になるように寝たり、突つ立ったりしている。それへ水がやけにぶつかる。しかもその水には勾配こうばいがついている。山から落ちた勢いをなし崩しくずに持ち越して、追つ懸けかられるように跳つて来る。だから川と云うようなものの、実は幅の広い瀑たきを月賦げつふに引き延ばしたくらいなものである。したがって水の少ない割には大変烈はげしい。鼻はなつ端はしの強い江戸ツ子のようにむやみやたらに突つかかつて来る。そうして白い泡あわを噴ふいたり、青い飴あめのようになつたり、曲つたり、くねつたりして下へ流れて行く。どうも非常にやかましい。時に日はだんだん暮れてくる。仰向あおむいて見たが、日向ひなたはどこにも見えない。ただ日の落ちた方角がぼうつと明るくなつて、その明かるい空を背負しよつてる山だけが目立って蒼黒あおぐろくなつて来た。時は五月だけでも寒いもんだ。この水音だけでも夏とは思われない。まして入日いりひを背中から浴び

て、正面は陰になつた山の色と来たら、——ありや全体何と云う色だろう。ただ形容するだけなら紫でも黒でも蒼あおでも構わないんだが、あの色の氣持を書こうとすると駄目だ。何でもあの山が、今に動き出して、自分の頭の上へ来て、どつと圧おつ被かぶさるんじゃないかと感じた。それで寒いんだろう。實際今から一時間か二時間のうちには、自分の左右前後四方八方ことごとく、あの山のような氣味のわるい色になつて、自分も長蔵さんも茨城県も、全く世界一色いっしきの内に裹つつまれてしまふに違ないと云う事を、それとはなく意識して、一二時間後に起る全体の色を、一二時間前に、入目いりひの方かたの局部の色として認めたから、局部から全体を唆そそのかされて、今にあの山の色が広がるんだと、どつかで虫が知らせたために、山の方が動き出して頭の上へ圧つ被さるんじゃないかと思ふと云う氣を起したんだと——自分は今机

の前で解剖して見た。閑^{ひま}があるとかく余計な事がしたくなつて困る。その時はただ寒いばかりであつた。傍^{そば}にいる茨城県の毛布^{けつと うらや}が羨ましくなつて来たくらいであつた。

すると橋の向うから——向^むたつて突き当りが山で、左右が林だから、人家なんぞは一軒もありやしない。——實際自分はこゝ突然人家が尽きてしまおうとは、自分が自分の足で橋板を踏むまでも思ひも寄らなかつたのである。——その淋^{さむ}しい山の方から、小僧が一人やつて来た。年は十三四くらいで、冷飯草履^{ひやめしぞうり}を穿^はいている。顔は始めのうちによく分らなかつたが、何しろ薄暗い林の中を、少し明るく通り抜けてる石ころ路を、たった一人してこつちへひよこひよこ歩いて来る。どこから、どうして現れたんだか分らない。木下^{こしたやみ}闇の一本路が一二丁先で、ぐりと廻り込んで、先が見えないから、不意に姿を出したり、隠

したりするような仕掛しかけにできてゐるのかも知れないが、何しろ時
が時、場所が場所だから、ちよつと驚いた。自分は四本目の芋いも
を口へ宛あてがつたなり、顎あごを動かす事を忘れて、この小僧をしば
らくの間眺めていた。もつともしばらくと云つたつて、わずか
二十秒くらいなものである。芋はそれからすぐに食い始めたに
違いない。

小僧の方では、自分らを見て、驚いたか驚かないか、その辺は
しかと確められないが、何しろ遠慮なく近づいて来た。五六間
のこつちから見ると頭の丸い、顔の丸い、鼻の丸い、いずれも
丸く出来上つた小僧である。品質から云うと赤毛布あかげつとよりもずつ
と上製である。自分らが三人並んで橋向うの小路こみちを塞ふさいでいる
のを、とんと苦にならない様子で通り抜けようとする。すこぶ
る平気な態度であつた。すると長蔵さんが、また、

「おい、小僧さん」

と呼び留めた。小僧は臆おくした気色けしきもなく

「なんだ」

と答えた。ぴたりと踏み留とどまつた。その度胸には自分も少々驚いた。さすがこの日暮に山から一人で降りて来るがものはある。自分などがこの小僧の年輩の頃は夜青山の墓地を抜けるのがいささか苦になったものだ。なかなかえらいと感心していると、

長蔵さんは、

「芋いもを食わないかね」

と云いながら、食い残しを、気前よく、二本、小僧の鼻さきの前に出した。すると小僧はたちまち二本とも引つたくるように受け取って、ありがとうとも何とも云わず、すぐその一本を食い始めた。この手っ取り早い行動を熟視した自分は、なるほど山か

ら一人で下りてくるだけあつて自分とは少々訳が違うなと、また感心しちまつた。それとも知らぬ小僧は無我無心に芋を食っている。しかも頬張^{ほおば}つた奴^{やつ}を、唾液^{つばき}も交^まぜずに、むやみに呑^のみ下^{くだ}すので、咽喉^{のど}が、ぐいぐいと鳴るように思われた。もう少し落ちついて食う方が楽だろうと心配するにもかかわらず、当人は、傍^{はた}で見るほど苦しくはないと云わんばかりにぐいぐい食う。芋だから無論堅いもんじゃない。いくら鵜呑^{うのみ}にしたつて咽喉に傷のできつこはあるまいが、その代り咽喉がいつぱいに塞^{ふさ}がつて、芋が食道を通り越すまでは呼^い息^きの詰る恐れがある。それを小僧はいつこう苦にしない。今咽喉がぐいと動いたかと思うと、またぐいと動く。後^{あと}の芋が、前^{さき}の芋を追^おつ懸^かけてぐいぐい胃の腑^ふに落ち込んで行くようだ。二本の芋は、随分大きな奴だった^まが、これがためたちまち見る間に無くなつてしまった。そうし

て、小僧はついに何らの異状もなかった。自分ら三人は何にも云わずに、三方から、この小僧の芋を食うところを見ていたが、三人共、食つてしまふまで、一句も言葉を交^かわさなかつた。自分は腹の中^{うち}で少しはおかしいと思つた。しかし何となく憐れだつた。これは単に同情の念ばかりではない。自分が空腹になつて、長蔵さんに芋をねだつたのは、つい、今しがたで、餓^{ひも}じい記憶は気の毒なほど近くにあるのに、この小僧の食い方は、自分より二三層倍餓^{ひも}じそうに見えたからである。そこへ持つて来て、長蔵さんが、

「旨^うまかつたか」

と聞いた。自分は芋へ手を出さない先からありがとうと礼を述べたくらいだから、食つたあとの小僧は無論何とか云うだろうと思つていたら、小僧はあやにく何とも云わない。黙つて立つ

ている。そうして暮れかかる山の方を見た。後から分つたがこの小僧は全く野生で、まるで礼を云う事を知らないんだつた。それが分つてからはさほどにも思わなかつたが、この時は何だ顔に似合わない無愛嬌な奴だなと思つた。しかしその丸い顔を半分傾けて、高い山の黒ずんで行く天辺を妙に眺めた時は、また可愛想になつた。かわいそうそれからまた少し物騒になつた。なぜ物騒になつたんだかはちよつと疑問である。小さい小僧と、高い山と、夕暮と山の宿とが、何か深い因縁で互に持ち合つてるのかも知れない。詩だの文章だのと云うものは、あんまり読んだ事がないが、おそらくこんな因縁に勿体をつけて書くもんじやないかしら。そうすると妙な所で詩を拾つたり、文章にぶつかりするもんだ。自分はこの永年方々を流浪してあるいて、折々こんな因縁に出つ食わして我ながら変に感じた事が時々ある。

——しかしそれも落ちついて考えると、大概解けるに違ない。この小僧なんかやつぱり子供の時に聞いた、山から小僧が飛んで来たが化け損そくなつたところくらいだろう。それ以上は余計な事だから考えずに置く。何しろ小僧は妙な顔をして、黒い山てっぺんの天辺を眺めていた。

すると長蔵さんがまた聞き出した。

「御前、どこへ行くかね」

小僧はたちまち黒い山から眼を離して、

「どこへも行きやあしねえ」

と答えた。顔に似合わずすこぶる無愛想ぶあいそうである。長蔵さんは平気なもんで、

「じゃどこへ帰るかね」

と、聞き直した。小僧も平気なもんで、

「どこへも帰りやしねえ」

と云つてゐる。自分はこの問答を聞きながら、ますます物騒な感じがした。この小僧は宿無^{やどなし}に違ないんだが、こんなに小さい、こんなに淋しい、そうして、こんなに度胸^{すわ}の据つた宿無を、今までかつて想像した事がないものだから、宿無とは知りながら、ただの宿無に附属する憐れ^{あわ}とか気の毒とかの念慮よりも、物騒の方が自然勢力を得たしだいである。もつとも長蔵さんにはそんな感じは少しも起らなかったらしい。長蔵さんは、この小僧が宿無か宿無でないかを突き留めさえすれば、それでたくさんだったんだろう。どこへも行かない、またどこへも帰らない小僧に向つて、

「じゃ、おいらといつしよにおいで。御金を儲け^{もう}さしてやるから」

と云うと、小僧は考えもせず、すぐ、

「うん」

と承知した。赤毛布あかげつとと云い、小僧と云い、実に面白いように早

く話が纏まとまつてしまふには驚いた。人間もこのくらい簡単にで

きていたら、御互に世話はなからう。しかしそう云う自分がこ

の赤毛布にもこの小僧にも遜ゆずらないもつとも世話のかからない

一人であつたんだから妙なもんだ。自分はこの小僧の安受合やすうけあいを

見て、少からず驚くと共に、天下には自分のように右へでも左

へでも誘われしだい、好い加減に、ふわつきながら、流れて行く

ものぐだいぶんあるんだと云う事に気がついた。東京にいと

きは、目眩めまぐるしいほど人が動いていても、動きながら、みんな根ねが生

えてるんで、たまたま根が抜けて動き出したのは、天下広しと

いえども、自分だけであらうくらいで、千住から尻はしよを端折つて

歩き出した。だから心細さも人一倍であつたが、この宿で、は
からずも赤毛布あかげつとを手に入れた。赤毛布を手に入れてから、二十
分と立たないうちにまたこの小僧を手に入れた。そうして二人
とも自分よりは遙はるかに根が抜けている。こう続々同志が出来てく
ると、行く先は山だろうが、河だろうが、あまり苦にはならな
い。自分は幸か不幸か、中以上の家庭に生れて、昨日きのうの午後九
時までは申し分のない坊ちゃんとして生活していた。煩悶はんもんも坊
ちゃんとしての煩悶であつたのは勿論もちろんだが、煩悶の極試きよくみたこ
の驅落かけおちも、やつぱり坊ちゃんとしての驅落であつた。さればこ
そ、この驅落に対して、不相当にもつたいぶつた意味をつけて、
ありがたがらないまでも、一生の大事件のように考えていた。
生死しょうしの分れ路のように考えていた。と云うものは坊ちゃんの眼
で見渡した世の中には、驅落をしたものは一人もない。――た

まにあれば新聞にあるばかりである。ところが新聞では駆落が平面になつて、一枚の紙に浮いて出るだけで、云わばあぶり出しの駆落だから、食べたつて身にはならない。あたかも別世界から、電話がかかったようなもので、はあ、はあ、と聞いてる分の事である。だから本当の意味で切実な駆落をするのは自分だけだと云うありがたみがつけ加わってくる。もつとも自分はただ煩悶して、ただ駆落をしたままで、詩とか美文とか云うものを、あんまり読んだ事がないから、自分の境遇の苦しさ悲しさを一部の小説と見立てて、それから自分でこの小説の中を縦横じゆうおうに飛び廻つて、大いに苦しがったりまた大いに悲しがたりして、そうして同時に自分の惨状を局外から自分と観察して、どうも詩的だなどと感心するほどなませた考えは少しもなかった。自分が自分の駆落に不相当なありがたみをつけたと云うのは、

自分の不経験からして、さほど大袈裟おおげさに考えなくても済む事を、さも仰山ぎやうさんに買い被かぶつて、独りひとでどぎまぎしていた事実を指さすのである。しかるにこのどぎまぎが赤毛布に逢あい、小僧に逢あつて、ふたり兩人の平然たる態度を見ると共に、いつの間にやら薄らいだのは、やっぱり経験の賜たまものである。白状すると当時の赤毛布でも当時の小僧でも、当時の自分よりよっぽど偉かつたようだ。

こう手もなく赤毛布がかかる。小僧がかかる。そう云う自分も、たわいもなく攻め落された事実を綜合そうごうして考えて見ると、なるほど長蔵さんの商売も、満更まんざら待ち草臥くたびれの骨折損になる訳でもなかつた。坑夫になれますよ、はあ、なれますか、じやなりましよう和二つ返事で承知する馬鹿は、天下広しといえども、尻端折しりはしよりで夜逃をした自分くらいと思つていた。したがつて長蔵さんのような気楽な商売は日本にたつた一人あればたくさんで、

しかもその一人が、まぐれ当りに自分に廻り合せると云う運勢をもつて生れて来なくっちゃ、とても商売にならないはずだ。だから大川端おおかわばたで眼の下三尺の鯉こいを釣るよりもよっぽどの根気仕事だと、始めから腰を据すえてかかるのが当然なんだが、長蔵さんはとんとそんな自覚は無用だと云わぬばかりの顔をして、これが世間もつとも普通の商売であると社会から公認されたような態度で、わるびれずに往来の男を捉つかまえる。するとその捉まえられた男が、不思議な事に、一も二もなく、すぐにうんと云う。何となくこれが世間もつとも普通の商売じゃあるまいかと疑念を起すように成功する。これほど成功する商売なら、日本に一人じゃとても間に合わない、幾人いくたりあつても差支さしかえないと云う気になる。——当人は無論そう思つてゐるんだろう。自分もそう思つた。

この呑氣のんきな長蔵さんと、さらに呑氣な小僧に赤毛布あかげつとと、それから見様見真似みようみなねで、大いに呑氣になりかけた自分と、都合四人で橋向うの小路こみちを左へ切れた。これから川に沿って登りになるんだから、氣をつけるが好いと云う注意を受けた。自分は今芋いもを食ったばかりだから、もう空腹じゃない。足は昨夕ゆうべから歩き続けで草臥くたびれてはいるが、あるけばまだ歩ける。そこで注意の通り、なるべく氣をつけて、長蔵さんと赤毛布あともの後を跟つけて行つた。路みちがあまり広くないので四人は一行よつたりに並べない。だから後を跟おける事にした。小僧は小さいからこれも一足後おくれて、自分と摺すれ々々くらいになつて食つついてくる。

自分は腹が重いのと、足が重いのと、口を利きくのが厭いやになつた。長蔵さんも橋を渡つてから以後とんと御前さんを使わなくなつた。赤毛布はさつき一膳飯屋の前で談判をした時

から、余り多弁ではなかったが、どう云うものかここに至つて
ますます無口となつちまつた。小僧の無口はさらにはなはだし
かつた。穿はいてゐる冷飯草履ひやめしぞうりがびちやびちや鳴るばかりである。

こう、みんな黙つてしまふと、山路は静かなものである。こ
とに夜だからなお淋さびしい。夜と云つたつて、まだ日が落ちたば
かりだから、歩いてる道だけはどうか、こうか分る。左手を落
ちて行く水が、気のせいか、少しずつ光つて見える。もつとも
きらきら光るんじゃない。なんだか、どす黒く動く所が光るよ
うに見えるだけだ。岩にあたつて碎ける所は比較的判然はつきりと白く
なつてゐる。そうしてその声がさあさあ絶え間なくする。な
かなかやかましい。それでなかなか淋しい。

その中細うちい道が少しづつ、上りのぼになるような氣持がしだした。
上りだけならこのくらいな事はそう骨は折れないんだが、路が何

だか凸凹^{でこぼこ}する。岩の根が川の底から続いて来て、急に地面の上へ出たり、引つ込んだりするんだらう。この凸凹に下駄^げを突つ掛ける。烈^{はげ}しいときは内臓が飛び上がるようになる。だいぶ難義になつて来た。長蔵さんと赤毛布は山路に馴^なれていると見え、よくも見えない木下^{こした}闇^{やみ}を、すたすた調子よくあるいて行く。これは仕方がないが、小僧が——この小僧は實際物騒である。冷飯草履をびしゃびしゃ云わして、暗い凸凹を平気に飛び越して行く。しかも全く無言である。昼間ならさほどにも思わないんだが、この際だから、薄暗い中でびしゃりびしゃりと草履の尻の鳴るのが気になる。何だか蝙蝠^{こうもり}といつしよに歩いてるようだ。

そのうち路がだんだん登りになる。川はいつしか遠くなる。呼吸^{いき}が切れる。凸凹はますます烈^{はげ}しくなる。耳ががぁんと鳴つ

て来た。これがかけおち駆落でなくつて、遠足なら、よほど前から、何とか文句をならべるんだが、根が自殺しそこなの仕損いから起つた自滅の第一着なんだから、苦しくつても、辛つらくつても、誰に難題を持ち掛ける訳にも行かない。相手は誰だと云えば、自分よりほかに誰もいやしない。よいいたつて、こだわるだけの勇氣はない。その上先方さきは相手になつてくれないほど平氣である。すたすた歩いて行く。口さえ利きかない。まるで取附端とつつきはがない。やむを得ず呼吸いきを切らして、耳をがぁんと鳴らして、黙もくつて後あとから神妙しんびょうに尾ついて行く。神妙と云う字は子供の時から覚えていたんだが、神妙の意味を悟つたのはこの時が始めてである。もつともこれが悟り始めの悟りじまいだと笑い話にもなるが、一度悟り出したら、その悟りがだいぶ長い事続いて、ついに鉾山の中で絶高頂に達してしまった。神妙の極に達すると、出るべき涙

さえ遠慮して出ないようになる。涙がこぼれるほどだと譬に云うが、涙が出るくらいなら安心なものだ。涙が出るうちは笑う事も出来るにきまつてる。

不思議な事にこれほど神妙にあてられたものが、今はけろりとして、一切神妙いっさい氣を出さないのみか、人からは横着者のように思われている。その時御世話になった長蔵さんから見たら、定めし増長した野郎だと思ふ事だろう。がまた今の朋友ほうゆうから評すると、昔は氣の毒だったと云つてくれるかも知れない。増長したにしても氣の毒だったにしても構わない。昔は神妙で今は横着なのが天然自然の状態である。人間はこうできてるんだから致し方がない。夏になつても冬の心を忘れずに、ぶるぶる悸えていろつたつて出来ない相談である。病氣で熱の出た時、牛肉を食わなかったから、もう生涯しょうがいロースの鍋なべへ箸はしを着けちやな

らんぞと云う命令はどんな御大名だつて無理だ。咽喉元過ぐれば熱さを忘れると云つて、よく、忘れては怪しからんように持ち掛けてくるが、あれは忘れる方が当り前で、忘れない方が嘘である。こう云うと詭弁の如くに聞えるが、詭弁でもなんでもない。正直正銘のところを云うのである。いつたい人間は、自分を四角張つた不変体の如くに思い込み過ぎて困る如くに思う。周囲の状況なんて事を眼中に置かないで、平押に他人を押しつけたがる事がだいぶんある。他人なら理窟も立つが、自分で自分をきゅきゅ云う目に逢わせて嬉しがつてるのは聞えないようだ。そう一本調子にしようとする、立体世界を逃げて、平面国へでも行かなければならない始末が出来てくる。むやみに他人の不信とか不義とか変心とかを咎めて、万事万端向うがわるいように噪ぎ立てるのは、みんな平面国に籍を置いて、活版に

印刷した心を睨にらんで、旗を揚あげる人達である。御嬢さん、坊ちゃん、学者、世間見ず、御大名、にはこんなのが多くて、話が分にくり悪くって、困るもんだ。自分もあの時駆落かけおちをしず、可愛らしい坊ちゃんとしておとなしく成人したなら、——自分の心の始終動しじゆういているのも知らずに、動かないもんだ、変らないもんだ、変つちや大変だ、罪惡だなどよくよく思つて、年を取つたら——ただ学問をして、月給をもらつて、平和な家庭と、尋常な友達に満足して、内省の工夫を必要と感ずるに至らなかつたら、また内省ができるほどの心機轉換の活作用に見参げんざんしなかつたならば——あらゆる苦痛と、あらゆる窮迫と、あらゆる流転るてんと、あらゆる漂泊ひようはくと、困憊こんばいと、懊惱おうのうと、得喪とくそうと、利害とより得たこの経験と、最後にこの経験をもつとも公明に解剖して、解剖したる一々を、一々に批判し去る能力がなかつたなら——あ

りがたい事に自分はこの至大なる賚たまものを有つてゐる、——すべてこれらがなかつたならば、自分はこんな思い切つた事を云やしない。いくら思い切つた事を云つたつて自慢にやならない。ただこの通りだからこの通りだと云うまでである。その代り昔し神妙しんびようなものが、今横着になるくらいだから、今の横着がいつ何時なんどきまた神妙にならんとは限らない。——抜けそうな足を棒のようにな立てて聞くと、がんと鳴つてゐる耳の中へ、遠くからさあきあ水音が這入はいつてくる。自分はますます神妙になつた。

この状態でだいぶ来た。何里だか見当けんとうのつかないほど来た。

夜道よみちだから平生へいぜいよりは、ただでさえ長く思われる上へ持つてきて、凸凹でこぼこの登りを膨ふくらつ脛はざが腫はれて、膝頭ひざがしらの骨と骨が擦すれ合つて、股ももが地面じびたへ落ちそうに歩くんだから、長い、長くないのつて——それでも、生きてる証拠には、どうか、どうか、長蔵さんの

尻を五六間と離れずに、やって来た。これはただ神妙に自己を
没却した諦の体たらくから生じた結果ではない。五六間以上後
れると、長蔵さんが、振り返って五六歩ずつは待合してくる
から、仕方なしに追いつくと、追いつかない先に向うはまた歩
き出すんで、やむを得ずだらだら、ちびちびに自己を奮興させ
た成行に過ぎない。それにしても長蔵さんは、よく後が見えた
もんだ。ことに夜中である。右も左も黒い木が空を見事に突つ
切つて、頭の上は細く上まで開いているなと、仰向いた時、始め
て勘づくくらいな暗い路である。星明りと云うけれど、あまり
便にやならない。提灯なんか無論持ち合せようはずがない。自
分の方から云うと、先へ行く赤毛布が目標である。夜だから赤
くは見えないが、何だか赤毛布らしく思われる。明るいうちか
ら、あの毛布、あの毛布と御題目のように見詰めて覷をつけて

来たせいで、日が暮れて、突然の眼には毛布だか何だか分らないところを、自分だけにはちゃんと赤毛布に見えるんだろう。信心の功德くどくなんてえのは大方こんなところから出るに違ない。自分是这样云う訳で、どうにか目標めじるしだけはつけて置いたようなものの、長蔵さんに至っては、どのくらいあとから自分が跟ついてくるか分りようがない。ところをちゃんと五六間以上になると留とまつてくれる。留まつてくれるんだか、留まる方が向うの勝手なんだか、判然しないが、とにかく留まることはたしかだつた。とうてい素人しろうとにやできない芸である。自分は苦しいうちにも、これが長蔵さんの商売に必要な芸で、長蔵さんはこの芸を長い間練習して、これまでに仕上げたんだなと、少からず感心した。赤毛布は長蔵さんと並んでいるんだから、長蔵さんさえ留まればきつととまる。長蔵さんが歩き出せば必ず歩き出す。

まるで人形のように活動する男であつた。ややともすると後れ勝ちの自分よりはこの赤毛布の方が遙はるかに取り扱いやすかつたに違ない。小僧は——例の小僧は消えて無くなつちまつた。始めのうちこそ小僧だから後あとになるんだらうと思つて、草臥くたびれたら励ましてやろうくらいりようけんの了簡があつたんだが、かの冷飯草履ひやめしぞうりをぴしやりぴしやりと鳴らしながら凸凹路でこぼこを飛び跳ねて進行する有様を目撃してから、こりや敵かなわないと覚悟をしたのは、よつぽど前の事である。それでもしばらくの間はぴしやりぴしやりが自分の袖そでと擦すれ擦れくらいになつて、登つて来たが、今じやもう自分の近所には影さえなくなつた。並んで歩くうちは、あまり小僧の癖に活潑かつぱつにあるくんで——活潑だけならいいが、活潑の上に非常に沈黙きむくなんで——、随分物騒な心持ちだつた。もし笑うなら、極めて小さくつて、非常に活潑で、そうして口を利き

かない動物を想像して見ると分る。滅多めったにありやしない。こんな動物といつしよに夜山越やまごえをしたとすると、誰だつて物騒な氣持になる。自分はこの時この小僧の事を今考えても、妙な感じが出て来る。さつき蝙蝠こうもりのようだと云つたが、全く蝙蝠だ。長蔵さんと赤毛布あかげつとがいたから、好よいようなものの、蝙蝠とたつたふたりぎり二人限だつたら——正直なところ降参する。

すると長蔵さんが、暗闇くらやみの中で急に、

「おおい」

と声を揚げた。淋さむしい夜道で、急に人声を聞いた人があるかないか知らないが、聞いて見るとちよつと異いな感じのするものだ。それも普通の話し声なら、まだ好いが、おおいと人を呼ぶ奴は氣味がよくない。山路で、黒闇くらやみで、人つ子一人通らなくつて、御負おまけに蝙蝠なんぞと道伴みちづれになつて、いとど物騒な虚に乗じて、長

蔵さんが事ありげに声を揚げたのである。事のあるべきはずでない時で、しかも事がありかねまじき場所でおおいと来たんだから、突然と予期が合体して、自分の頭に妙な響を与えた。この声が自分と呼んだんなら、何か起ったなとびくんとするだけで済むんだが、五六間後から行く自分の注意を惹くためとは受取れないほど大きかった。かつ声の伝わって行く方角が違ふ。こつちを向いた声じゃない。おおいと右左りに当ったが、立ち木に遮られて、細い道を向うの方へ遠く逃げのびて、遙の先で、おおいと云う反響があつた。反響はたしかにあつたが、返事はないようだ。すると長蔵さんは、前より一層大きな声を出して、

「小僧やあ」

と呼んだ。今考えると、名前も知らないで、小僧やあと呼ぶなんて少しとぼけているがその時はなかなかとぼけちゃいなかった

た。自分はこの声を聞くと同時に蝙蝠が隠れたんだなと気がついた。先へ行つたと思うのが当り前で、まかり間違つても逃げたと鑑定をつけべきはずなのに、隠れたんだとすぐ胸先へ浮んで来たのは、よつぽど蝙蝠に祟たたられていたに違ない。この祟は翌朝あしたになつて太陽が出たらすつかり消えてしまつて、自分で自分を何なんて馬鹿だろうと思つたくらいだが、實際小僧やあの呼び声を聞いた時は、ちよつと烈はげしく来た。

ところがまた反響が例のごとく向うへ延びて、突き当りがな
いもんだから、人魂ひとたまの尻尾しつぽのように、幽かすかに消えて、その反動
か、有らん限りの木も山も谷もしんと静まつた時、——何とも
返事がない。この反響が心細く継続つながりながら消えて行く間、消
えてから、すべての世界がしんと静まり返るまで、長蔵さんと
赤毛布と自分と三人が、暗闇くらやみに鼻を突き合せて黙つて立ってい

た。あんまり好い心持じゃなかった。やがて、長蔵さんが、
「少し急いだら、追つつくべえ。御前さん好いかね」

と云った。無論好くはないが、仕方がないから承知をして、急ぎ出した。元来この場に臨んで急ぐなんて生意気な事ができるはずがないんだが、そこが妙なもので、急ぐ気も、急ぐ力もない癖に受合つちまった。定めし変な顔をして受合つたんだろうが、受合つたら急げても、急げないでもむちゃくちゃに急いでしまった。この間はどこをどんな具合に通つたか、まあ断然知らないと云つた方が穏当だろう。やがて長蔵さんがぴたりと留つたんで、ふと気がついた。すると一つ家の前へ出ている。ランプが点いている。ランプの灯が往来へ映っている。はつと嬉しかった。赤毛布あかげつとがありあり見える。そうして小僧もいる。小僧の影が往来を横に切つて向うの谷へ折れ込んでいる。小僧にし

ては長い影だ。

自分はこんな所に人の住む家があるうとはまるで思いがけなかつたし、その上眼がくらんで、耳が鳴つて、夢中に急いで、どこまで急ぐんだかあても希望もなくやつて来て、ぴたりと留まるや否や、ランプの灯がまぶしいように眼に這入^{はい}つて来たんだから、驚いた。驚くと共にランプの灯は人間らしいものだといくづく感心した。ランプがこんなにありがたかつた事は今日^{こんにち}までまだかつてない。後^{あと}から聞いたら小僧はこのランプの灯まで抜^ぬけ掛^{かけ}をして、そこで自分達を待つてたんだそうだ。お、おいと云う声も小僧や、あと云う声も聞えたんだが返事をしなかつたと云う話した。偉い奴だ。

同勢^{どうぜい}はこれ^{そう}でようやく揃^{そろ}つたが、この先どうなる事だろうと思^{しん}いながら、相変^{しん}らず神妙^{びんぎょう}にしていると、長蔵さんは自分達を

路傍^{みちばた}に置きつ放しにして、一人で家の中へ這入^{うち}つて行つた。仕方がないから家と云うが、実のところは、家じやもつたいたい。牛さえいれば牛小屋で馬さえ嘶^なけば馬小屋だ。何でも草鞋^{わらじ}を売る所らしい。壁と草鞋とランプのほかにも何にもないから、自分はそう鑑定した。間口^{まぐち}は一間ばかりで、入口の雨戸が半分ほど閉^たててある。残る半分は夜つびて明けて置くんじやないかしら。ことによると、敷居^{みぞ}の溝に食い込んだなり動かないのかも知れない。屋根は無論藁^{わら}葺^{ぶき}で、その藁が古くなつて、雨に腐^ふやけたせいか、崩^{くず}れかかつて漠然^{ばくぜん}としている。夜と屋根の継目^{つぎめ}が分らないほど、ぶくついて見える。その中へ長蔵さんは這入^{もぐ}つて行つた。なんだか穴の中へでも潜^{もぐ}り込んで行つたような心持だつた。そうして話している。三人は表に待っている。自分の顔は見えないが、赤毛布と小僧の顔は、小屋の中から斜^{はす}に差してくるラ

ランプの灯でよく見える。赤毛布は依然として、散漫さんまんなものである。この男はたとい地震がゆつて、梁はりが落ちて来ても、親の死目に逢あうか、逢わないかと云う大事な場合でも、いつでも、こんな顔をしているに違ない。小僧は空を見ている。まだ物騒だ。

ところへ長蔵さんがあらわれた。しかし往来へは出て来ない。敷居の上へ足を乗せて、こつちを向いて立つた股倉またぐらから、ランプの灯だけが細長く出て来る。ランプの位置がいつの間にか低くなつたと見える。長蔵さんの顔は無論よく分らない。

「御前さん、これから山越をするのは大変だから、今夜はここへ泊とまつて行こう。みんな這入るがいい」

自分はこの言葉を聞くと等しく、今までの神妙しんぴようが急に破裂して、身体からだがぐたりとなつた。この牛小屋で一夜を明あかす事が、それほど慰藉いしやを自分に与えようとは、牛小屋を見た今が今まで、

とんと気がつかなかつた。やはり神妙の結果泊る所が見つかつても、泊る気が起らなかつたんだらう。こうなると人間ほど御ぎよしやすいものはない。無理でも何でもはいはい畏かしこまつて聞いて、そうして少しも不平を起さないのみか大おおに嬉うれしがる。當時を思い出すたびに、自分はもつとも順良なまたもつとも励精な人間であつたなと云う自信が伴ともなつてくる。兵隊はああでなくつちやいけないなどと考える事さえある。同時に、もし人間が物の用を無視し得るならば、かねて物の用をも忘れ得るものだと言ふ事も悟つた。——こう書いて見たが、読み直すと何だかむずかしくつて解らない。実を云うと、もつとずっとやさしいんだが、短く詰めるものだからこんなにむずかしくなつちまつた。例えたとば酒を飲む権利はないと自信して、酒の徳を、あれどもなきがごとくに見做みなす事さえできれば、徳利が前に並んでも、酒は飲

むものだときえ気がつかずにいるくらいなところである。御互が泥棒にならずに済むのも、つまりを云えば幼少の時から、人工的にこの種の境界きょうがいに馴ならされているからの事だろう。が一方から云うと、こんな境界は人性の一部分を麻痺まひした結果としてでき上るもんだから、図に乗ってきゅきゅ押して行くと、人間がみんな馬鹿になっちまう。まあ泥棒さえしなければ好いとして、その他の精神器械は残らず相応に働く事ができるようにしてやるのが何よりの功德くどくだと愚考する。自分が当時の自分のままで、のべつに今日こんにちまで生きていたならば、いかに順良だつて、いかに励精だつて、馬鹿に違ない。だれの眼から見たつて馬鹿以上の不具かたわだろう。人間であるからは、たまには怒るおこがよい。反抗するがよい。怒るように、反抗するようにできてるものを、無理に怒らなかつたり、反抗しなかつたりするのは、自

分で自分を馬鹿に教育して嬉しがるんだ。第一身体からだの毒である。それを迷惑だと云うなら、怒らせないように、反抗させないように、御膳立おぜんだてをするが至当じゃないか。

自分は当時種々の状況で、万事長蔵さんの云う通りはいはい云つていたし、またそのはいはいを自然と思ひもするが、その代り、今のような身分にいるからは、たとい百の長蔵さんが、なめかななぼん七日七晩引つ張りつづけに引つ張つたつてちよつとも動きやしない。今の自分にはこの方が自然だからである。そうしてこう変るのが人間たるころだと思つてゐる。分りやすいように長蔵さんひきあいを引合に出したが、よく調べて見ると、人間の性格は一時間ごとに變つてゐる。變るのが当然で、變るうちには矛盾が出て来るはずだから、つまり人間の性格には矛盾が多いと云う意味になる。矛盾だらけのしまいは、性格があつてもなくつても同

じ事に帰着する。嘘だうそと思うなら、試験して見るがいい。他人ひとを試験するなんて罪な事をしないで、まず吾身わがみで吾身を試験して見るがいい。坑夫にまで零落おちぶれないでも分る事だ。神さまなんか聞いて見たつて、以上わかり分ッこない。この理窟りくつがわかる神さまは自分の腹のなかにいるばかりだ。などと、学問もない癖に、学者めいた事を云つては濟まない。こんな景氣のいいタン、かを切る所存は毛頭なかつたんだが、実を云うところ云う仔細しさいである。自分はよく人から、君は矛盾の多い男で困る困ると苦情を持ち込まれた事がある。苦情を持ち込まれるたんびに苦い顔あやまをして謝罪あやまつていた。自分ながら、どうも困ったもんだ、これじゃ普通の人間として通用しかねる、何とかして改良しなくっちゃ信用を落して路頭に迷うような仕儀になると、ひそかに心配していたが、いろいろの境遇に身を置いて、前に述べた通り

の試験をして見ると、改良も何も入ったものじゃない。これが自分の本色なんで、人間らしいところはほかにありやしない。それから人も試験して見た。ところがやつぱり自分と同じようにできている。苦情を持ち込んでくるものが、みんな苦情を持ち込まれてしかるべき人間なんだからおかしくなる。要するに御腹おなかが減さつて飯が食くいたくなつて、御腹が張ると眠ねくなつて、窮きゆうして濫らんして、達たして道みちを行おこなつて、惚ほれていつしよになつて、愛想あいそが尽つきて夫婦別れをするまでの事だから、ことごとく臨機応変さたの沙汰である。人間の特色はこれよりほかにありやしない。と、こう感服しているんだから、ちよつと言つて見たまでである。しかし世の中には学者だの坊主だの教育家だのと云うむずかしい仲間がだいぶいて、それぞれ専門に研究している事だから、自分だけ、訳の分つたように弁じ立てては善くない。

そこで元氣のいい今の気焰きえんをやめて、再びもとの神妙しんびょうな態度に復して、山の中の話をする。長蔵さんが敷居の上に立って、往來あばらやを向きながら、ここへ泊って行こうと云い出した時、こんな破屋でも泊る事が出来るんだったと、始めて意識したよりも、すべての家と云うものが元來がんらい泊るために建ててあるんだなと、ようやく気がついたくらい、泊る事は予期していなかった。それでいて身体は蒟蒻からだ　こんにやくのように疲れ切ってる。平生いつもなら泊りたい、泊りたいですべての内臓が張切れそうになるはずなのに、没自我ぼつじがの坑夫行こうふゆき、すなわち自滅の前座としての墮落と諦めあきらをつけた上の疲労だから、いくら身体に泊る必要があつても、身体の方から魂へ宛てて宿泊の件を請求していなかった。ところへ泊ると命令が天から逆に魂が下ったんで、魂はちよつとまごついたかたちで、とりあえず手足に報告すると、手足の方では非常に嬉

しがったから、魂もなるほどありがたいと、始めて長蔵さんの好意を感謝した。と云う訳になる。何となく落語じみてふざけているが、實際この時の心の状態は、こう譬を借りて来ないと説明ができない。

自分は長蔵さんの言葉を聞くや否や、急に神経が弛んで、立ち切れない足を引き摺つて、第一番に戸口の方に近寄った。赤毛布はのそのそ這入ってくる。小僧は飛んで来た。飛んだんじやあるまいが、草履の尻が勢よく踵へあたるんで、ぴしゃぴしゃ云う音が飛ぶように思われた。

這入って見るとぷんと臭った。何の臭だかさらに分らない。小僧が鼻をぴくつかせたので、小僧もこの臭に感じたなと気がついた。長蔵さんと赤毛布はまるで無頓着であつた。土間から上へあがる段になつて、雑巾でもと思つたが、小僧は委細構わ

ず、草履を脱いで上がった。小僧の草履は尻が無いんだから、半分裸足はだしである。ひどい奴だと眺ながめていると、長蔵さんが、

「御前さんも下駄だから、御上り」

と注意した。それで気味がわるいが、ほこりも払わず上がった。畳の上へ一足掛けて見るとぶくつとした。小僧はその上へころりと転がっている。自分は尻だけおろして、障子しょうじ——障子は二枚あった——その障子の影へ胡坐あぐらをかいた。この障子は入口に立ててあるから、振り向くと、長蔵さんと赤毛布あかげつとが草鞋わらじを脱いでいる。二人共腰から手拭てぬぐいを出して、ばたばた足をはたいている。そうして、すぐ上がって来た。足を洗うのが面倒だと見える。ところへ主人が次の間まから茶と煙草盆たばこぼんを持って来た。

主人だの、次の間だの、茶だの、煙草盆だの、と云うとすこぶ

る尋常に聞えるが、その実名ばかりで、一々説明すると、大變な誤解をしていたんだねと呆れ返るものばかりである。がとにかく主人が次の間から、茶と煙草盆を持つて来たには違いない。そうして長蔵さんと談話をし始めた。談話の筋は忘れたが、その様子から察すると、二人はもとのからの知合で、御互の間には貸や借があるらしい。何でも馬の事をしきりに云つてた。自分だの、赤毛布だの、小僧などの事はまるで聞きもしない。まるで眼中にない訳でもあるまいが、さつき長蔵さんが一人で談判に這入った時に、残らず聞いてしまったんだろう。それとも長蔵さんはたびたびこんな呑氣屋を銅山へ連れて行くんで、自然その往き還りにはこの主人の厄介になりつけてるから、別段気にも留めないのかも知れない。

自分は、長蔵さんと主人との話を聞きながら、居眠を始めた。

いつから始めたか知らない。馬を売損うりそこなつて、どうかしたと云うところから、だんだん判然はつきりしなくなつて、自然じねんと長蔵さんが消える。赤毛布あばらやが消える。小僧こぞうが消える。主人と茶と煙草盆てんそうぼんが消えて、破屋あばらやまでも消えた時、こくりと眠ねむりが覚さめた。気がつくと頭が胸の上へ落ちてゐる。はつと思つて、擡もちやげるとはなはだ重い。主人はやつぱり馬の話をしてゐる。まだ馬かと思つてゐるうちに、また気が遠くなつた。気が遠くなつたのを、遠いままにして打遣うつちやつて置くと、忽然こつぜんぱつと眼があいた。薄暗い部屋うちの中に、影のような長蔵さんと亭主ひざが膝を突き合せてゐる。ちょうど、借かりがどうかしてハハハハと亭主が笑つたところだつた。この亭主は額ひたいが長くつて、斜はすに頭てつぺんの天辺ひっこまで引込んでゐるから、横から見ると切通きりどおしの坂こうばいくらいな勾配がある。そうして上になればなるほど毛はが生はえてゐる。その毛は五分ごぶくらいなのと一寸いっすんく

らいなのとが交^{まじ}つて、不規則にしかも疎^{まばら}にもじやもじやしている。自分が居眠^{いねぶ}りからはつと驚いて、急に眼を開けると、第一にこの頭が眸^{ひとみ}の底に映った。ランプが煤^{すす}だらけで暗いものだから、この頭も煤だらけになつて映つて来た。その癖距離は近い。だから映つた影は明瞭^{めいりょう}である。自分はこの明瞭でかつ朦朧^{もうろう}なる亭主の頭を居眠りの不知覺から我に返る咄嗟^{とつさ}にふと見たのである。この時はあまり好い心持ではなかった。それがため、居眠りもしばらく見合せるような氣になつて、部屋中を見廻すと、向うの隅に小僧が倒れている。こちらの横に茨城県が長く伸びている。毛布^{けつと}の下から大きな足が見える。突当りが壁で、壁の隅に穴が開^あいて、穴の奥が真黒である。上は一面の屋根裏で、寒いほど黒くなつてゐる所へ、油煙とともにランプの灯^ひがあたるから、よく見ていると、藁^{わら}葺^{ふき}の裏側が震^{ふる}えるように思われた。

それからまた眠くなつた。また頭が落ちる。重いから上げる
とまた落ちる。始めのうちは、上げた頭が落ちながらだんだん
うつとりして、うつとりの極、胸の上へがくりと落ちるや否や、
いつそくとび一足飛に正氣へ立ち戻つたが、三回四回と重なるにつけて、眼
だけ開けても氣は判然はつきりしない。ぼんやりと世界に帰つて、また
ぞろずろと不覺に陥おちいつちまう。それから例のごとく首が落ちる。
かすか微に生きてるような氣になる。かと思うとまた一切空に這入る。
しまいには、とうとう、いくら首がのめつて来ても、動じなく
なつた。あるいはのめつたなり、頭の重みで横にぶつ倒れちまつ
たのかも知れない。とにかく安々と夜明まで寝て、眼が覺さめた時
は、もう居眠りいねぶはしていなかった。通例のごとく身体全体を畳
の上につけて長くなつていた。そうして涎よだれを垂れている。――
自分は馬の話を聞いて居眠りを始めて、眼をあけて借金の話

聞いて、また居眠りの続を復習しているうちに、とうとう居眠りを本式に崩して長くなつたぎり、魂の音沙汰おとさたを聞かなかつたんだから、眼が覚めて、夜が明けて、世の中が土台から陰と陽に引ッ繰り返つてゐるのを見るや否いなや、眼をあいて涎よだれを垂れて、横になつたまま、じつとしていた。自覚があつて死んでたらこんなだろう。生きてるけれども動く氣にならなかつた。昨夜ゆうべの事は一から十までよく覚えてゐる。しかし昨夜の一から十までが自然と延びて今日まで持ち越したとは受け取れない。自分の経験はすべてが新しくつて、かつ痛切であるが、その新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云うよりも、昨夜と今日の間に厚い仕切りが出来て、截然せつぜんと区別がついたようだ。太陽が出ると引き込むだけの差で、こう心に連続がなくなつては不思議なくらい自分で自分あてが当にならなくなる。要す

るに人世は夢のようなもんだ。とちよつと考えたもんだから、涎も拭かずに沈んでいると、長蔵さんが、ううんと伸のびをして、寝たまま握にぎり拳を耳の上まで持ち上げた。握り拳がぬつと真直に畳の上を擦こすつて、腕のありたけ出たところで、勢せいがゆるんで、ぐにやりとした。また寝るかと思つたら、今度は右の手を下へさげて、凹くぼんだ頬つぺたをぼりぼり搔かき出した。起きてるのかも知れない。そのうち、むにやむにや何か云うんで、やつぱり眼が覚めていないなと気がついた時、小僧がむくりと飛び起きた。これは真正の意味において飛起きたんだから、どしんと音がして、根太ねだが抜けそうに響いた。すると、さすが長蔵さんだけあつて、むにやむにやをやめて、すぐ畳についた方の肩を、肘ひじの高さまで上げた。眼をぱちつかせている。

こうなると、自分もいつまで沈んでいたつて際限がないから、

起き上った。長蔵さんも全く起きた。小僧は立ち上がった。寢
ているものは赤毛布あかげつとばかりである。これはまた呑気のんきなもので、
依然として毛布けつとから大きな足を出してぐうぐう鼾いびき声をかいて寢
ている。それを長蔵さんが起す。――

「御前おまえさん。おい御前さん。もう起きないと御午おひるまでに銅山やまへ
行きつけないよ」

御前さんが三四返繰返されたが、毛布はよく寝ている。仕方
がないから長蔵さんは毛布の肩へ手を懸けて、

「おい、おい」

と揺り始めたんで、やむを得ず、毛布けつとの方でも「おい」と同じ
ような返事をして、中途半端はんぱに立ち上った。これでみんな起き
たようなものの、自分は顔も洗わず、飯も食わず、どうして好
いか迷つてると、長蔵さんが、

「じゃ、そろそろ出掛けよう」

と云つて、真先に土間へ降りかけたには驚いた。小僧がつづいて降りる。毛布も不得要領に土間へ大きな足をぶら下げた。こゝなると自分も何とか片をつけなくっちゃならないから、一番あとから下駄を突掛^{つつか}けて、長蔵さんと赤毛布^{あかげつと}が草鞋^{わらじ}の紐^{ひも}を結ぶのを、不景氣な懷手^{ふとしろで}をして待つていた。

土間へ下りた以上は、顔を洗わないのかの、朝飯^{あさめし}を食わないのかのと、当然の事を聞くのが、さも贅沢^{ぜいたく}の沙汰^{さた}のように思われて、とんと質問して見る氣にならない。習慣の結果、必要とまで見倣^{みな}されているものが、急に余計な事になつちまうのはおかしいようだが、その後^{のち}この顛倒事件^{てんとうじけん}を布衍^{ふえん}して考えて見たら、こんな、例はたくさんある。つまり世の中では大勢のやつてる事が当然になつて、一人だけでやる事が余計のように思われる

んだから、当然になろうと思つたら味方を大勢拵こしらえて、さも当然であるかの容子ようすで不当な事をやるに限る。やつては見ないがきつと成功するだろう。相手が長蔵さんと赤毛布でさえ自分にはこれほどの変化を来たしたんでも分る。

すると長蔵さんは草鞋の紐を結んで、足元に用がなくなつたもんだから、ふいと顔を上げた。そうして自分を見た。そうして、こんな事を云う。

「御前さん、飯は食わなくつても好いだろうね」

飯を食わなくつて好い法はないが、わるいと云つたつて、始まりようがないから、自分はただ、

「好いです」

と答えて置いた。すると長蔵さんは、

「食いたいかね」

と云つて、にやにやと笑つた。これは自分の顔に飯が食いたい
ような根性こんじやうが幾分かあらわれたためか、または十九年来の予期
に反した起きたなり飯抜きしゅつたつの立しゅつに、自然不平の色が出ていた
ためだろう。それでなければ草鞋の紐を結んでしまつてから、
こんな事を聞く訳がない。現に長蔵さんは、赤毛布にも小僧に
もこの質問を呈出しなかつたんでも分る。今考えると、ちよつ
と兩人ふたりにも同じ事を聞いて見れば善かつたような氣もする。朝
飯を食わないで五里十里と歩き出すものは宿無やどなしか、または準
宿無しゆくむしでなくつちやならない。目が醒さめて、夜が明けてるのに、
汁けむの煙も、漬物にんべいの香も、いっこう連想に乗つて来ないからは、
行きなり放題に、今日は今日の命を取り留めて、その日その日
の魂くようの供養のんぎやをする呑氣屋で、世の中にあしたと云うものがない
のを当り前と考えるほどに不幸なまた幸さいわいな人間である。自分は

十九年来始めて、こう云う人間と一つ所^{ところ}に泊つて、これからまたいつしよに歩き出すんだなと思つた。赤毛布と小僧の顔色を伺つて見ると少しも朝飯を予期している様子がないんで、双方共朝飯を食い慣^なけていない一種の人類だと勘づいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先から、もう、坑夫以下に摺^ずり落ちていたと云う事が分つた。しかし分つたと云うばかりで別に悲しくもなかった。涙は無論出なかった。ただ長蔵さんが、この朝飯の経験に乏^{とほ}しい人間に向つて、「御前さん達も飯が食いたいかね」と尋ねてくれなかつたのを、今では残念に思つてる。食つた事が少いから、今までの習慣性で、「食わないでも好い」と答えるか、それとも、たまさかに有りつけるかも知れないと云う意外の望に奨励^{しょうれい}されて「食いたい」と答えるか。——つまらん事だがどつちか聞いて見たい。

長蔵さんは土間へ立つて、ちよつと後ろを振り返つたが、
「熊さん、じゃ行つてくる。いろいろ御世話様」

ちからあし

と軽く力足を二三度踏んだ。熊さんは無論亭主の名であるが、
まだ奥で寝ている。覗いて見ると、昨夕うつつに気味をわるく
した、もじやもじやの頭が布団の下から出ている。この亭主は
敷蒲団を上へ掛けて寝る流儀と見える。長蔵さんが、このもじや
もじやの頭に話しかけると、頭は、むくりと畳を離れた。そう
して熊さんの顔が出た。この顔は昨夜見たほど妙でもなかった。
しかし額がさかに瘠けて、脳天まで長くなつてゐる事は、今朝で
も争われない。熊さんは床の中から、
「いや、何にも御構申さなかつた」
と云つた。なるほど何にも構わない。自分だけ布団をかけてい
る。

「寒かなかつたかね」

とも云った。気楽なもんだ。長蔵さんは

「いいえ。なあに」

と受けて、土間から片足踏み出した時、後うしろから、熊さんが欠伸交あくびまじりに、

「じゃ、また帰りに御寄り」

と云った。

それから長蔵さんが往来へ出る。自分も一足後おくれて、小僧と

赤毛布あかげつとの尻を追おつ懸かけて出た。みんな大急ぎに急ぐ。こう云う

道中には慣なれ切ったものばかりと見える。何でも長蔵さんの云

うところによると、これから山越をするんだが、午ひるまでには銅山やま

へ着つかなくつちやならないから急ぐんだそうだ。なぜ午ひるまでに着つかなくつちやならないんだか、訳が分らないが、聞いて見る勇

気がなかつたから、黙つて食つついて行つた。するとなるほど登のぼりになつて来た。昨夕あれほど登つたつもりなのに、まだ登るんだから嘘うそのようでもあるが實際見渡して見ると四方しほうは山ばかりだ。山の中に山があつて、その山の中にまた山があるんだから馬鹿馬鹿しいほど奥へ這入はいる訳になる。この模様では銅山どうざんのある所は、定めし淋しいだろう。呼息いきを急せいて登りながらも心細かつた。ここまで来る以上は、都へ帰るのは大変だと思つと、何の酔興すいきようで来たんだか浅間あさましくなる。と云つて都におりたくないから出奔しゅつぽんしたんだから、おいそれと歸りにくい所へ這入つて、親親類おやしんるいの目に懸かからないように、朽果くちはててしまふのはむしろ本望である。自分は高い坂へ来ると、呼息を継つぎながら、ちよつと留つては四方の山を見廻した。するとその山がどれもこれも、黒ずんで、凄すげいほど木を被かぶっている上に、雲がかかつて見る間

に、遠くなつてしまふ。遠くなると云うより、薄くなると云う方が適當かも知れない。薄くなつた揚句は、あげくしだいしだいに、深い奥へ引き込んで、今までは影のように映つてたものが、影さえ見せなくなる。そうかと思うと、雲の方で山の鼻面はなづらを通り越して動いて行く。しきりに白いものが、捲まき返しているうちに、薄く山の影が出てくる。その影の端がだんだん濃くなつて、木の色が明かになる頃は先刻さつきの雲がもう隣りの峰へ流れている。するとまた後あとからすぐに別の雲が来て、せつかく見え出した山の色をぼうとさせる。しまいには、どこにどんな山があるかいつこう見当けんとうがつかなくなる。立ちながら眺ながめると、木も山も谷もめちやめちやになつて浮き出して来る。頭の上の空さえ、際限もない高い所から手の届く辺あたりまで落ちかかった。長蔵さんは、「こりや、雨だね」

と、歩きながら独言ひとりごとを云った。誰も答えたものはない。四人よつたりとも雲の中を、雲に吹かれるような、取り捲まかれるような、また埋うずめられるような有様で登って行つた。自分にはこの雲が非常に嬉しかった。この雲のお蔭かげで自分は世の中から隠したい身体からだを十分に隠すことが出来た。そうして、さのみ苦しい思いもしずにならぬ中を歩いて行ける。手足は自由に働いて、閉じ籠こめられたような窮屈ほうくつも覚えない上に、人目にかからん徳は十分ある。生きながら葬ほうごられると云うのは全くこの事である。それが、その時の自分には唯一の理想であつた。だからこの雲は全くありがたい。ありがたいという感謝の念よりも、雲に埋められ出してから、まあ安心だと、ほっと一息した。今考えると何が安心だか分りやしない。全くの氣違だと云われても仕方がない。仕方がないが、こう云う自分が、時と場合によれば、翌あすが日にも、

また雲が恋しくならんとも限らない。それを思うと何だか変だ。吾が身^みで吾が身が保証出来ないような、また吾が身が吾が身でないような氣持がする。

しかしこの時の雲は全く嬉しかった。四人が離れたり、かたまったり、隔^{へだ}てられたり、包まれたりして雲の中を歩いて行つた時の景色はいまだに忘れられない。小僧が雲から出たり這入ったりする。茨城の毛布^{けつと}が赤くなったり白くなったりする。長蔵さんの、どてらが、わずか五六間の距離で濃くなったり薄くなったりする。そうして誰も口を利^きかない。そうして、むやみに急ぐ。世界から切り離された四つの影が、後^{あと}になり先になり、殖^{ふえ}もせず減^へもせず、四つのまま、引かれて合うように、弾^{はじ}かれて離れるように、またどうしても四つでなくてはならないように、雲の中をひたすら歩いた時の景色はいまだに忘れられない。

自分は雲に埋まっている。残る三人も埋まっている。天下が雲になったんだから、世の中は自分共にたつた四人である。そうしてその三人が三人ながら、宿無^{やどなし}である。顔も洗わず朝飯も食わずに、雲の中を迷つて歩く連中である。この連中と道伴^{みちづれ}になつて登り一里、降り二里^{くだ}を足の続く限り雲に吹かれて来たら、雨になつた。時計がないんで何時^{なんじ}だか分らない。空模様で判断すると、朝とも云われるし、午過^{ひるすぎ}とも云われるし、また夕方と云つても差支^{さしかえ}ない。自分の精神と同じように世界もぼんやりしているが、ただちよつと眼についたのは、雨の間から微^{かす}かに見える山の色であつた。その色が今までのとは打つて變つてゐる。いつの間にか木が抜けて、空坊主^{からぼうず}になつたり、ところ斑^{まだら}の禿頭^{はげあたま}と化けちまつたんで、丹砂^{たんしゃ}のように赤く見える。今までの雲で自分と世間を一筆^{ひとふで}に抹殺^{まつさつ}して、ここまでふらつきながら、手足だ

けを急がして来たばかりだから、この赤い山がふと眼に入るや否や、自分ははつと雲から醒めた気分になった。色彩の刺激が、自分にこう強く応えようとは思いがけなかった。——実を云うと自分は色盲じゃないかと思うくらい、色には無頓着な性質である。——そこでこの赤い山が、比較的烈しく自分の視神経を冒すと同時に、自分はいよいよ銅山に近づいたなと思つた。虫が知らせたと云えば、虫が知らせたとも云えるが、実はこの山の色を見て、すぐ銅を連想したんだろう。とにかく、自分がいよいよ到着したなと直覺的に——世の中で直覺的と云うのは大概このくらいなものだと思うが——いわゆる直覺的に事実を感じ得た時に、長蔵さんが、

「やつと、着いた」

と自分が言いたいような事を云つた。それから十五分ほどした

ら町へ出た。山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り抜けて、突然新しい町へ出たんだから、眼を擦こすつて視覚をたしかめたいくらい驚いた。それも昔の宿しゆくとか里とか云う旧幕時代に縁のあるような町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋があつたり、すべてが苔こけの生えない、新しづくめの上に、白粉おしろいをつけた新しい女までいるんだから、全く夢のような気持で、不審が顔に出る暇いとまもないうちに通り返しちまった。すると橋へ出た。長蔵さんは橋の上へ立って、ちよつと水の色を見たが、

「これが入口だよ。いよいよ着いたんだから、そのつもりでいなくっちゃ、いけない」

と注意を与えた。しかし自分には、どんなつもりでいなくっちゃいけないんだか、ちつとも分らなかつたから、黙つて橋の上へ

立つて、入口から奥の方を見ていた。左が山である。右も山である。そうして、所々に家が^{うち}見える。やっぱり木造の色が新しい。中には白壁だか、ペンキ塗だか分らないのがある。これも新しい。古^はぼけて禿^はげてゐるのは山ばかりだった。何だかまた現実世界に引き^ひ摺^ずり込まれるような気がして、少しく失望した。長蔵さんは自分が黙つて橋の向^{むこう}を覗^{のぞ}き込んでゐるのを見て、

「好いかね、御前さん、大丈夫かい」

とまた聞き直したから、自分は、

「好いです」

^{めいりよう}

と明瞭に答えたが、内心あまり好くはなかつた。なぜだかしらないが、長蔵さんはただ自分にだけ懸^け念^{ねん}がある様子であつた。^{あかげつと}赤毛布と小僧には「好いかね」とも「大丈夫かい」とも聞かなかつた。頭^{ふたり}からこの兩人は過去の因果^{いんが}で、坑夫になつて、銅山

のうちに天命を終るべきものと認定しているような気色けしきがありと見えた。して見ると不信用なのは自分だけで、だいぶ長蔵さんからこいつは危あぶないかと睨にらまれていたのかも知れない。好つらい面の皮だ。

それから四人揃そろつて、橋を渡つて行くと、右手に見える家にはなかなか立派なのがある。その中うちで一番いかめしい奴やつを指さして、あれが所長の家だうちと長蔵さんが教えてくれた。ついでに左の方を見ながら

「こつちがシ、キ、だよ、御前さん、好いかね」

と云う。自分はシ、キ、と云う言葉をこの時始めて聞いた。

よつぽど聞き返そうかと思つたが、大方これがシ、キ、なんだろうと思つて黙つていた。あとから自分もこのシ、キ、と云う言葉めいりようを

明瞭に理解しなければならぬ身分になつたが、やつぱり始め

にぼんやり考えついた定義とさした違もなかった。そのうち左へ折れていよいよシ、キの方へ這入る事になった。鉄軌レールについてだんだん上のぼつて行くと、そこここに粗末な小さい家がたくさんある。これは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、こんな所で暮すのかと思つたが、それは間違であつた。この小屋はどれも六畳と三畳二間ふたまで、みんな坑夫の住んでる所には違ないが、家族のあるものに限つて貸してくれる規定であるから、自分のような一人ものは這入りたくたつて這入れないんだつた。こう云う小屋の間を縫あつて、飽あきずに上のぼつて行くと、今度は石崖いしがけの下に細長い横幅ばかりの長屋が見える。そうして、その長屋がたぐさんある。始めはわずか二三軒かと思つたら、登るに従つて続々あらわれて来た。大きさも長さも似たもんで、みんな崖下がけしたにあるんだから位地にも変りはないが、向むきだけは各々違めいめいつてる。

山坂を利用して、なけなしの地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅沢ぜいたくは言つていられない。やつとの思いで、ならした地面へ否応いやおうなしに、方角のお構かまひなく建ててしまつたんだから不規則なものだ。それに、第一、登つて行く道がくねつてる。あの長屋の右を歩いてるなと思うと、いつの間にかその長屋の前へ出て来る。あれは、すぐ頭の上だがと心待ちに待つていると、急に路が外それて遠くへ持つてかれてしまう。まるで見当けんとうがつかない。その上この細長い家から顔が出ている。家から顔が出ているのが珍らしい事もないんだが、その顔がただの顔じゃない。どれも、これも、出来ていない上に、色が悪い。その悪さ加減がまた、尋常でない。青くつて、黒くつて、しかも茶色で、とうてい都会においては想像のつかない色だから困る。病院の患者などとはまるで比較にならない。自分が山路を登りなが

ら、始めてこの顔を見た時は、シ、キと云う意味をよく了解しない癖に、なるほどシ、キ、だなと感じた。しかしいくらシ、キ、でも、こ
う云う顔はたくさんあるまいと思つて、登つて行くと、長屋を
通るたんびに顔が出ていて、その顔がみんな同じである。しま
いにはシ、キとは恐ろしい所だと思ふまで、いやな顔をたくさん
見せられて、また自分の顔をたくさん見られて——長屋から出
ている顔はきつと自分らを見ていた。一種猙獰^{どうあく}な眼つきで見て
いた。——とうとう午後の一時に飯場^{はんば}へ着いた。

なぜ飯場と云うんだか分らない。焚^たき出しをするから、そう
云う名をつけたものかも知れない。自分はその後飯場^ごの意味を
ある坑夫に尋ねて、篋^{べらぼう}棒^{ぼう}め、飯場たあ飯場でえ、何を云つて
るんでえ、とひどく剣突^{けんつ}を食^{くら}つた事がある。すべてこの社会に通
用する術語は、シ、キ、でも飯場でもジ、ヤ、ン、ボ、ー、でも、みんな偶然

に成立して、偶然に通用しているんだから、滅多に意味なんか聞くと、すぐ怒られる。意味なんか聞く閑もなし、答える閑もなし、調べるのは大馬鹿となつてゐるんだから至極簡単でかつ全く實際的なものである。

そう云う訳で飯場の意味は今もつて分らないが、とにかく崖の下に散在している長屋を指すものと思えばいい。その長屋へようやく到着した。多くある長屋のうちで、なぜこの飯場を選んだかは、長蔵さんの一人ぎめだから、自分には説明しにくい。が、この飯場は長蔵さんの専門御得意の取引先と云う訳でもなかったらしい。長蔵さんは自分をこの飯場へ押しつけるや否や、いつの間にか、赤毛布と小僧を連れてほかの飯場へ出て行ってしまった。それで二人はほかの飯場の飯を食うようになったんだと後から気がついた。二人の消息はその後いつこう聞かな

かつた。銅山やまのなかでもついぞ顔を合せた事がない。考えると、妙なものだ。一膳めし屋から突然飛び出した赤い毛布けつとと、夕方の山から降くだつて来た小僧と落ち合つて、夏の夜よを後になり先になつて、崩くずれそうな藁屋根わらやねの下でいっしょに寝た明日あくるひは、雲の中を半日かかつて、目指す飯場へようやく着いたと思うと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなつちまう。これでは小説にならない。しかし世の中には纏まとまりそうで、纏まとらない、云わばでき損そこないの小説めいた事がだいぶある。長い年月を隔へだてて振り返つて見ると、かえつてこのだらしなく尾おを蒼穹そうきゆうの奥に隠してしまつた経歴の方が興味の多いように思われる。振り返つて思い出すほどの過去は、みんな夢で、その夢らしいところに追懐おもむきの趣があるんだから、過去の事実それ自身にどこかぼんやりした、曖昧あいまいな点がないとこの夢幻の趣を助ける事が出来ない。したがつて

十分に發展して来て因果の予期を満足させる事柄よりも、この赤毛布流に、頭も尻も秘密の中に流れ込んでただ途中だけが眼の前に浮んでくる一夜半日の画の方が面白い。小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭なくなつて好い心持だ。ただに赤毛布ばかりじゃない。小僧もそうである。長蔵さんもそうである。松原の茶店の神さんもそうである。もつと大きく云えばこの一篇の「坑夫」そのものがやはりそうである。纏まりのつかない事実を事実のままに記すだけである。小説のように拵えたものじゃないから、小説のように面白くはない。その代り小説よりも神秘的である。すべて運命が脚色した自然の事實は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。と自分は常に思っている。

赤毛布と小僧が連れて行かれたのは後の事だが、自分らが飯

場に到着した時は無論二人ともいつしよであつた。ここで長蔵さんがいよいよ坑夫志願の談判を始めた。談判と云うと面倒なようだが、その実極めて簡単なものであつた。ただ、この男は坑夫になりたいと云うから、どうか使つてくれと云つたばかりである。自分の姓名も出生地も身元も閱歴も何にも話さなかつた。もちろん話したくつたつて、知らないんだから、話せようもないんだが、こうまで手取り早く片づける了簡りようけんとは思わなかつた。自分は中学校へ入学した時の経験から、いくら坑夫だつて、それ相応の手續がなくつちや採用されないもんだとばかり思つていた。大方身元引受人とか保証人とか云うものが証文へ判でも捺おすんだらう、その時は長蔵さんにでも頼んで見ようくらいにまで、先廻りをして考えていた。ところが案に相違して、談判を持ち込まれた飯場頭はんばがしらは——飯場頭だか何だかその時は無論

知らなかつた。眉毛まゆげの太くつて蒼髯あおひげの痕あとの濃い逞たくましい四十恰好がっこうの男だつた。——その男が長蔵さんの話を一通り聞くや否や、

「そうかい、それじゃ置いておいで」

とさも無雑作むぞうさに云つちまつた。ちやうど炭屋が土釜どがまを台所へ担かつぎ込んだ時のように思われた。人間が遙々はるばる山越やまこえをして坑夫うちになりに来たんだとは認めていない。そこで自分は少々腹うちの中でこの飯場頭うらを恨うらんだが、これは自分の間違であつた。その訳は今直すぐに分る。

飯場頭と云うのは一ひとの飯場を預かる坑夫の隊長で、この長屋の組合に這入る坑夫は、万事この人の了簡りようけんしだいでどうでもなる。だからはなはだ勢力がある。この飯場頭と一分時間いっぶんじかんに談判を結了した長蔵さんは、

「じゃ、よろしくお頼みもうします」

と云つたなり、赤毛布あかげつとと小僧を連れて出て行つた。また帰つてくる事と思つたが、その後ごいつこう影も形も見せないんで、全く、置去おきざりにされたと云う事が分つた。考へるとひどい男だ。ここまで引つ張つて来るときには、何のかのと、世話らしい言葉を掛けたのに、いざとなると通り一片の挨拶あいさつもしない。それにしてもぽん引の手数料はいつ何時なんどきどこで取つたものか、これは今もつて分らない。

こう云うしだいで飯場頭からは、土釜の炭俵のごとく認定される、長蔵さんからは小包のように抛なげ込まれる。少しも人間らしい心持がしないんで、大いに悄然しやうぜんとしてゐると、出て行く三人の後姿を見送つた飯場頭は突然自分の方を向いた。その顔つきが變つてゐる。人を炭俵のように取扱う男とは、どうしても受取れない。全く東京辺で朝晩出逢であう、万事を心得た苦勞人

の顔である。

「あなたは生れ落ちてからの労働者とも見えないようだが……」

はんばがかり

飯場掛の言葉をここまで聞いた時、自分は急に泣きたくなつ

た。さんざつぱらお前さんで、厭いやになるほどやられた揚句あげくの果はて

もうとうてい御前さん以上には浮ばれないものと覚悟をしていた矢先に、突然あなたあなたの昔に帰ったから、思いがけない所で自己を認められた嬉しさと、なつかしさと、それから過去の記憶

——自分おとといはつい一昨日までは立派にあなたで通つて来た——そ

れやこれやが寄つて、たかつて胸の中へ込み上げて来た上に、

相手の調子がいていねいかにも鄭寧で親切だから——つい泣きたくなつ

た。自分はその後ごいろいろな目に逢あつて、幾度となく泣きたく

なつた事はあるが、擦すれ枯からしの今日こんにちから見れば、大抵は泣くに

当らない事が多い。しかしこの時頭の中にたまつた涙は、今が

今でも、同じ羽目になれば、出かねまいと思う。苦しい、つらい、口惜くちおしい、心細い涙は経験で消す事が出来る。ありがた涙もこぼさずに済む。ただ墮落した自己が、依然として昔の自己である可他ひとから認識された時の嬉し涙は死ぬまでついて廻るものに違ない。人間はかように手前勘てまえかんの強いものである。この涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分のために書生を置いて、書生のために置いてやったような心持になると同じ事じゃないかしら。

こう云う訳で、飯場掛はんばがかりの言葉を一行ばかり聞くと、急に泣きたくなつたが、実は泣かなかつた。悄然しょうぜんとはしていたが、気は張っている。どこからか知らないが、抵抗心が出て来た。ただ思ふように口が利きけないから、黙つて向うの云う事を聞いていた。すると飯場掛りは嬉しいほど親切な口調で、こう云つた。

「……まあどうして、こんな所へ御出なすつたんだか、今の男が連れて来るくらいだから大概私にも様子は知れてはいるが——どうです、もう一遍考えて見ちやあ。きつと取ッ附坑夫になれて、金がうんと儲かるてえような旨い話でもしたんでしよう。それがさ、實際やつて見るとどうてい話の十が一にも行かないんだからつまらないです。第一坑夫と一口に云いますがね。なかなかただの人に来る仕事じゃない、ことにあなたのように学校へ行つて教育なんか受けたものは、どうしたつて勤まりつこありませんよ。……」

飯場頭はここまで来て、じつと自分の顔を見た。何とか云わなくつちやならない。幸いこの時はもう泣きたいところを通り越して、口が利けるようになっていた。そこで自分はこう云つ

た。――

「僕は――僕は――そんなに金なんか欲しくないです。何も儲けるためにやって来た訳じゃないんですから、――そりや知ってるです、僕だつて知ってるです……」

と、この時知ってるですを二遍繰り返した事を今だに記憶している。はなはだ穏かならぬ生意気な、ものの云いようだった。若いうちは、たった今まで悄気しよげていても、相手しだいですぐつけ上つちまう。まことに赤面の至りである。しかもその知ってるですが、何を知ってるのかと思うと、今自分を連れて来た男、すなわち長蔵ちさぞうさんは、一種の周旋屋であつて、すべての周旋屋に共通な法螺吹ほらふきであると云う真相をよく自覚していると云う意味なんだから、いくら知つてたつて自慢にならないのは無論である。それを念入に、瞞だま着れて来たんじゃない、万事承知の

上の坑夫志願だなどと説明して見たつて今更いまさらどうなるものじやない。ところが年が若いと虚栄心の強いもので——今でも弱いとは云わないが——しきりに弁解に取り掛つたのは実に冷汗の出るほどの愚ぐであつた。幸い相手が、こう云う家業かぎように似合あわぬ篤実とくじつな男で、かつ自分の不経験を氣の毒に思うのあまり、この生意氣を生意氣と知りながら大目に見てくれたもんだから、どやされずに済んだ。まことにありがたい。この飯場に住み込んだあとで、頭かしらの勢力の広大なるに驚くにつれて、僕は知つてゐるです、を思い出しては独りひと赧あかい顔をしていた。ついでに云うがこの頭の名は原駒吉はらこまきちである。今もつて自分は好い名だと思つてゐる。原さんは別に厭いやな顔つきもせず、黙つて自分の言訳を聞いていたが、やがて頭あたまを振り出した。その頭は大きな五分刈ごぶがりで額の所が面摺めんずれのように抜き上がつてゐる。

「そりや物数奇ものずきと云うもんでさあ。せつかく来たから是非やるつたつて、何も家うちを出る時から坑夫になると思いつめた訳でもないんでしよう。云わば一時いちじの出来心なんだからね。やって見りや、すぐ厭になつちまうな眼に見えてるんだから、廃よすが好ようがしよう。現に書生さんでここへ来て十日と辛抱したもののあ、有りやしませんぜ。え？ そりや来る。幾人いくたりも来る。来る事は来るが、みんな驚いて逃げ出しちまいますさあ。全く普通なみのものの出来る業わざじゃありませんよ。悪い事は云わないから御帰んなさい。なに坑夫をしなくつたつて、口過くちすぎだけなら骨は折れませんかやあ」

原さんはここに至つて、胡坐あぐらを崩くずして尻を宙に上げかけた。自分はどうしても落第しそうな按排あんぱいである。大いに困つた結果、坑夫と云う事から気を離して、自分だけを検査して見ると、——何だか急に寒くなつた。拾あわせはさつきの雨で濡ぬれてい

る。^{ズボンした}洋袴下は穿^はいていない。東京の五月もこの山の奥へ来ると
まるで二月か三月の氣候である。坂を登っている間こそ体温で
さほどにも思わなかった。原さんに拒絶されるまでは氣が張つ
ていたから、好かつた。しかし飯場^{はんば}へ来て休息した上に、坑夫に
なる見込^{みこ}がほとんど切れたとなると、情^{なさけ}ないのが寒いのと合併
して急に顫^{ふる}え出した。その時の自分の顔色は定めし見るに堪^たえ
んほど醜^{みにく}いもんだつたろう。この時自分はまた何となく、今し
がた自分を置去^{おきざり}にして、挨拶^{あいさつ}もしずに出て行つた長蔵さんが恋
しくなつた。長蔵さんがいたら、何とか尽力して坑夫にしてく
れるだろう。よし坑夫にしてくれないまでも、どうにか片をつ
けてくれるだろう。汽車賃を出してくれたくらいだから、方角
のわかる所までくらいは送り出してくれそうなものだ。墓口^{がまぐち}を
長蔵さんに取りられてから、懷中^{ふところ}には一文もない。帰るにしても、

帰る途中で腹が減つて山の中で行倒ゆきだおれになるまでだ。いつその事
今から長蔵さんを追掛けて見ようか。飯場飯場を探して歩いた
ら逢あえない事もないだろう。逢つてこれこれだと泣きついたら、
今までの交際つきあいもある事だから、好い智慧ちえを貸してくれまいもの
でもない。しかし別れ際に挨拶さえしない男だから、ひよつと
すると……自分は原さんの前で実はこんな閑ひまな事を、非常に忙
しく、ぐるぐる考えていた。好すきな原さんが前にいるのに、あん
まり下さらない、しかも消えてなくなつた長蔵さんばかりを相
談相手のように思い込んだのは、どう云う理由わけだろう。こんな
事はよくあるもんだから、いざと云う場合に、敵は敵、味方は
味方と板行はんこうで押したように考えないで、敵のうちで味方を探し
たり、味方のうちで敵を見露みあらわしたり、片方かたつばづかないように心
を自由に活動させなくつてはいけない。

弱輩じやくはいな自分にはこの機会きあひがまだ呑み込めなかつたもんだから、

原さんの前に立って顫えながら、へどもどしていると、原さんも気の毒になつたと見えて、

「あなたさえ帰る気なら、及ばずながら相談になろうじやありませんか」

と向うから口を掛けてくれた。こう切つて出られた時に、自分ははつとありがたく感じた。ばかりなら当り前だがはつと気がついた。——自分の相談相手は自分の志望を拒絶するこの原さんを除いて、ほかにないんだと気がついた。気がつくと同時にまた口が利きけなくなつた。是非坑夫にしてくれとも、帰るから旅費を貸してくれとも言いかねて、やつぱり立ちすくんでいた。気がついても何にもならない、ただ右の手で拳骨げんこつを拵こしらえて寒い鼻の下を擦こすつたように記憶している。自分はその前寄席よせへ行つ

て、よく噺家はなしかがこんな手真似てつきをするのを見た事があるが、自分でその通りを実行したのは、これが始めてである。この手真似を見ていた原さんが、今度はこう云った。

「失礼ながら旅費のことなら、心配しなくつても好ごさんす。どうかして上げますから」

旅費は無論ない。一厘たりとも金気かなけは肌に着いていない。のたれ死じにを覚悟の前でも、金は持つてる方が心丈夫だ。まして慢性の自滅で満足する今の自分には、たとい白銅一箇の草鞋わらじせん銭でも大切である。帰ると事がきまりさえすれば、頭を地に摺すりつけても、原さんから旅費を恵んで貰つたろう。実際こうなると廉恥れんちも品格もあつたもんじやない。どんな不体裁ふていさいな貰い方でもする。——大抵の人がそうなるだろう。またそうなつてしかるべきである。——しかしけつして褒めほめられた始末じやない。自

分がこんな事を露骨にかくのは、ただ人間の正体を、事実なりに書くんで、書いて得意がるのとは訳が違う。人間の生地きじはこれだから、これで差支さしつかえないなどと主張するのは、練羊羹ねりようかんの生地はあずき小豆だから、羊羹の代りに生小豆なまを嚙かんでれば差支ないと結論するのと同じ事だ。自分はこの時の有様を思い出すたびに、なりようけんんで、あんな、さもない料簡りょうかんになつたものかと、吾われながら愛想あいそが尽きる。こう云う下卑げびた料簡を起さずに、一生を暮す事のできる人は、経験の足りない人かも知れないが、幸な人である。また自分らよりも遙はるかに高尚な人である。生小豆のまずさ加減を知らないで、生涯しょうがい練羊羹ばかり味わつて結構な人である。

自分は、も少しの事で、手を合せて、見ず知らずの飯場頭はんばがしらからごうりきわずかの合力を仰ぐところであつた。それをやつとの事で喰い止めたのは、せつかくの好意ととので調えてくれる金も、二三日本賃宿にさんちきちんやど

で夜露を凌しのげば、すぐ無くなつて、無くなつた暁には、また当途あてどもなく流れ出さなければならぬと、冥々めいめいのうちに自覚したからである。自分は屑いさぎよく涙金なみだぎんを断つた。断つた表向は律義りちぎにも見える。自分もそう考えるが、よくよく詮索せんさくすると、慾の天秤てんびんに懸かけた、利害の判断から出ている事はたしかである。その証拠には補助こたわを断ると同時に、自分は、こんな事を言い出した。

「その代り坑夫に使つて下さい。せつかく来たんだから、僕はどうしてもやつて見る気なんですから」

「随分酔興すいきようですね」

と原さんは首を傾かしげて、自分を見つめていたが、やがて溜息のような声を出して、

「じゃ、どうしても帰る気はないんですね」
と云つた。

「帰るつたつて、帰る所がないんです」

「だつて……」

「家^{うち}なんかないんです。坑夫になれなければ乞食^{こじき}でもするより仕方がないです」

こんな押問答を二三度重ねている中に、口を利^きくのが大変楽になつて来た。これは思い切つて、無理な言葉を、出^でにくいと知りながら、我慢して使つた結果、おのずと拍子^{ひょうし}に乗つて来た勢いに違ないんだから、まあ器械的の变化と見倣^{みな}しても差支^{さしかえ}なからうが、妙なもので、その器械的の变化が、逆戻りに自分の精神に影響を及ぼして来た。自分の言いたい事が何の苦もなく口を出るに連れて——ある人はある場合に、自分の言いたくない事までも調子づいてべらべら饒舌^{しゃべ}る。舌はかほどに器械的なものである。——この器械が使用の結果加速度の効力を得るに

連れて、自分はだんだん大胆になつて来た。

いや、大胆になつたから饒舌れたんだろう、君の云う事は顛倒あべこべじゃないかとやり込める気なら、そうして置いてもいい。いいが、それはあまり陳腐ちんぷでかつ時々嘘うそになる。嘘と陳腐で満足しないものは自分の言分をもつともと首肯うなずくだろう。

自分は大胆になつた。大胆になるに連れて、どうしても坑夫に住み込んでやろうと決心した。また饒舌つておれば必ず坑夫になれるに違ないと自覺して来た。一昨日家おとというちを飛び出す間際まぎわまでは、夢にも坑夫になろうと云う分別は出なかつた。ばかりではない、坑夫になるための駆落かけおちと事がきまつていたならば、何となく恥あまいずかしくなつて、まあ一週間よく考えた上にと、出奔しゅつぽんの時期を曖昧あいまいに延ばしたかもしれない。逃亡はする。逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊つちくれだか分らない坑掘あなほりになり下るさが

目的の逃亡とは、何不足なく生育^{そだ}つた自分の頭には影さえ射さなかつたろう。ところが原さんの前で寒い奥歯を嚙^かみしめながら、しよう事なしの押問答をしているうちに、自分はどうかあつても坑夫になるべき運命、否^{いな}天職を帯びてるような気がし出した。この山とこの雲とこの雨を凌^{しの}いで来たからには、是非共坑夫にならなければ済まない。万一採用されない暁には自分に対して面目がない。——読者は笑うだろう。しかし自分は當時の心情を真面目^{まじめ}に書いてるんだから、人が見ておかしければおかしいほど、その時の自分に対して気の毒になる。

妙な意地だか、負けおし^{まけおし}、負惜みだか、それとも行倒れになるのが怖^{こわ}くて、帰り切れなかつたためだか、——その辺は自分にも曖昧だが、とにかく自分は、もつとも熱心な語調で原さんを口説^{くど}いた。「……そう云わずに使つて下さい。實際僕が不適當なら仕方が

ないが、まだやって見ない事なんだから——せつかく山を越して遠方をわざわざ来た甲斐かいに、一日いちんちでも二日ふつかでも、いいですから、まあ試しだと思つて使つて下さい。その上で、どうてい役に立たないと事がきまれば帰ります。きつと帰ります。僕だつて、それだけの仕事が出来なのに、押おしを強く御厄介ごやくかいになつてゐる気はないんですから。僕は十九です。まだ若いです。働き盛りです……」

と昨日きのう茶店の神さんかみが云つた通りをそのまま図に乗つて述べ立てた。後から考えると、これはむしろ人が自分を評する言葉で、自分が自分を吹聴ふいちようする文句ではなかつた。そこで原さんは少し笑い出した。

「それほどお望みなら仕方がない。何も御縁だ。まあやつて御覧なさるが好い。その代り苦しいですよ」

と原さんは何気なく裏の赤い山を覗くように見上げた。おおかた天気模様でも見たんだろう。自分も原さんといっしょに山の方へ眼を移した。雨は上がったが、暗く曇っている。薄気味の悪いほど怪しい山の中の空合だ。この一瞬時に、自分の願が叶つて、自分はまず山の中の人となった。この時「その代り苦しいですよ」と云つた原さんの言葉が、妙に氣に掛り出した。人は、ようやくの思いで刻下の志を遂げると、すぐ反動が来て、かえつて志を遂げた事が急に恨めしくなる場合がある。自分が望み通りここへ落ちつける口頭の辞令を受け取つた時の感じはいささかこれに類している。

「じゃね」——原さんは語調を改めて話し出した。——「じゃね。何しろ明日の朝シキへ這入って御覧なさい。案内を一人つけて上げるから。——それから——そうだ、その前に話して

置かなくつちやありませんがね。一口に坑夫と云うと、訳もない仕事のようなまやさしに思われましようが、なかなか外で聞いてるような生容易い業わざじゃないんで。まあ取っつけから坑夫になるなあ」と云つて自分の顔を眺ながめていたが、やがて、

「その体格じゃ、ちつとむずかしいかも知れませんか。坑夫でなくつても、好ようがすかい」

と気の毒そうに聞いた。坑夫になるまでには相当の階級と練習を積まなくつちやならないと云う事がここで始めて分つた。なるほど長蔵さんが坑夫坑夫と、さも名誉らしく坑夫を振り廻したはずだ。

「坑夫のほかになにかあるんですか。ここにゐるものは、みんな坑夫じゃないんですか」

と念のために聞いて見た。すると原さんは、自分を馬鹿にした

様子もなく、すぐそのわけを説明してくれた。

「銅山やまにはね、一万人も這入っててね。それが掘子ほりこに、シ、ユ、

ウに、山市やまいちに、坑夫と、こう四つに分れてるんでさあ。掘子ほりこつて

えな、一人前の坑夫に使えねえ奴になるんで、まあ坑夫の下働したばたらき

ですね。シ、ユ、ウは早く云うとシ、キなかの内の大工見たようなもの

かね。それから山市やまいちだが、こいつは、ただ石塊いしつころをこつこつ欠い

てるだけで、おもに子供——さつきも一人来たでしょう。ああ

云うのが当分坑夫の見習にやる仕事さね。まあざつと、こんな

ものですよ。それで坑夫となると請負うけおい仕事だから、間まが好いと

日に一円にも二円にも当る事もあるが、掘子は日当ねんで年ねんが年中ねんじゅう

三十五銭で辛抱しなければならぬ。しかもそのうち五分ごぶは親

方が取つちまつて、病氣でもしようもんなら手当が半分だから

十七銭五厘ですね。それで蒲団ふとんの損料が一枚三銭——寒いとき

は是非二枚要^いるから、都合で六錢と、それに飯代が一日十四錢五厘、御菜^{おさい}は別ですよ。——どうです。もし坑夫にいけなかつたら、掘子にでもなる氣はありますかね」

実のところはなりませんと勢いよく出る元氣はなかったが、ここまで来れば、今更^{いまさら}どうしたつて否^{いや}だと断られた義理のもんじやない。そこで、出来るだけ景氣よく、

「なります」

と答えてしまった。原さんにはこの答が断然たる決心のように受けとれたか、それとも、瘠^{やせがまん}我慢のつけ景氣^{げいき}のごとく響いたか、その辺は確^{しか}と分らないが、何しろこの一言^{いちごん}を聞いた原さんは、機嫌よく、

「じゃまあ、御上^{おあ}がんなさい。そうして、あした人をつけて上げるから、まあシキへ這入つて御覽なざるがいい。何しろ一万

人もいて、こんなに組々に分れているんだから、飯場はんばを一つでも預かってると、毎日毎日何だかだつて、うるさい事ばかりだね。せつかく頼むから置いてやる、すぐ逃げる。——一日いちにちに二三人はきつと逃げますよ。そうかと云つて、おとなしくしているかと思うと、病氣になつて、死んじまう奴が出て来て——どうも始末に行かねえもんでさあ。葬ともらいばかりでも日に五六組無い事あ、滅多めったにないからね。まあやる気なら本氣にやつて御覽なさい。腰を掛けてちや、足が草臥くたびれるだろう。こつちへ御上り」

この逐一ちくいちを聞いていた自分はたとい、掘子ほりこだろうが、山市やまいちだろうが一生懸命に働かなくつちやあ、原さんに対して済まない仕儀になつて来た。そこで心のうちに、原さんの迷惑になるよくな不都合はけつしてしまふときめた。何しろ年が十九だから

正直なものだつた。

そこで原さんの云う通り、足を拭いて尻をおろしているうちに、奥の方から婆さんが出て来て、——この婆さんの出ようがはなはだ突然で、ちよつと驚いたが、

「こつちへ御出なさい」

と云うから、好加減いいかげんに御辞儀をして、後あとから尾ついて行つた。小作こづくりな婆さんで、後姿きやしやの華奢な割合には、ぴんぴん跳はねるように活潑かつぱつな歩き方をする。幅ばの狭い茶色の帯をちよつきり結むすびにむすんで、なけなしの髪かみを頸窩ぼんのくぼへ片づけてその心棒しんぼうに鉛色かんざしの簪かんざしを刺している。そうして襷掛たすきがけであつた。何でも台所か——台所がなければ、——奥の方で、用事の真つ最中に、案内のため呼び出されたから、こう急がしそうに尻を振るんだらう。それとも山育やまそだちだからかしら。いや、飯場はんばだから優長ゆうちようにしちやいられないせいだらう。

して見ると、今日から飯場の飯を食い出す以上は自分だつて安閑としちゃいられない。万事この婆さんの型で行かなくつちやなるまい。——なるまい。——と力を入れて、うんと思つたら、さすがに草臥れた手足が急になるまいで充満して、頭と胸の組織がちよつと變つたような気分になつた。その勢いで広い階子段はしごだんを、案内に依じて、すとなすとなと景氣よく登つて行つた。が自分の頭が階子段から、ぬつと一尺ばかり出るや否や、この決心が、ぐうと退避たいじろいだ。

胸から上を階子段の上へ出して、二階を見渡すと驚いた。昼数たためかず

は何十枚だか知らないが遙はるかの突き当りまで敷き詰めてあつて、

その間には一重ひとえの仕切りさえ見えない。ちやうど柔道の道場か、

なにわふし

浪花節の席亭かつこうのような恰好で、しかも広さは倍も三倍もある。

だから、ただ駄々だだッびろ広い感じばかりで、畳の上でもまるで野原へ

出たとしきやあ思えない。それだけでも驚く価値は十分あるが、その広い原の中に大きな囲炉裏が二つ切つてある、そこへ人間が約十四五人ずつかたまつてゐる。自分の決心が退避いだと言ふのは、卑怯な話だが、全くこの人間にあつたらしい。平生から強がつていたにはいたが、若輩の事だから、見ず知らずの多勢の席へ滅多に首を出した事はない。晴の場所となると、ただでさえもじもじする。ところへもつて来て、突然坑夫の団体に生擒いけどられたんだから、この黒い塊かたまりを見るが早いか、いささか辟易ひるんじまつた。それも、ただの人間ならいい。と云つちや意味がよく通じない。——ただの人間が、坑夫になつてゐるなら差支さしつかえない。ところが自分の胸から上が、階子段を出ると、等しく、この塊の各部分が、申し合せたように、こつちを向いた。その顔が——実はその顔で全く畏縮いしゆくしてしまつた。と云うのはその顔がただ

の顔じゃない。ただの人間の顔じゃない。純然たる坑夫の顔であつた。そう云うより別に形容しようがない。坑夫の顔はどんなだろうと云う好奇心のあるものは、行つて見るより外に致し方がない。それでも是非説明して見ろと云うなら、ざつと話すが、——ほおぼね頬骨がだんだん高く聳そびえてくる。顎あごが競せり出す。同時に左右に突つ張る。眼が壺つぼのように引ッ込んで、眼球めだまを遠慮なく、奥の方へ吸いつけちまう。小鼻が落ちる。——要するに肉と云う肉がみんな退却して、骨と云う骨がことごとく呐喊とっかん展開するとでも評したら好かろう。顔の骨だか、骨の顔だか分らないくらいに、稜々りようりようたるものである。劇はげしい労役の結果早く年を取るんだとも解釈は出来るが、ただ天然自然に年を取つたつて、ああなるもんじやない。丸味とか、温味あたたかみとか、優味やさしみとか云うものは菓にしたくつても、探し出せない。まあ一口に云うと寧猛どうもう

だ。不思議にもこの寧猛な相が^{そう}一列一体の共有性になっていると見えて、^{いろり}囲炉裏の傍^{はた}の黒いものが等しく自分の方を向くと、またたく間に^ま寧猛な顔が十四五揃^{そろ}った。向うの^{とりま}囲炉裏を取捲いてる連中も同じ顔に違いない。さつき坂を上がってくるとき、長屋の窓から自分を見下^{みおろ}していた顔も全くこれである。して見ると組々の長屋に住んでいる総勢一万人の顔はことごとく寧猛なんだろう。自分は全く退避^{ひる}んだ。

この時婆さんが後^{うしろ}を振り返つて、

「こつちへおいでなさい」

と、もどかしそうに云うから、^す度胸を据えて、寧猛の方へ近づいて行つた。ようやく^{はた}囲炉裏の傍まで来ると、婆さんが、今度は、

「まあここへ御坐^{おすわ}んなさい」

と^さ差しずをしたが、ただ^{いいかげん}好加減な所へ坐れと云うだけで、別に

設けの席も何もないんだから、自分は黒い塊かたまりを避さけて、たつた一人畳の上へ坐つた。この間、寧猛な眼は、始終しじゅう自分に喰くつついてゐる。遠慮も何もありやしない。そうして誰も口を利きくものがない。取附端とりつきはを見出みいだすまでは、団体の中へ交り込む訳にも行かず、ぽつねんと独りひとぼっちで離れてゐるのは、寧猛の目標めじるしとなるばかりだし、大いに困つた。婆さんは、自分を紹介する段じゃない、器械的に「ここへ坐れ」と云つたなり、ちよつ切り結びの尻を振り立てて階子段はしごだんを降りて行つてしまつた。広い寄席よせの真中にたつた一人取り残されて、楽屋の出方でかた一同から、冷かされてるようなものだ、手持無沙汰てもちぶさたは無論である。ことさら今の自分に取つては心細い。のみならず裕一枚あわせではなはだ寒い。寒いのは、この五月の空に、かんかん炭を焼たいて寧猛共が囲炉裏いろりへあたつてゐるんでも分る。自分は仕方がないから、てれ隠かく

しに襯衣シヤツの釦ボタンをはずして腋わきの下へ手を入れたり、膝ひざを立てて、足の親指つねを抓つかつて見たり、あるいは腿ももの所を両手で揉もんで見たり、いろいろやつていた。こう云う時に、落ついた顔をして——顔ばかりじゃいけない、心しんから落ちついて、平気で坐つてゐる修業をして置かないと、大きな損だ。しかし、十九や、そこいらではとうてい覚束おぼつかない芸だから、自分はやむを得ず。前記の通りいろいろ馬鹿な真似まねをしていると、突然、

「おい」

と呼んだものがある。自分はこの時ちようど下を向いて鳴海紋なるみしほりの兵児帯へこおびを締め直していたが、この声を聞くや否や、電気仕掛の顔のように、首筋が急に釣かつた。見るとさっきの顔揃かおぞろいで、眼がみんなこつちを向いて、光つてゐる。「おい」と云う声は、どの顔から出たものか分らないが、どの顔から出たにしても大した

変りはない。どの顔も甯猛どうもうで、よく見るとその甯猛のうちに、
軽侮あなどと、嘲弄あざけりと、好奇の念が判然と彫りつけてあつたのは、首
を上げる途端とたんに発明した事実で、発明するや否や、非常に不愉
快に感じた事実である。自分は仕方がないから、首を上げたま
ま、「おい」の声がもう一遍出るのを待っていた。この間が約何
秒かかったか知らないが、とにかく予期の状態で一定の姿勢に
おつたものらしい。すると、いきなり、

「やに澄すますねえ」

と云つたものがある。この声はきつきの「おい」よりも少し皺しやが枯
れていたから、大方別人だろうと鑑定した。しかし返答をする
べき性質たちの言葉でないから——字で書くとき普通のねえのように
見えるが、実はなよの命令を倶利伽羅流くりからりゅうに崩くずしたんだから、は
なはだ下等である。——それでやつぱり黙つてた。ただ内心で

は大いに驚いた。自分がここへ来て言葉を交したものは原さんと婆さんだけであるが、婆さんは女だから別として、原さんは思ったよりも叮嚀ていねいであった。ところが原さんは飯場頭はんばがしらである。頭かしらですらこれだから、平ひらの坑夫は無論そう野卑ぞんざいじやあるまいと思ひ込んでいた。だから、この悪口あくたいが藪やぶから棒ぼうに飛んで来た時には、こいつはと退避ひるむ前に、まずおやつと毒氣を抜かれた。ここでいつその事毒突返どくづきかえしたなら、袋叩ふくろたたきに逢あうか、または平等の交際が出来るか、どつちか早く片がついたかも知れないが、自分は何にも口答えをしなかった。もともと東京生れだから、この際何とか受けるくらいは心得ていたんだろう。それにもかかわらず、兄あにいに類似した言語は無論、尋常の竹篋返しつぺいがえしさえ控えたのは、——相手にならないと先方さきを輕蔑けいべつしたためだろうか——あるいは怖こわくって何とも云う度胸がなかったんだろうか。自分

は前の方だと云いたい。しかし事實はどうも後の方らしい。とにかくも両方交つてたと云うのが一番穩おだやかのように思われる。世の中には輕蔑しながらも怖いものが沢山いくらもある。矛盾にやならない。

それはどつちにしたつて構わないが、自分がこの惡口あくたいを聞いたなり、おとなしく聞き流す料簡りょうけんと見て取つた坑夫共は、面白そうにどつと笑つた。こつちがおとなしければおとなしいほど、この笑は高く響いたに違ない。銅山やまを出れば、世間が相手にしてくれない返報に、たまたま普通の人間が銅山の中へ迷い込んで来たのを、これ幸いさいわいと嘲弄ちょうろうするのである。自分から云えば、この坑夫共が社会はに對する恨みうらみを、吾身わがみ一人で引き受けた訳になる。銅山へ這入るまでは、自分こそ社会に立てない身体からだだと思ひ詰めていた。そこで飯場はんばへ上つて見ると、自分のような人

間は仲間にしてやらないと云わんばかりの取扱いである。自分は普通の社会と坑夫の社会の間に立つて、立派に板挟みいたばさとなつた。だからこの十四五人の笑い声が、ほてるほど自分の顔の正面に起つた時は、悲しいと云うよりは、恥ずかしいと云うよりは、手持無沙汰てもちぶさたと云うよりは、情ないほど不人情な奴が揃つてそろると思つた。無教育は始めから知れている。教育がなければ予期出来ないほどの無理な注文はしないつもりだが、なんぼ坑夫だつて、親の胎内から持つて生れたままの、人間らしいところはあるだろうくらいに心得ていたんだから、この寸法おこに合わない笑声を聞くや否や、畜生奴ちくしようめと思つた。俗語に云う怒つた時の畜生奴じゃない。人間と受取れない意味の畜生奴である。今では経験の結果、人間と畜生の距離がだいぶん詰つてゐるから、このくらいの事をと、鈍い神経の方で相手にしないかも知れない

が、何しろ十九年しか、使っていない新しい柔かい頭へこのわる笑がじんと来たんだから、切^{せつ}なかつた。自分ながら思い出すたびに、まことに痛わしいような、いじらしいような、その時の神経系統をそのまま真綿^{くる}に包んで大事にしまつて置いてやりたいような気がする。

この悪意に充^みちた笑がようやく下火になると、

「御前^{おめえ}はどこだ」

と云う質問が出た。この質問を掛けたものは、自分から一番近い所に坐^{でどころ}つていたから、声の出所は判然^{はつきり}分つた。浅黄色^{あさぎいろ}の手拭染^{てぬぐいじ}みた三尺帯を腰骨の上へ引き廻して、後向き^{うしろむ}の胡坐^{あぐら}のまま、斜^{はす}に顔だけこつちへ見せている。その片眼は生れつきの赤んべんで、おまけに結膜^{けつまく}が一面に充血している。

「僕は東京です」

と答えたら、赤んべんが、肉のない頬を凹へこまして、愚弄ぐろうの笑いを洩もらしながら、三軒置いて隣りの坑夫をちよいと顎あごでしゃくつた。するとこの相図を受けた、願人坊主がんになぼうずが、入れ替つてこんな事を云つた、

「僕だなんて——書生しよせツ坊ぼだな。大方女郎買でもしてしくじつたんだろう。太え奴だ。全体ぜんてえこの頃の書生ツ坊の風儀が悪くつていけねえ。そんな奴に辛抱が出来るもんか、早く帰けえれ。そんな瘡やせつこけた腕でできる稼業かぎようじゃねえ」

自分はだまつていた。あんまり黙つていたので張合はりあいが抜けたせいか、わいわい冷かすのが少し静まつた。その時一人の坑夫——これは尋常な顔である。世間へ出しても普通に通用するくらいに眼鼻立ととのが調つていた。自分は、冷かされながら、眼を上げて、黒い塊かたまりを見るたびに、人数にんずやら、着物やら、着物やら、犖猛どうもうの度合

やらをだんだん腹に畳み込んでいたが、最初は総体の顔が総体に骨と眼でできた上に獣慾の脂あぶらが浮いているところばかり眼に着いて、どれも、これも差別がないように思われた。それが三度四度と重なるにつけて、四人五人と人相の区別ができるに連れて、この坑夫だけが一際目立って見えるようになった。年はまだ三十にはなるまい。体格は倔強くつきやうである。眉毛まみえと鼻の根と落ち合う所が、一段奥へ引つ込んで、始終鼻眼鏡で圧おしつけてるように見える。そこに疳癰かんしゃくが拘泥こうでいしていそうだが、これがために獍猛の度はかえって減ずると云つても好いような特徴であつた。——この坑夫が始めてこの時口を利きいた。——

「なぜこんな所へ来た。来たつて仕方がないぜ。儲もうかる所じゃない。ここにいる奴あ、みんな食詰くいづめものばかりだ。早く帰るが好かろう。帰つて新聞配達でもするがいい。おれも元はこれで

学校へも通つた^{かよ}もんだが、放蕩^{ほうとう}の結果とうとう、シ、キの飯を食うようになつちまつた。おれのようになつたが最後もう駄目だ。帰ろうたつて、帰れなくなる。だから今のうちに東京へ帰つて新聞配達をしろ。書生はとて^{ひとつき}も一月と辛抱は出来ないよ。悪い事は云わねえから帰れ。分つたろう」

これは比較的^{まじめ}真面目な忠告であつた。この忠告の最中は、さすがの獐^{どうあくは}惡派もおとなしく交^{まぜ}つ返しもせずに聞いていた。その惰性で忠告が済んだあとも、一時は静であつた。もつともこれはこの坑夫に多少の勢力があるんで、その勢力に対しての遠慮かも知れないと勘づいた。その時自分は何となく心の底で愉快だつた。この坑夫だつて、ほかの坑夫だつて、人相にこそ少しの変化はあれ、やっぱり一つ穴でこつこつ^{あらがね}鉋塊を欠いている分の事だろう。そう芸に巧拙^{こうせつ}のあるはずはない。して見ると、この

男の勢力は全く字が読めて、物が解つて、分別があつて——一口に云うと教育を受けたせいに違ない。自分は今こんなに馬鹿にされている。ほとんど最下等の労働者にさえ齒よわいされない人非人にんびにんとして、多勢たぜいの侮辱を受けている。しかし一度この社会に首をつつこ突込んで、寧猛組どうもうぐみの一人となりすましたら、一月二月と暮して行くうちには、この男くらいの勢力を得る事はできるかも知れない。できるだろう。できるにきまつてるとまで感じた。だから、いくら誰が何と云つても帰るまい、きつとこの社会で一人前以上になつて成功して見せる。——随分思い切つてつまらない考えを起したもんだが、今から見ても、多少論理には叶かなつているようだ。そこでこの坑夫の忠告には謹つつしんで耳を傾かたむけていたが、別段先方の注文通りに、では帰りましょうと云う返事もしなかった。そのうちいったん静まりかけた愚弄ぐろうの舌したがまた動き

出した。

「いる気なら置いてやるが、ここにや、それぞれ掟おきてがあるから呑み込んで置かなくっちゃ迷惑だぜ」

と一人が云うから、

「どんな掟ですか」

と聞くと、

「馬鹿だなあ。親分もあり兄弟分きょうでいぶんもあるじゃねえか」

と、大変な大きな声を出した。

「親分たどんなもんですか」

と質問して見た。実はあまりがみがみ云うから、黙つていかしらんとも思つたけれども、万一掟を破つて、あとで苛ひどい目に逢あうのが怖こわいから、まあ聞いて見た。すると他の坑夫ほかが、すぐ、返事をした。

「しようのねえ奴だな。親分を知らねえのか。親分も兄弟分も知らねえで、坑夫になろうなんて料簡違えだ。早く帰れ」

「親分も兄弟分もいるから、だから、儲けようたつて、そう旨かあ行かねえ。帰れ」

「儲かるもんか帰るが好い」

「帰れ」

「帰れ」

しきりに帰れと云う。しかも實際自分のためを思つて帰れと云うんじゃない。仲間入をさせてやらないから出て行けと云うのである。さぞ儲けたいだろうが、そうは問屋で卸さない、こちとらだけで儲ける仕事なんだから、諦めて早く帰れと云うのである。したがつてどこへ帰れとも云わない。川の底でも、穴の中でも構わない勝手な所へ帰れと云うのである。自分は黙つ

ていた。

この形勢がこのままで続いたら、どんな事にたち至ったか思
いやられる。敵はこの囲炉裏いろりの周囲まわりばかりにやいない。さつき
ちよつと話した通り、向うの方にも大きな輪になつて、黒く塊かたまつ
ている。こつちの団体だけですら持ち扱つているところへ、あつ
ちの群勢ぐんぜいが加勢したら大事だいじである。自分は愚弄ぐろうされながらも、
時々横目を使つて、未来の敵——こうなると、どれもこれも人
間でさえあれば、敵と認定してしまう。——遠方にはおるが、
そろそろ押し寄せて来そうな未来の敵を、見ていた。かように
自分の心が、左右前後と離れ離れになつて、しかも独立ができ
ないものだから、物の後あとを追掛おっかけ、追ん廻めぐわしているほど辛つらい
事はない。なんでも敵に逢あつたら敵を呑のむに限る。呑む事がで
きなれば呑まれてしまふが好い。もし両方共困難ならぷつり

と縁を截^きつて、独立自尊の態度で敵を見ているがいい。敵と融合する事もできず、敵の勢力範囲外に心を持つてく事も出来ず、しかも敵の尻を嗅^かがなければならぬとなると、はなはだしき損となる。したがつてもつとも下等である。自分はこう云う場合^{ばあひ}にたびたび遭遇して、いろいろな活路を研究して見たが、研究したほどに、心が云う事を聞かない。だからここに申す三策は、みんな釈迦^{しやか}の空説法^{からぜつぽう}である。もし講釈をしないでも知れ切つて陳説^{ちんせつ}なら、なおさら言うだけが野暮^{やぼ}になる。どうも正式の学問をしないと、こう云う所へ来て、取捨の区別がつかなくつて困る。

自分が四方八方に気を配つて、自分の存在を最高度に縮小して恐れ入っていると、

「御膳^{ごぜん}を御上^{ごせん}がんなさい」

と云う婆さんの声が聞えた。いつの間に婆さんが上がつて来たんだか、自分の魂が鳩の卵のように小さくなつて、萎縮した真最中だったから、御膳の聲が耳に入るまではまるで気がつかなくつた。見ると剥げた御膳の上に縁の欠けた茶碗が伏せてある。小さい飯櫃も乗っている。箸は赤と黄に塗り分けてあるが、黄色い方の漆が半分ほど落ちて木地が全く出ている。御菜には糸蒔蒔が一皿ついていた。自分は伏目になつてこの御膳の光景を見渡した時、大いに食いたくなつた。実は今朝から水一滴も口へ入れていない。胃は全く空である。もし空でなければ、昨日食つた揚げ饅頭と薩摩芋があるばかりである。飯の気を離れる事約二昼夜になるんだから、いかに魂が萎縮しているこの際でも、御櫃の影を見るや否や食欲は猛然として咽喉元まで詰め寄せて来た。そこで、冷かしも、交ぜつ返しも気に掛ける暇なく、見栄も糸瓜

も棒に振つて、いきなり、お櫃はちからしやくつて茶碗へ一杯盛り上げた。その手数てかずさえ面倒なくらい待ち遠しいほどであつたが、例の剥箸はげばしを取り上げて、茶碗から飯をすくい出そうとする段になつて——おやと驚いた。ちつともすくえない。指の股またに力を入れて箸をうんと底まで突つ込んで、今度こそはと、持上げて見たが、やつぱり駄目だ。飯はつるつると箸の先から落ちて、けつして茶碗の縁ふちを離れようとしなない。十九年来いまだかつてない経験だから、あまりの不思議に、この仕損しくじりを二三度繰り返して見た上で、はてなと箸はしを休めて考えた。おそらく狐つまに撮つままれたような風であつたんだろう。見ていた坑夫共はまたぞろ、どつと笑い出した。自分はこの声を聞くや否や、いきなり茶碗を口へつけた。そうして光沢つやのない飯を一口掻かき込んだ。すると笑い声よりも、坑夫よりも、空腹よりも、舌三寸の上だけへ

魂が宿つたと思うくらいに変な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土である。この壁土が唾液つばぎに和とけて、口いっぱいに広がった時の心持は云うに云われなかつた。

「面つらあ見ろ。いい様さまだ」

と一人が云うと、

「御祭日おさいじつでもねえのに、銀米ぎんまいの気でいやがらあ。だから帰けえれつ

て教おせえてやるのに」

と他ほかのものが云う。

「南京米ナンキンめえの味も知らねえで、坑夫になろうなんて、頭りようけんちげえつから料簡違

だ」

とまた一人が云つた。

自分は嘲弄ちようろうのうちに、術じゆつなくこの南京米ナンキンまいを呑み下した。一口

でやめようと思つたが、せつかく盛り込んだものを、食つてしま

わないと、また冷かされるから、熊の胆いを呑む氣になつて、茶碗に盛つただけは奇麗きれいに腹の中へ入れた。全く食慾のためではない。昨日きのう食つた揚饅頭あげまんじゅうや、ふかし芋いもの方が、どのくらい御馳走ごちそうであつたか知れない。自分が南京米の味を知つたのは、生れてこれが始てである。

茶碗に盛つただけは、こう云う訳で、どうにか、こうにか片づけたが、二杯目は我慢にも盛よそう氣にならなかつたから、糸蒚いとごん蒚にやくだけ食つて箸を置く事にした。このくらい辛抱して無理に厭いやなものを口に入れてさえ、箸を置くや否や散々に嘲弄された。その時は随分つらい事と思つたが、その後日ごに三度ずつは、必ずこの南京米に対むかわなくつちやならない身分となつたんで、さすがの壁土も慣なれるに連つれて、いわゆる銀米と同じく、人類の食い得べきもの、否食つてしかるべき滋味と心得るようになつ

てからは、剥膳はげぜんに向つて逡巡しりごみした当時がかえつて恥ずかしい氣持になつた。坑夫共の冷かしたのも万更まんざら無理ではない。今となると、こんな無経験な貴族的の坑夫が一杯の南京米を苦やに病むところに廻めぐり合わせて、現状を目撃したら、ことに因よると、自分でさえ、笑うかも知れない。冷かさないまでも、善意に笑うだけの価値ねうちは十分あると思う。人はいろいろに変化するもんだ。

南京米の事ばかり書いて済まないから、もうやめにするが、この時自分の失敗しくじりに対する冷評は、自然のままにして抛ほうつて置いたなら、どこまで続いたか分らない。ところへ急に金盥かなだらを叩たたき合せるような音がした。一度ではない。二度三度と聞いているうちに、じゃじゃん、じゃらんと時を匂く切ぎつて、拍子ひょうしを取りながら叩き立てて来る。すると今度は木唄きやうの聲が聞え出した。純粹の木唄では無論ないが、自分の知つてゐる限りでは、まあ木

唄と云うのが一番近いように思われる。この時冷評は一時にやんだ。ひっそりと静まり返る山の空氣に、じゃじゃん、じゃらんが鳴り渡る間を、一種異様に唄うたい囃はやして何物か近づいて来た。

「ジャン、ボー、だ」

と一人が膝頭ひざがしらを打たないばかりに、大きな声を出すと、

「ジャン、ボー、だ。ジャン、ボー、だ」

と大勢口々に云いながら、黒い塊かたまりがばらばらになつて、窓の方

へ立つて行つた。自分は何がジャン、ボー、なんだか分らないが、

みんなの注意が、自分を離れると同時に、気分が急に暢達のんびりした

せいか、自分もジャン、ボー、を見たいと云う余裕ができて、余裕

につれて元氣も出来た。つくづく考えるに、人間の心は水のよ

うなもので、押されると引き、引くと押して行く。始終手を出

さない相撲をとつて暮らしていると云つても差支なからう。それで、みんなが立ち尽したあとから、自分も立つた。そうしてやつぱり窓の方へ歩いて行つた。黒い頭で下は塞がつている上から背伸せえのびをして見下みおろすと、斜はすに曲つてゐる向むこうの石垣の角から、紺こんの筒袖つつそでを着た男が二人出た。あとからまた二人出た。これはいずれも金盃おを圧おしつぶして薄うすっ片ぺらにしたようなものを両手に一枚ずつ持っている。ははあ、あれを叩くんだと思う拍子に、二人は両手をじゃじゃんと打ち合わせた。その不調和な音が切つ立つた石垣に突き当つて、後の禿山うしろ かげやまに響いて、まだやまないうちに、じゃらんとまた一組が後あとから鳴らし立てて現れた。たと思うとまた現れる。今度は金盃おを持っていない。その代り木唄——さつきは木唄と云つた。しかしこの時、彼らの揚げた声は、木唄と云わんよりはむしろ浪花節なにわふしで咄喊とっかんするような稀代きたいな

調子であつた。

「おい金公きんこうはいねえか」

と、黒い頭の一つが怒鳴どなつた。後向うしろむきだから顔は見えない。すると、

「うん金公に見せてやれ」

とすぐ応じた者がある。この言葉が終るか、終らない間に、五つ六つの黒い頭がずらりとこつちを向いた。自分はまた何か云われる事と覚悟して仕方なしに、今までの態度で立っていると、不思議にも振り返つた眼は自分の方に着いていない。広い部屋の片隅に遠く走つた様子だから、何物がある事かと、自分も後を追つ懸かけて、首を捻ねじ向けると、——寝ている。薄い布団ふとんをかけて一人寝ている。

「おい金州きんしゅう」

と一人が大きな声を出したが、寝ているものは返事をしない。

「おい金しゅう起きろやい」

どなり

と怒鳴つけるように呼んだが、まだ何とも返事がないので、三人ばかり窓を離れてとうとう迎^{むかえ}に出掛けた。被^{かぶ}つてゐる布団^{ふとん}を手荒にめくると、細帯をした人間が見えた。同時に、

「起きろつてば、起きろやい。好いものを見せてやるから」

と云う声も聞えた。やがて横になつてた男が、二人の肩に支えられて立ち上つた。そうしてこつちを向いた。その時、その刹那^{せつな}、

その顔を一目見たばかりで自分は思わず慄^{ぞつ}とした。これはただ

保養に寝ていた人ではない。全くの病人である。しかも自分だ

けで起居^{たちい}のできないような重体の病人である。年は五十に近い。

髯^{ひげ}は幾日も剃^そらないと見えてぼうぼうと延びたままである。い

かな寧^{どうもう}猛も、こう憔悴^{やつれ}すると憐^{あわ}れになる。憐れになり過ぎて、逆

にまた怖こわくなる。自分がこの顔を一目見た時の感じは憐れきよくの極きよく全く怖こわかった。

病人は二人に支えられながら、釣られるように、利きかない足を運ばして、窓の方へ近寄ってくる。この有様を見ていた、窓際の多人数たにんずは、さも面白そうに囃はやし立てる。

「よう、金きんしゅう早く来いよ。今ジャンボジャンボが通るところだ。

早く来て見ろよ」

「己おらあジャンボジャンボ、なんか見たかねえよ」

と病人は、無体むたいに引き摺ずられながら、氣のない声で返事をするうちに、見たいも、見たくないもありやしない。たちまち窓の障子しょうじの角かどまで圧おしつけられてしまった。

じゃじゃん、じゃららんとジャンボジャンボは知らん顔で石垣の所へ現れてくる。行列はまだ尽きないのかと、また背延せいのびをして

見下した時、自分は再び慄とした。金盥かなだらと金盥いの間に、四角な早桶はやおけが挟はさまって、山道を宙に釣られて行く。上は白金巾しろかなぎんで包んで、細い杉丸太を通した両端りょうたんを、水でも一荷いっか頼まれたように、容赦なく担かついでいる。その担いでいるものまでも、こつちから見ると、例の唄うたを陽気にうたつてるように思われる。——自分はこの時始めてジャンボンボの意味を理解した。生涯しょうがいいかなる事があつても、けつして忘れられないほど痛切に理解した。ジャンボンボは葬式である。坑夫、シチユウ、掘子ほりこ、山市やまいちに限って執行される、また執行されなければならぬ一種の葬式である。御経いっかの文句を浪花節ななわぶしに唄うたつて、金盥つぶの潰れるほどに音楽を入れて、一荷いっかの水と同じように棺桶かんおけをぶらつかせて——最後に、半死半生の病人を、無理矢理に引き摺り起して、否いやと云うのを抑えつけるばかりにしてまで見せてやる葬式である。まことに無邪気

の極^{きよく}で、また冷刻の極である。

「金しゅう、どうだ、見えたか、面白いだろう」

と云ってる。病人は、

「うん、見えたから、床^{とこ}ん所まで連れてつて、寝かしてくれよ。
後生^{ごしょう}だから」

と頼んでいる。さっきの二人は再び病人を中へ挟んで、

「よつしよいよつしよい」

と云いながら、刻^{きざ}み足に、布団^{ふとん}の敷いてある所まで連れて行つた。

この時曇った空が、粉になつて落ちて来たかと思われるような雨が降り出した。ジ、ヤ、ン、ボ、ーはこの雨の中を敲^{たた}き立てて町の方^{くた}へ下つて行く。大勢は

「また雨だ」

と云いながら、窓を立て切つて、各々囲炉裏の傍へ帰る。この混雑紛に自分もいつの間にか嚙猛の仲間入りをして、火の近所まで寄る事が出来た。これは偶然の結果でもあり、また故意の所作でもあつた。と云うものは火の気がなくつてははなはだ寒い。拾一枚ではとても凌ぎ兼ねるほどの山の中だ。それに雨さえ降り出した。雨と云えば雨、霧と云えば霧と云われるくらいな微かな粒であるが、四方の禿山を罩め尽した上に、筒抜けの空を塗り潰して、しとどと落ちて来るんだから、家の中に坐つていてさえ、糠よりも小さい湿り気が、毛穴から腹の底へ沁み込むような心持である。火の気がなくつてはとうていやり切れるものじゃない。

自分が好い加減な所へ席を占めて、いささかながら囲炉裏のほとぼりを顔に受けていると、今度は存外にも度外視されて、

思つたよりも調戲からかわれずに済んだ。これはこつちから進んで獐
 猛の仲間入りをしたため、向うでも普通の獐猛として取扱うべ
 き奴だと勘弁してくれたのか、それとも先刻さつきのジャンボーで不
 意に気が変つた成行なりゆきとして、自分の事をしばらく忘れてくれた
 のか、または冷笑ひやかしの種が尽きたか、あるいは毒突どくづくのに飽きた
 んだか、——何しろ自分が席を改めてから、自分の気は比較的
 楽になった。そうして囲炉裏の傍の話はやっぱりジャンボーで
 持ち切つていた。いろいろな声がこんな事を云う。——

「あのジャンボーはどこから出たんだろう」

「どこから出たつて御おジャンボーだ」

「ことによると黒市組くろいちぐみかも知れねえ。見当けんとうがそうだ」

「全体ぜんてえジャンボーになつたらどこへ行くもんだろう」

「御寺よ。きまつてらあ」

「馬鹿にするねえ。御寺の先を聞いてるんだあな」

「そうよ、そりや寺限てらぎりで留りとまつこねえ訳だ。どつかへ行くに違ちがえねえ」

「だからよ。その行く先はどんな所ところだろうてえんだ。やつぱしこんな所ところかしら」

「そりや、人間の魂の行く所だもの、大抵は似た所に違えねえ」
「己おれもそう思ってる。行くとなりや、どうもほかへ行く訳がねえからな」

「いくら地獄だつて極楽ごくらくだつて、やつぱり飯は食うんだろう」

「女もいるだろうか」

「女のいねえ国が世界にあるもんか」

「ざつと、こんな談話だから、聞いているとめちやめちやである。それで始めのうちは冗談じょうだんだと思つた。笑つても差支さしつかないも

のと心得て、口の端をむずつかせながら、ちよつと様子を見渡したくらいであつた。ところが笑いたいのは自分だけで、囲炉裏を取り捲まいてゐる顔はいずれも、彫りつけたように堅くなつてゐる。彼らは真剣の真面目で未来と云う大問題を論じてゐるのである。実に嘘うそとしか受け取れないほどの熱心が、各々の眉まゆの間に見えた。自分はこの時、この有様を一瞥いちべつして、さっきの笑ひたかつた念慮をたちまちのうちに一変した。こんな向う見ずの無鉄砲な人間が——カン、テ、ラを提さげて、シ、キの中へ下りれば、もう二度と日の目を見ない料簡りょうけんでゐる人間が——人間の器械で、器械の獣けだものとも云うべきこの寧猛組どうもうぐみが、かほどに未来の事を氣にしていようとは、まことに予想外であつた。して見ると、世間には、未来の保証をしてくれる宗教というものが入用いりようのはずだ。實際自分が眼を上げて、囲炉裏いろりのぐるりに胡坐あぐらをかいて

並んだ連中を見渡した時には、遠慮に畏縮いしゆくが手伝つて、七分方しちぶがたでき上った笑いを急に崩くずしたと云う自覚は無論なかった。ただ寄席よせを聞いてるつもりで眼を開けて見たら鼻の先に毘沙門様びしゃもんさまが大勢いて、これはと威儀を止さなければならぬ氣持であつた。一口に云うと、自分はこの時始めて、真面目な宗教心の種を見て、半獸半人の前にも嚴格の念を起したんだらう。その癖自分はいまだに宗教心と云うものを持つていない。

この時さつきの病人が、向うの隅でううんと唸うなり出した。その唸り声には無論特別の意味はない。単に普通の病人の唸り声に過ぎんだが、ジャンボ一の未来に屈託くたくしている連中には、一種のあやしい響のように思われたんだらう。みんな眼と眼を見合した。

「金公きんこう苦しいのか」

と一人が大きな声で聞いた。病人は、ただ、

「ううん」

と云う。唸つてゐるのか、返事をしてゐるのか判然しない。するとまた一人の坑夫が、

「そんなに鼻なかの事ばかり気にするなよ。どうせ取られちまつたんだ。今更唸いまさらつたつてどうなるもんか。質に入れた鼻だ。受出さなけりや流れるなあ当り前だ」

と、やつぱり囲炉裏そばの傍へ坐つたまま、大きな声で慰なぐさめてゐる。

慰めてゐるんだか、悪口あくぐちを吐ついてゐるんだか疑わしいくらいである。

坑夫から云うと、どつちも同じ事なんだろう。病人はただうんと挨拶あいさつ——

挨拶あいさつにもならない声を微かすかに出すばかりであつた。

そこで大勢は懸合かけあいにならない慰藉いしやをやめて、囲炉裏まわりの周囲

だけで舌したの用を弁じていた。しかし話題はまだ金さんを離れな

い。

「なあに、病氣せえしなけりや、金公だつて鼻を取られずに済むんだあな。元を云やあ、やつぱり自分が悪いからよ」

と一人が、金さんの病氣をさも罪惡のように評するや否や、

「全くだ。自分が病氣をして金を借りて、その金が返せねえから、鼻を抵当に取られちまつたんだから、正直のところ文句もんくの附けようがねえ」

と賛成したものがある。

「若干いくちで抵当に入れたんだ」

と聞くと、向側むこうがわから、

「五両だ」

と誰だか、簡潔に教えた。

「それで市いちの野郎が長屋へ下がって、金しゅうと入れ代った訳

か。ハハハハ」

自分は囲炉裏そばの側に坐つてゐるのが苦痛であつた。背中の方がぞくぞくするほど寒いのに、腋わきの下から汗が出る。

「金しゅうも早く癒なおつて、鼻かかあを受け出したら好かろう」

「また、市いちと入れ代りか。世話あねえ」

「それよりか、うんと稼かせいで、もつと価ねに踏める抵当でも取つた方が、気が利きいてらあ」

「違ちがねえ」

と一人が云い出すのを相図に、みんなどつと笑つた。自分はこの笑の中に包まれながら、どうしても笑い切れずに下を向いてしまった。見ると膝ひざを並べて畏かしこまつていた。馬鹿らしいと気がついて、胡坐あぐらに組み直して見た。しかし腹の中はけつして胡坐あぐらをかくほど悠長ゆうちやうではなかつた。

その内だんだん日暮に近くなつて来る。時間が移るばかりじゃない、天氣の具合と、山が囲^あんでるせいで早く暗くなる。黙つて聞いていると、雨垂^{あまだれ}の音もしないようだから、ことによると、雨はもう歇^やんだのかも知れない。しかしこの暗さでは、やつぱり降つてると云う方が当るだろう。窓は固^もり締め切つてある。戸外^{そと}の模様は分りようがない。しかし暗くつて湿^{しめ}っぽい空氣が障子^{しょうじ}の紙を透^こして、一面に囲^い炉裏^{ろり}の周圍^{まわり}を襲^{おそ}つて来た。並んでいる十四五人の顔がしだいしだいに漠然^{ぼんやり}する。同時に囲^い炉裏^{ろり}の真中^{まんなか}に山のようにくべた炭の色が、ほてり返つて、少しずつ赤く浮き出すように思われた。まるで、自分は坑^{あな}の底へ滅入^{めいりこ}込んで行く、火はこれに反して坑からだんだん競^せり上がつて来る、——ざつと、そんな氣分がした。時にぱつと部屋中が明るくなつた。見ると電氣灯が点^ついた。

「飯でも食うべえ」

と一人が云うと、みんな忘れものを思い出したように、

「飯を食つて、また交替か」

「今日は少し寒いぞ」

「雨はまだ降つてるのか」

「どうだか、表へ出て仰向あおもむいて見な」

などと、口々に罵ののりながら、立つて、階下段はしごだんを下りて行つた。

自分は広い部屋にたった一人残された。自分のほかにいるもの

は病人の金さんきんばかりである。この金さんがやつぱり微かすかな声を

出して唸うなつてるようだ。自分は囲炉裏の前に手を翳かざして胡坐を

組みながら、横を向いて、金さんの方を見た。頭は出ていない。

足も引つ込ましている。金さんの身体からだは一枚の布団ふとんの中で、小

さく平つたくなっている。気の毒なほど小さく平つたく見えた。

その内唸^{うちうな}り声^{こゑ}も、どうにか、こうにかやんだようだから、また顔の向^{むき}を易^かえて、囲炉裏の中を見詰めた。ところがなんだか金さんが氣に掛かつてたまらないから、また横を向いた。すると金さんはやつぱり一枚の布団の中で、小さく平つたくなっている。そうして、森^{しん}としている。生きてるのか、死んでるのか、ただ森としている。唸られるのも、あんまり氣味の好いもんじやないが、こう静かにしていられるとなお心配になる。心配の極^{きよく}は怖^{こわ}くなつて、ちよつと立ち懸けたが、まあ大丈夫だろう、人間はそう急に死ぬもんじやないと、度胸^すを据えてまた尻を落ちつけた。

ところへ二三人、下からどやどやと階下段^{はしごだん}を上がつて来た。もう飯を済ましたんだろうか、それにしては非常に早いかと、心持上がり段の方を眺^{なが}めていると、思も寄らないものが、現れた。

——黒か紺こんか色の判然はつきりしない筒服つつぽうを着ている。足は職人の穿はくような細い股引ももひきで、色はやはり同じ紺である。それでカンテラを提さげている。のみならず二人ふたありが二人とも泥だらけになって、濡ぬれてる。そうして、口を利きかない。突つ立つたまま自分の方をぎろりと見た。まるで強盗としきやあ思えない。やがて、カンテラを抛ほうり出すと、釦ボタンを外はずして、筒袖つつぽうを脱いだ。股引も脱いだ。壁に掛けてある広袖ひろそでを、めりやすの上から着て、尻の先に三尺帯をぐるりと回しながら、やつぱり無言のまま、二人してずしりずしりと降りて行つた。するとまた上がつて来た。今度こんだのも濡れている。泥だらけである。カンテラを抛り出す。着物を着換える。ずしんずしんと降りて行く。とまた上がつて来る。こう云う風に入代り、入代りして、何でもよほど来た。いずれも底の方から眼球めだまを光らして、一遍だけはきつと自分を見た。

中には、

「手前は新前てめえ しんめえだな」

と云つたものもある。自分はただ、

「ええ」

と答えて置いた。幸い今度はさつきのようにむやみには冷やかされずに、まあ無難ぶなんに済んだ。上がつて来るものも、来るものも、みんな急いで降りて行くんで、調戯からかう暇がなかったんだろう。その代り一人に一度ずつは必ず睨にらまれた。そうこうしている内に、上がつて来るものがようやく絶えたから、自分はようやく寛容くつろいだ思いをして、囲炉裏いろりの炭の赤くなつたのを見詰めて、いろいろ考え出した。もちろん纏まとまりようのない、かつ考えれば考えるほど馬鹿になる考えだが、火を見詰えていると、炭の中にそう云う妄想もうぞうがちらちらちら燃えてくるんだから仕

方がない。とうとう自分の魂が赤い炭の中へ拔出して、火氣かつぎに煽あおられながら、むやみに踊をおどつてゐるような変な心持になつた時に、突然、

「草臥くたびれたろうから、もう御休みなさい」と云われた。

見ると、さっきの婆さんが、立っている。やつぱり襷掛たすきがけのままである。いつの間まに上がつて来たものか、ちつとも気がつか
なかつた。自分の魂が遠慮なく火の中を馳かけ廻つて、艶子つやこさん
になつたり、澄江すみえさんになつたり、親爺おやじになつたり、金さん
になつたり、——被布ひふやら、廂髪ひさしがみやら、赤毛布あかげつとやら、唸うなり声こえやら、
あげまんじゅう揚饅頭あげまんじゅうやら、華嚴けごんの滝やら——幾多無数の幻影まぼろしが、囲炉裏ひなたの中
に躍り狂つて、立ち騰のぼる火の氣の裏うちに追いつ追われつ、日向ひなたに浮
かぶ塵ちりと思われるまで夥おびただしく出て来た最中に、はつと気がつい

たんだから、眼の前にいる婆さんが、不思議なくらい変であつた。しかし寝ろと云う注意だけは明かに耳に聞えたに違ないから、自分はただ、

「ええ」

と答えた。すると婆さんは後ろの戸棚を指して、

「布団ふとんは、あすこに這入はいつてゐるから、独ひとりで出して御掛けなさい。

一枚三錢ずつだ。寒いから二枚はいるでしょう」

と聞くから、また

「ええ」

と答えたなら、婆さんは、それ限何ぎりにも云わずに、降りて行つた。

これで、自分は寝てもいいと云う許可を得たから、正式に横になつても剣突けんつくを食う恐れはあるまいと思つて、婆さんの指図さしず通り

戸棚を明けて見ると、あつた。布団がたくさんあつた。しかし

ずれも薄汚いものばかりである。自宅うちで敷いていたのとはまるで比較にならない。自分は一番上に乗ってるのを二枚、そつとおろした。そうして、電気灯の光で見た。地は浅黄あさぎである。模様は白である。その上に垢あかが一面に塗りつけてあるから、六分方色変りがして、白い所などは、通例なら我慢のできにくいほどどろんと、化けている。その上すこぶる堅い。搗つき立ての伸のし餅もちを、金巾かなぎんに包んだように、綿は綿でかたまつて、表布かわとはまるで縁故がないほどの、こちこちしたものである。

自分はこの布団を畳の上へ平ひらたく敷いた。それから残る一枚を平く掛けた。そうして、襯衣シャツだけになつて、その間に潜もぐり込んだ。湿しめっぱい中を割り込んで、両足をうんと伸ばしたら踵かかとが畳の上へ出たから、また心持引つ込めました。延ばす時も曲げる時も、不断のように軽くしなやかには行かない。みしりと音がす

るほど、関節が窮屈に硬張つて、動きたがらない。じつとして、布団の中に膝頭を横たえてみると、倦怠のを通り越して重い。腿から下を切り取つて、その代りに筋金入りの義足をつけられたように重い。まるで感覚のある二本の棒である。自分は冷たくつて重たい足を苦に病んで、頭を布団の中に突っ込んだ。せめて頭だけでも暖にしたら、足の方でも折れ合つてくれるだろうとの、はかない望みから出た窮策であつた。

しかしさすがに疲れている。寒さよりも、足よりも、布団の臭いよりも、煩悶よりも、厭世よりも——疲れている。実に死ぬ方が楽なほど疲れ切っていた。それで、横になるとすぐ——畳から足を引つ込まして、頭を布団に入れるだけの所作を仕遂げたと思うが早いか、眠てしまった。ぐうぐう正体なく眠てしまった。これから先きは自分の事ながらとうてい書けない。……

すると、突然針で背中を刺された。夢に刺されたのか、起きていて、刺されたのか、感じはすこぶる曖昧であつた。だからそれだけの事ならば、針だろうが刺だろうが、頓着はなかつたろう。正気の針を夢の中に引摺り込んで、夢の中の刺を前後不覚の床の下に埋めてしまう分の事である。ところがそうは行かなかつた。と云うものは、刺されたなと思ひながらも、針の事を忘れるほどにうつとりとなると、また一つ、ちくりとやられた。

今度は大きな眼を開いた。ところへまたちくりと来た。おやと驚く途端にまたちくりと刺した。これは大変だとうやう気がつきがけに、飛び上るほど劇しく股の辺をやられた。自分はこの時始めて、普通の人間に帰つた。そうして身体中至る所がちくちくしているのを発見した。そこでそつと襯衣の間から手

を入れて、背中を撫なでて見ると、一面にざらざらする。最初指先が肌に触れた時は、てつきり劇烈な皮膚病に罹かつたんだと思つた。ところが指を肌に着けたまま、二三寸引いて見ると、何だか、ばらばらと落ちた。これはただ事でないとたちまち跳はね起きて、襯衣一枚の見苦しい姿ながら囲いろり炉裏の傍そばへ行つて、親指と人差指の間に押えた、米粒ほどのものを、検査して見ると、異様の虫であつた。実はこの時分には、まだ南京虫を見たと事がないんだから、はたしてこれがそうだと断言出来なかつたが——何だか直覺的に南京虫らしいと思つた。こう云う下卑げた所に直覺の二字を濫用らんようしては濟まんが、ほかに言葉がないから、やむを得ず高尚な術語を使った。さてその虫を検査しているうちに、非常に悪にくらしくなつて来た。囲炉裏ふろの縁ふちへ乗せて、ぴちりと親指の爪でお押し潰つぶしたら、云うに云われぬ青臭い虫であつた。

この青臭い臭氣においを嗅かぐと、何となく好い心持になる。——自分
はこんな醜い事を真面目まじめにかかねばならぬほど狂きちがい違染いじみていた。
実を云うと、この青臭い臭氣を嗅ぐまでは、恨うらみを霽はらしたよう
な氣がしなかつたのである。それだから捕とつては潰し、捕つて
は潰し、潰すたんびに親指の爪を鼻へあてがつて嗅いでいた。
すると鼻の奥へ詰なすけつて来た。今にも涙が出そうになる。非常に
情ない。それなのに、爪を嗅ぐと愉快である。この時二階下で
大勢が一度にどつと笑う聲がした。自分は急に虫を潰すのをや
めた。広間を見渡すと誰もいない。金さんだけが、平たくなつ
て静かに寝ている。頭も足も見えない。そのほかにたつた一人
いた。もつとも始めて氣がついた時は人間とは思わなかつた。
向うの柱の中途から、窓の敷居へかけて、帆木綿ほもめんのようなもの
を白く渡して、その幅のなかに包まっていたから、何だか氣味

が悪かった。しかしよく見ると、白い中から黒いものが斜^{はす}に出ている。そうしてそれが人間の毬栗頭^{いがぐりあたま}であつた。——広い部屋には、自分とこの二人を除^{のぞ}いて、誰もいない。ただ電気灯がかんかん点^ついている。大変静かだ、と思うとまた下座敷でわつと笑つた。さつきの連中か、または作業を済まして帰つて来たものが、大勢寄つてふざけ散らしているに違ない。自分はぼんやりして布団のある所まで帰つて来た。そうして裸^{はだか}体になつて、襯衣を振るつて、枕元にある着物を着て、帯を締めて、一番しまいに敷いてある布団を叮嚀^{ていねい}に畳んで戸棚へ入れた。それから後はどうして好いか分らない。時間は何時^{なんじ}だか、夜^よはどうていまだ明けそうにしない。腕組をして立つて考えていると、足の甲がまたむずむずする。自分は堪^{こら}え切れずに、

「えつ畜生」

と云いながら二三度小踊をした。それから、右の足の甲で、左の上を擦こすつて、左の足の甲で右の上を擦こすつて、これでもかと齒はぎ軋しりをした。しかし表へ飛び出す訳にも行かず、寝る勇氣はなし、と云つて、下へ降りて、車座の中へ割り込んで見る元氣は固もとよりない。さつき毒突どくづかれた事を思い出すと、南京虫よりよっぽど厭いやだ。夜が明ければいい、夜が明ければいいと思ひながら、自分分は表へ向いた窓の方へ歩いて行つた。するとそこに柱があつた。自分は立ちながら、この柱に倚よつ掛つた。背中をつけて腰を浮かして、足の裏で身体を持たしていると、両足がずるずる畳の目を滑すべつてだんだん遠くへ行つちまう。それからまた真直まっすぐに立つ。またずるずる滑すべる。また立つ。まずこんな事をしていた。幸い南京虫ナンキンむしは出て来なかつた。下では時々どつと笑う。いても立つてもと云うのは喻たとえだが、そのいても立つてもを、実

際に経験したのはこの時である。だから坐るとも立つとも方かたのつかない運動をして、中途半端まぎに紛らかしていた。ところがその運動をいつまで根氣こんきにやったものか覚えていない。いとど疲れている上に、なお手足を疲らして、いかな南京虫でも応こたえな
いほど疲れ切ったんで、始めて寝たもんだらう。夜が明けたら、
自分が摺ずり落ちた柱の下に、足だけ延ばして、背を丸く蹲うずくま居つ
ていた。

これほど苦しめられた南京虫も、二日三日と過たつにつれて、
だんだん痛くなくなつたのは妙である。その実、一箇月ばかり
したら、いくら南京虫がいようと、まるで米粒でも、ぞろぞろ
転がつてくるくらいに思つて、夜はいつでも、ぐっすり安眠した。
もつとも南京虫の方でも日数ひかずを積むに従つて遠慮してくるそう
である。その証拠には新来きたてのお客には、べた一面にたかつて、

夜通し苛めるが、少し辛抱していると、向うから、愛想をつかして、あまり寄りつかなくなるもんだと云う。毎日食つて人間の間肉は自然鼻につくからだとも教えたものがあるし、いや肉の方にそれだけの品格が出来て、シキ臭くなるから、虫も恐れ入るんだとも説明したものがある。そうして見るとこの南京虫と坑夫とは、性質がよく似ている。おそらく坑夫ばかりじゃあるまい、一般の人類の傾向と、この南京虫とはやはり同様の心理に支配されてるんだろう。だからこの解釈は人間と虫けらを概括するところに面白味があつて、哲学者の喜びそうな、美しいものであるが、自分の考えを云うと全くそうじゃないらしい。虫の方で気兼ねをしたり、贅沢を云つたりするんじゃないかと、食われる人間の方で習慣の結果、無神経になるんだろうと思う。虫は依然として食つてゐるが、食われても平気でゐるに違ない、

もつとも食われて感じないのも、食われなくつて感じないのも、
趣おもむきこそ違え、結果は同じ事であるから、これは實際上議論をし

ても、あまり役に立たない話である。

そんな無用の弁は、どうでもいいとして、自分が眼を開けて
見たら、夜は全く明け放れていた。下ではもうがやがや云つて
いる。嬉しかった。窓から首を出して見ると、また雨だ。もつ
とも判然はつきりとは降っていない。雲の濃いのが糸になり損そくなつて、
なつただけが、細く地へ落ちる気色けしきだ。だからむやみに濛々もうもうと
はしていない。しだいしだいに雨の方に片づいて、片づくに従つ
て糸の間が透すいて見える。と云つても見えるものは山ばかりで
ある。しかも草も木も至とほつて乏しい、潤うるおいのない山である。これ
が夏の日に照りつけられたら、山の奥でもさぞ暑かろうと思わ
れるほど赤く禿はげてぐるりと自分を取り捲まいている。そうして

残らず雨に濡ぬれている。潤い気けのないものが、濡ぬれているんだから、土器かわらけに霧を吹いたように、いくら濡ぬれても濡れ足りない。その癖寒い気持がする。それで自分は首を引つ込めようとしたら、ちよつと眼についた。——手拭てぬぐいを被かぶつて、藁わらを腰に当てて、つつぽう筒服を着た男が二三人、向うの石垣の下にあらわれた。ちよつと昨日きのうジャンボの通つた路を逆に歩いて来る。遠くから見ると、いかにもしよぼしよぼして気の毒なほど憐れである。自分も今朝からあなるんだなと、ふと気がついて見ると、人事ひとごととは思おもわれないほど、向むへ行く手拭てぬぐいの影——雨に濡ぬれた手拭の影ななけが情なさけなかつた。すると雨の間からまた古帽子が出て来た。その後あとからまた筒袖姿つつそですがたがあらわれた。何でも朝の番に当つた坑夫がシ、キはいへ這入る時間に相違ない。自分はようやく窓から首を引き込めた。すると、下から五六人一度にどやどやと階下段はしごだんを上あがつて

来る。来たなと思つたが仕方がないから懷手ふところをして、柱にもたれていた。五六人は見る間に、同じ出立いでたちに着更えて下りて行つた。後あとからまた上がってくる。また筒袖になつて下りて行く。とうとう飯場はんばにいる当番はことごとく出払つたようだ

こう飯場中活動して来ると、自分も安閑としちゃいられない。と云つて誰も顔を御洗いなさいとも、御飯を御上がんなさいとも云いに来てくれない。いかな坊っちゃんも、あまり手持無沙汰てもちぶさた過ぎて困つちまつたから、思い切つて、のこのこ下りて行つた。心は無論落ついちゃいないが、態度だけはまるで宿屋へ泊つて、茶代を置いた御客のようであつた。いくら恐縮しても自分には、これより以外の態度が出来ないんだから全くの生息子きむすこである。下りて見ると例の婆さんが、襷たすきがけをして、草鞋わらじを一足ぶら下げて奥から駆けて来たところへ、ばったり出逢であつた。

「顔はどこで洗うんですか」

と聞くと、婆さんは、ちよつと自分を見たなりで、

「あつち」

と云い捨てて門口かどぐちの方へ行つた。まるで相手にしちやいない。

自分にはあつちの見当けんとうがわからなかつたが、とにかく婆さんの出

て来た方角だろうと思つて、奥の方へ歩いて行つたら、大きな台

所へ出た。真中に四斗樽しとだるを輪切にしたようなお櫃はちが据すえてある。

あの中に南京米ナンキンまいの炊たいたのがいつぱい詰つてるのかと思つたら、

——何しろ自分が三度三度一箇月食つても食い切れないほどの

南京米なんだから、食わない前からうんざりしちまつた。——

顔を洗う所も見つけた。台所を下りて長い流の前へ立つて、冷た

い水で、申し訳のために頬辺ほつぺたを撫なでて置いた。こうなると叮嚀ていねい

に顔なんか洗うのは馬鹿馬鹿しくなる。これが一歩進むと、顔

は洗わなくつても宜いものと度胸が坐つてくるんだろう。昨日きのうの赤毛布あかげつとや小僧は全くこう云う順序を踏んで進化したものに違ちがない。

顔はようやく自力で洗つた。飯はどうなる事かと、またのそのそ台所へ上あがつた。ところへ幸さいわい婆さんが表から帰つて来て膳立ぜんだてをしてくれた。ありがたい事に味噌汁みそじるがついていたんで、こいつを南京米の上から、ざつと掛けて、ざくざくと掻かき込んだんで、今度は壁土の味を噛かみ分わけないで済んだ。すると婆さんが、「御飯おまんまが済んだら、初はつさんがシキへ連れて行くつて待つてるか、早くおいでなさい」と、箸はしも置はかない先から急せぎ立てる。実はもう一杯くらい食わないと身体からだが持つまいと思つてたところだが、こう催促されて見ると、無論御代りなんか盛よそう必要はない。自分は、

「はあ、そうですか」

と立ち上がった。表へ出て見ると、なるほど上り口あがぐちに一人掛け
ている。自分の顔を見て、

「御前おめえか、シ、キ、へ行くなあ」

と、石でもぶつ欠くような勢いで聞いた。

「ええ」

と素直に答えたなら、

「じゃ、いつしよに来ねえ」

と云う。

「この服装なでも好いんですか」

と叮嚀ていねいに聞き返すと、

「いけねえ、いけねえ。そんな服装で這入へえれるもんか。ここへ
親分いぢめえとこれから一枚借りて来てやったから、此服こいつを着るがいい」

と云いながら、例の筒袖つつそでを抛ほうり出した。

「そいつが上だ。こいつが股引ももひきだ。そら」

とまた股引を抛なげつけた。取りあげて見ると、じめじめする。所々に泥が着いている。地じは小倉こくららしい。自分もとうとうこの御仕着おしきせを着る始末になつたんだなと思ひながら、絆かすりを脱いで上下うえしたとも紺揃こんぞろいになつた。ちよつと見ると内閣の小使のようだが、心持から云うと、小使を拝命した時よりも遙はるかに不景氣であつた。これで支度したくは出来たものと思込んで土間へ下りると、

「おつと待つた」

と、初さんがまた勇み肌の声を掛けた。

「これを尻けつの所へ当ててるんだ」

初さんが出してくれたものを見ると、三斗俵坊さんだらばつちのような藁布団わらぶとんに紐ひもをつけた変挺へんていなものだ。自分は初さんの云う通り、

これを臀部^{でんぶ}へ縛^{しば}りつけた。

「それが、ア、テ、シ、コ、だ。好^よしか。それから鑿^{のみ}だ。こいつを腰^{こし}に
所へ差してと……」

初さんの出した鑿を受け取って見ると、長さ一尺四五寸もあ
ろうと云う鉄の棒で、先が少し尖^{とが}っている。これを腰へ差す。

「ついでにこれも差すんだ。少し重いぜ。大丈夫か。しつかり
受け取らねえと怪我をする」

なるほど重い。こんな槌^{つち}を差してよく坑^{あな}の中が歩けるもんだ
と思う。

「どうだ重いか」

「ええ」

「それでも軽いうちだ。重いになると五斤ある。——いいか、
差せたか、そこでちよつと腰を振って見な。大丈夫か。大丈夫

ならこれを提^さげるんだ」

とカンテラを出しかけたが、

「待^{まち}つたり。カンテラの前に一つ草鞋^{わらじ}を穿^はいちまいねえ」

草鞋^{わらじ}の新しいのが、上り口にある。さつき婆^{おば}さんが振^ふら下げ

てたのは、大方これだろう。自分は素足^{すあし}の上へ草鞋^はを穿^はいた。

緒^おを踵^{かかと}へ通してぐつと引くと、

「驚^{どじ}癡^ぢだなあ。そんなに締める奴があるかい。もつと指^{いび}の股^{また}を

寛^{ゆる}めろい」

と叱^しられた。叱^しられながら、どうにか、こうにか穿^はいてしまふ。

「さあ、これでいよいよおしまいだ」

と初^{はつ}さんは饅頭^{まんじゅう}笠^{がさ}とカンテラを渡した。饅頭^{まんじゅう}笠^{がさ}と云うのか筍^{たけのこ}笠^{がさ}

というのか知らないが、何でも懲役^{けいやく}人の被^{かぶ}るような笠^{がさ}であつた。

その笠^{しんぴよう}を神妙^{しんぴよう}に被^かる。それからカンテラを提^さげる。このカンテ

うは提げるようにできている。恰好かつこうは二合入りの石油缶せきゆかんとも云うべきもので、そこへ油を注さす口と、心しんを出す孔あなが開あいてる上に、細長い管くだが食くつついて、その管の先がちよつと横へ曲がると、すぐ膨ふくらんだカ、ツ、プになる。このカ、ツ、プへ親指を突つつ込んで、その親指の力で提げるんだから、指五本の代りに一本で事を済すますはなはだ実用的のものである。

「こう、穿はめるんだ」

と初さんが、勝栗かちぐりのような親指を、カン、テ、ウの孔の中へ突つ込こんだ。旨うまい具合にはまる。

「そうら」

初さんは指一本で、カン、テ、ウを柱時計の振子のように、二三度振ふつて見せた。なかなか落ちない。そこで自分も、同じように、調子をとつて揺うごかして見たがやつぱり落ちなかつた。

「そうだ。なかなか器用だ。じゃ行くぜ、いいか」

「ええ、好よござんす」

自分は初さんに連れられて表へ出た。所が降っている。一番先へ笠かさへあたたつた。仰向あおもむいて、空模様を見ようとしたら、顎あごと、口と、鼻へぽつぽつとあたつた。それからあとは、肩へもあたる。足へもあたる。少し歩くうちには、身体中じめじめして、肌へ抜けた湿気が、皮膚の活気で蒸むし返される。しかし雨の方が寒いんで、身体のとぼりがだんだん冷さめて行くような心持であつたが、坂へかかると初さんがむやみに急ぎ出したんで、濡ぬれながらも、毛穴から、雨を弾はじき出す勢いで、とうとうシキの入口まで来た。

坑夫
入口はまず汽車の隧道トンネルの大きいものと云つて宜よろしい。蒲鉾形かまぼこなりの天辺てっぺんは二間くらいの高さはあるだろう。中から軌道が出て来

るところも汽車の隧道トンネルに似ている。これは電車が通う路なんだ
そうだ。自分は入口の前に立って、奥の方を透すかして見た。奥
は暗かった。

「どうだここが地獄の入口だ。這はい入れるか」

と初さんが聞いた。何だか嘲弄ちようろうの語氣を帯びている。さつき飯場はんば
を出て、ここまで来る途中でも、方々の長屋の窓から首を出し
て、

「昨日きのうのだ」

「新来しんきだ」

と口々に罵ののつていたが、その様子を見ると単に山の中に閉じ込
められて物珍らしさの好奇心とは思えなかった。その言葉の奥
底にはきつと愚弄ぐろうの意味がある。これを布衍ふえんして云うと、一つ
には貴様もとうとうこんな所へ転げ込んで来た、いい気味だ、ざ

まあ見ろと云う事になる。もう一つは御氣の毒だが来たつて駄目だよ。そんな脂やにつこい身体からだで何が勤まるものかと云う事にもなる。だから「昨日きのうのだ」「新来しんきだ」と騒ぐうちには、自分と彼らと同様の苦痛を嘗なめなければならぬほど墮落したのを快く感ずると共に、とうていこの苦痛には堪たえがたい奴だとの輕蔑けいべつさえ加わっている。彼らは他人ひとを彼らと同程度に引き摺ずり落して喝采かつさいするのみか、ひとたび引き摺り落したものを、もう一返いっぺん足の下まで蹴落けおとして、墮落は同程度だが、墮落に堪たえる力は彼らの方がかえつて上だとの自信をほのめかして満足するらしい。自分は途上みちみち「昨日のだ」と聞きたんびに、懲役笠で顔を半分隠しながら通り抜けて、シキの入口まで来た。そこで初さんがまた愚弄ぐろうしたんだから、自分は少しむつとして、「這入はいれますとも。電車さえ通かよつてるじゃありませんか」

と答えた。すると初さんが、

「なに這入れる？　豪義ごうぎな事を云うない」

と云った。ここで「這入れません」と恐れ入ったら、「それ見ろ」と直すぐこなされるにきまつてる。どっちへ転んでも駄目なんだから別に後悔もしなかった。初さんは、いきなり、シキの中へ飛び込んだ。自分も続いて這入った。這入って見ると、思ったよりも急に暗くなる。何だか足元がおつかなくなり出したには降参した。雨が降っていても外は明かるいものだ。その上軌道レールの上はとにかく、両側はすこぶる泥ぬかつてゐる。それなのに初さんは中ちゆうつ腹ばらでずんずん行く。自分も負けない気でずんずん行く。「シキの中でおとなしくしねえと、すすの、この中へ抛ほうり込まれるから、用心しなくっちゃあいけねえ」

と云いながら初さんは突然暗い中で立ち留どまった。初さんの腰に

は鑿^のがある。五斤の槌^{つち}がある。自分は暗い中で小さくなつて、

「はい」

と返事をした。

「よし、分つたか。生きて出る料簡^{りようけん}なら生意気にシ、キ、なんかへ這入らねえ方が増しだ」

これは向うむきになつて、初さんが歩き出した時に、半分は独^{ひと}り言^{ごと}のように話した言葉である。自分は少からず驚いた。坑^{あな}の中は反響が強いので、初さんの言葉がわんわんわんと自分の耳へ跳^はねつ返つて来る。はたして初さんの言う通りなら、飛んだ所へ這入つたもんだ。実は死ぬのも同然な職業であればこそ坑夫になろうと云う氣も起して見たんだが、本当に死ぬなら——こんな怖^{こわ}い商売なら——殺されるんなら——す、この中へ抛^なげ込まれるなら——す、のことは全体どんなもんだらうと思ひ出し

た。

「すのことはどんなもんですか」

「なに？」

と初さんが後うしろを振り向いた。

「すのことはどんなもんですか」

「穴だ」

「え？」

「穴だよ。――あらがね ほう鉋を抛り込んで、まと纏めて下へ降さげる穴だ。鉋といっしょに抛り込まれて見ねえ……」

で言葉を切つてまたずんずん行く。

自分はちよつと立ち留つた。振り返ると、入口が小さい月のように見える。這はい入るときは、これがシキなラと思つた。聞いたほどもないと思つた。ところが初さんに威嚇おどかされてから、

いかな平凡な隧道トンネルも、大いに容子ようすが變つて來た。懲役笠ちようえきがさをたたく冷たい雨が恋しくなつた。そこで振り返ると、入口が小さい月のように見える。小さい月のように見えるほど奥へ這入つたなど、振り返つて始めて気がついた。いくら曇つていてもやっぱり外が懐なつかしい。真黒な天井てんじようが上から抑おさえつけてるのは心持のわるいものだ。しかもこの天井がだんだん低くなつて來るように感ぜられる。と思うと、軌道レールを横へ切れて、右へ曲つた。だらだら坂の下りになる。もう入口は見えない。振返つても真暗だ。小さい月のような浮世の窓は遠慮なくぴしやりと閉つて、初さんと自分はだんだん下の方へ降りて行く。降りながら手を延ばして壁へ触さわつて見ると、雨が降つたように濡ぬれている。

「どうだ、尾ついて來るか」

と、初さんが聞いた。

「ええ」

とおとなしく答えたら、

「もう少しで地獄の三丁目へ来る」

と云つたなり、また二人とも無言になった。この時行く手の方かたに一点の灯あかりが見えた。暗闇くらやみの中の黒猫の片眼のように光つてる。カンテラの灯ひなら散らつくはずだが、ちつとも動かない。距離もよく分らない。方角も真直まっすぐじゃないが、とにかく見える。もし坑あなの中が一本道だとすれば、この灯を目懸めがけて、初さんも自分も進んで行くに違ない。自分は何にも聞かなかつたが、大方これが地獄の三丁目なんだろうと思つて、這入つて行つた。すると、だらだら坂がようやくやく尽きた。路は平らに向うへ廻り込む。その突き当りに例の灯ひが点ついている。さつきは鼻の下に見えたが、今では眼と擦すれ々の所まで来た。距離も間近くなつた。

「いよいよ三丁目へ着いた」

と、初さんが云う。着いて見ると、坑あなが四五畳ほどの大おおきさに広がって、そこに交番くらいな小屋がある。そうしてその中に電氣灯が点いている。洋服を着た役人が二人ほど、椅子の対むかい合あひに洋卓テーブルを隔はり腰を掛けていた。表おもてには第一見張所とあつた。これは坑夫の出入でいりだの労働の時間だのを検査する所だと後から聞いて、始めて分つたんだが、その当時には何のための設備だか知らなかつたもんだから、六七人の坑夫が、どす黒い顔そろを揃そろえて無言のまま、見張所の前に立つていたのを不審に思つた。これは時間を待ち合あひして交替するためである。自分は腰に鑿のみと槌つちを差してカンテラさえ提さげてはいるが、坑夫志願というんで、シキの様子を見に這入つただけだから、まだ見習にさえ採用されていないと云う訳で、待ち合あわす必要もないものと見え

て、すぐこの溜たまりを通り越した。その時初さんが見張所の硝子窓ガラスまどへ首を突つ込んで、ちよいと役人に断ことわつたが、役人は別に自分の方を見向もしなかつた。その代り立つていた坑夫はみんな見た。しかし役人の前を憚はばかつてだろう、全く一言ひとことも口を利きいたものはない。

溜を出るや否や坑あなの様子が突然変つた。今までは立つてあるいても、背延せいのびをしても届きそうにもしなかつた天井が急に落ちて来て、真直まっすぐに歩くと時々頭へ触さわるような氣持がする。これかものの二寸も低かろうものなら、岩へぶつかつて眉間みけんから血が出るに違ちがはないと思うと、松原をあるくように、ありつたけの背で、野風のふうぞう雜ざにややつて行けない。おつかないから、なるべく首を肩の中へ縮め込んで、初さんに食つついて行つた。もつともカンテラはさつき点つけた。

すると三尺ばかり前にいる初さんが急に四ん這よついになった。おや、滑すべつて転んだ。と思つて、後うしろから突つ掛かりそうなところを、ぐつと足を踏ん張つた。このくらいにして喰い留めないと、坂だから、前へのめる恐おそれがある。心持腰から上を反そらすようにして、初さんの起きるのを待ち合あわしていると、初さんはなかなか起きない。やつぱり這はつてゐる。

「どうか、しましたか」

と後から聞いた。初さんは返事もしない。——はてな——怪我でもしやしないかしら——もう一遍聞いて見ようか——すると初さんはのこのこ歩き出した。

「何ともなかったですか」

「這うんだ」

「え？」

「這うのだてえ事よ」

と初さんの声はだんだん遠くなつてしまふ。その声で自分は不審を打った。いくら向うむきでも、普通なら明かに聞きとられべき距離から出るのに、急に潜もぐつてしまふ。声が細いんじゃない。当り前の初さんの声が袋のなかに閉じ込められたように曖あいまいになる。こりやただ事じゃないと気がついたから、透すかして見るとようやく分つた。今までは尋常に歩けた坑が、ここでたちまち狭せまくなつて、這わなくつちや抜けられなくなっている。その狭い入口から、初さんの足が二本出ている。初さんは今胴を入れたばかりである。やがて出ていた足が一本這入った。見ているうちにまた一本這入あきらつた。これで自分も四つん這いにならなくつちや仕方がないと諦めをつけた。「這うんだ」と初さんの教えたのもけつして無理じゃないんだから、教えられた通り這つた。

ところが右にはカン、テ、ラを提^さげている。左の手の平^{ひら}だけを惜^{おし}気^げもなく氷のような泥だか岩だかへな土だか分らない上へぐしやりと突いた時は、寒さが二の腕を伝わって肩口から心臓へ飛び込んだような気持ちがした。それでカン、テ、ラを下へ着けまいとすると、右の手が顔とすれすれになつて、はなはだ不便である。どうしたもんだらうと、この姿勢のままじつとしていた。そうして、右の手で宙に釣っているカン、テ、ラを見た。ところへぼたりと天井^{てんじょう}からしずくが垂れた。カン、テ、ラの灯^ひがじいと鳴った。油煙^{あぶ}が顎^{あご}から頬へかかる。眼へも這^{はい}入った。それでもこの灯を見詰めていた。すると遠くの方でかあん、かあん、と云う音がする。坑夫が作業をしているに違ないが、どのくらい距離があるんだか、どの見当^{けんとう}にあたるんだか、いつこう分らない。東西南北のある浮世の音じゃない。自分はこの姿勢でともかくも二三

歩歩き出した。不便は無論不便だが、歩けない事はない。ただ時々しずくが落ちてカンテラ、のじいと鳴るのが気にかかる。初さんは先へ行つてしまった。頼たよりはカンテラ、一つである。そのカンテラ、がじいと鳴つて水のために消えそうになる。かと思うとまた明かるくなる。まあよかつたと安心する時分に、またぽたりと落ちて来る。じいと鳴る。消えそうになる。非常に心細い。実は今までも、しずくは始終しじゅう垂れていたんだが、灯ひが腰から下にあるんで、いっそう気がつかないたんだろう。灯が耳の近くへ来て、じいと云う音が聞えるようになってから急に神経が起つて来た。だから這う方はなお遅くなる。しかもまだ三足しか歩いちやいない。ところへ突然初さんの声がした。

「やい、好い加減に出て来ねえか。何をぐずぐずしているんだ。

——早くしないと日が暮れちまうよ」

暗いなかで初さんはたしかに日が暮れちまうと云った。

自分は這はいながら、咽喉のどぼとけ仏の角かどを尖とがらすほどに顎あごを突き出して、初さんの方を見た。すると一間いっけんばかり向うに熊の穴見たようなものがあつて、その穴から、初さんの顔が——顔らしいものが出てゐる。自分があまり手間取るんで、初さんが屈こんでこつちを覗のぞき込こんでるところであつた。この一間をどうして抜け出したか、今じゃ善く覚えていない。何しろできるだけ早く穴まで来て、首だけ出すと、もう初さんは顔を引っ込こまして穴の外に立たっている。その足が二本自分の鼻の先に見えた。自分はやれ嬉うれしやと狭い所を潜くぐり抜けた。

「何をしていたんだ」

「あんまり狭いもんだから」

「狭いんで驚いちゃ、シシキキへは一足ひとあしだつて踏ふん込こめつこはねえ。

陸おかのように地面はねえ所ところだくらいは、どんな頓珍漢とんちんかんだって知つてゐるはずだ」

初さんはたしかに坑あなの中は陸のように地面のない所だと云つた。この人は時々思い掛けない事を云うから、今度もたしかにとただし書がきをつけて、その確実な事を保証して置くのである。自分は何か云い訳をするたんびに、初さんから容赦なくやつつけられるんで、大抵は黙つていたが、この時はつい、

「でもカンテラが消えそうで、心配したもんですから」

と云つちまつた。すると初さんは、自分の鼻の先へカンテラを差しつけて、徐おもむろに自分の顔を検査し始めた。そうして、命令を下した。

「消して見ねえ」

「どうしてですか」

「どうしても好いから、消して見ねえ」

「吹くんですか」

初さんはこの時大きな声を出して笑った。

自分は喫驚びっくりして稀有けうな顔をしていた。

「冗談じようだんじゃねえ。何が這入へてると思う。種油たねあぶらだよ、しずくぐら

いで消けえてたまるもんか」

自分はこれでやつと安心した。

「安心したか。ハハハハ」

と初さんがまた笑った。初さんが笑うたんびに、坑あなの中がみんな響き出す。その響が収まると前よりも倍静かになる。ところへかあん、かあんとどこかで鑿のみと槌つちを使つてゐる音が伝わつて来る。

「聞えるか」

と、初さんが顚あごで相図をした。

「聞えます」

と耳を峙そばだてていると、たちまち催促を受けた。

「さあ行こう。今度こんだあ後おくれないように跟ついて来な」

初さんはなかなか機嫌がいい。これは自分が一も二もなく初さんにやられているせいだろうと思つた。いくら手苛てひどくきめつけられても、初さんの機嫌がいうちは結構であつた。こうなると得になる事がすなわち結構という意味になる。自分はこれほど墮落して、おめおめ初さんの尻を嗅かいで行ったら、路が左の方に曲り込んでまた峻けわしい坂になつた。

「おい下りるよ」

と初さんが、後うしろも向かず声を掛けた。その時自分は何となく東京の車夫を思い出して苦しいうちにもおかしかつた。が初さん

はそれとも気がつかず下り出した。自分も負けずに降りる。路は地面を刻んで段々になつてゐる。四五間ずつに折れてはいるが、勘定したら愛宕様あたごさまの高さぐらいはあるだろう。これは一生懸命になつて、いつしよに降りた。降りた時にほつと息を吐くと、その息が何となく苦しかった。しかしこれは深い坑あなのなかで、空氣の流通が悪いからとばかり考えた。実はこの時すでに身体からだも冒おかされていたのである。この苦しい息で二三十間来るとまた模様が變つた。

今度は初さんが仰向けあおむに手を突いて、腰から先を入れる。腰から入れるような芸をしなければ通れないほど、坑あなの幅も高さも逼せまつて来たのである。

「こうして抜けるんだ。好く見て置きねえ」
と初さんが云つたと思つたら、胴も頭もずる、ずると抜けて見え

なくなつた。さすが熟練の功はえらいもんだと思ひながら、自分もまず足だけ前へ出して、草鞋わらじで探さぐりを入れた。ところが全く宙に浮いてるやうで足掛りがちつともない。何でも穴の向うは、がつくり落おちか、それでなくても、よほど勾配こうばいの急な坂に違ひないと見当けんとうをつけた。だから頭から先へ突つ込めばのめつて怪我をするばかり、また足をむやみに出せば引つ繰り返るだけと覺つたから、足を棒のやうに前へ寝かして、そうして後うしろへ手を突いた。ところがこの所作しよさがはなはだ不味まずかつたので、手を突くと同時に、尻もべつたり突いてしまった。ぴちやりと云つた。ア、テシコを伝わでんぶつて臀部へ少々感じがあつた。それほど強く尻餅しりもちを搗ついたと見える。自分はしまつたと思ひながらも直すぐ両足を前の方へ出した。ずるりと一尺ばかり振ぶら下げたが、まだどこへも届かない。仕方がないから、今度は手の方を前へ運ばせて、

腰を押し出すように足を伸ばした。すると腿ももの所まで摺ずり落ちて、草鞋わらじの裏がようやく堅いものに乗った。自分は念のためこの堅いものをぴちやぴちや足の裏で敲たたいて見た。大丈夫なら手を離してこの堅いものの上へ立とうと云う料簡りようけんであつた。

「何で足ばかり、ばたばたやつてるんだ。大丈夫だから、うんと踏ん張つて立ちねえな。意久地いくじのねえ」

と、下から初さんの声がする。自分の胴から上は叱られると同時に、穴を抜けて真直に立つた。

「まるで傘からかさの化物ばけもののようだよ」

と初さんが、自分の顔を見て云った。自分は傘の化物とは何の意味だか分らなかつたから、別に笑う気にもならなかつた。ただ

「そうですか」

と真面目に答えた。妙な事にこの返事が面白かったと見えて、初さんは、また大きな声を出して笑った。そうして、この時から態度が變つて、前よりは幾分か親切になつた。偶然の事がどんな拍子で他の氣に入らないとも限らない。かえつて、氣に入つてやろうと思つて仕出かす芸術は大抵駄目なようだ。天巧を奪うような御世辞使はいまだかつて見た事がない。自分も我が身が可愛さに、その後いろいろ人の御機嫌を取つて見たが、どうも旨い結果が出て来ない。相手がいくら馬鹿でも、いつか露見するから怖いもんだ。用意をして置いた挨拶で、この傘の化物に對する返事くらいに成功した場合はほとんどない。骨を折つて失敗するのは愚だと悟つたから、近頃では宿命論者の立脚地から人と交際をしている。ただ困るのは演舌と文章である。あいつは骨を折つて準備をしないと失敗する。その代りいくら骨

を折つてもやつぱり失敗する。つまりは同じ事なんだが、骨を折った失敗は、人の氣に入らないでも、自分の弱点ぼろが出ないから、まあ準備をしてからやる事になっている。いつかは初さんの氣に入つたような演説をしたり、文章を書いて見たいが、——どうも馬鹿にされそうでいけないから、いまだにやらずにいる。——それはここには余計な事だから、このくらいでやめてまた初さんの話を続けて行く。

その時初さんは、笑いながら、下から、自分に向つて、

「おい、そう真面目くさらねえで、早く下りて来ねえな。日は短みじけえやな」

と云つた。坑あなの中でカン、テ、ラを点つけた、初さんはたしかに日は短えやなと云つた。

自分が土の段を一二間下りて、初さんの立つてる所まで行く

と、初さんは、右へ曲つた。また段々が四五間続いている。それを降り切ると、今度は初さんが左へ折れる。そうしてまた段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稲妻いなずまのように歩いて、段々を——さあ何町降なんちょうりたか分らない。始めての道ではあるし、こ
とに暗い坑あなの中の事であるから自分には非常に長く思われた。ようやく段々を降り切つて、だいぶ浮世とは縁が遠くなつたと思つたら急に五六畳の部屋に出た。部屋と云つても坑を切り広げたもので、上と下がすぼまつて、腹の所が膨ふくらんでいるから、まるで酒甕さかがめの中へでも落込んだ有様である。あとから分つた話だが、これは作事場さくじばと云うんで、技師の鑑定で、ここには鉾脈ひらがあるとなると、そこを掘り拡ひろげて作事場にするのである。だから通り路よりは自然広い訳で、この作事場を坑夫が三人一組で、請負仕事うけおいに引受ける。二週間と見積つたのが、四日で済む事も

あり、高が五日くらいと踏んだ作事に半月以上食い込む事もある。こう云う訳で、シ、キのなかに路ができて、路のはたに銅脈さえ見つければ、御構おかまいなくそこだけを掘り抜いて行くんだから、電車の通るシ、キの入口こそ、平らでもあり、また一条ひとすじでもあるが、下へ折れて第一見張所のあたりからは、右へも左へも条路えだみちができて、方々に作事場が建つ。その作事をしまうと、また銅脈を見つけては掘り抜いて行くんだから、シ、キの中は細い路だらけで、また暗い坑だらけである。ちようど蟻ありが地面を縦横に抜いて歩くようなものだろう。または書蠹のむしが本を食くらうと見立てても差し支さつかない。つまり人間が土の中で、銅あかがねを食つて、食い尽すと、また銅を探し出して食いにゆくんでむやみに路がたくさんできてしまったのである。だから、いくらシ、キの中を通つても、ただ通るだけで作事場へ出なければ坑夫には逢あわない。か

あんかあんという音はするが、音だけでは極^{きわ}めて淋^{さみ}しいものである。自分は初さんに連れられて、シ、キ、へ這^{はい}入^いったが、ただシ、キの様子を見るのが第一の目的であつたためか、廻り道をして作事場へは寄らなかつたと見えて、坑夫の仕事をしているところは、この段々の下へ来て、初めて見た。――稲妻^{いなずま}形に段々を下りるときは、むやみに下りるばかりで、いくら下りても尽きないのみか、人っ子一人に逢^あわないものだから、はなはだ心細かつたが、はじめて作事場へ出て、人間に逢つたら、大いに嬉しかつた。

見ると丸太^{まるた}の上に腰をかけている。数は三人だつた。丸太は四つや丸太^{まるた}で、軌道^{レール}の枕木くらいなものだから、随分の重さである。どうして、ここまで運んで来たかとうてい想像がつかない。これは天井の陥落を防ぐため、少し広い所になると突つか

い棒に張るために、シ、チ、ユ、ウ、が必要な作事場へ置いて行くんだ
そうだ。その上に二人腰ふたありを掛けて、残る一人が屈しゃがんで丸太へ向
いている。そうして三人の間には小さな木の壺つぼがある。伏せて
ある。一人がこの壺を上から抑おさえている。三人が妙な叫び声を
出した。抑えた壺をたちまち挙げたあ。下から賽さいが出た。――と
ころへ自分と初さんが這入った。

三人はひとしく眼を上げて、自分と初さんを見た。カンテラ、
が土の壁に突き刺してある。暗い灯ひが、ぎろりと光る三人の眼球めだま
を照らした。光ったものは実際眼球だけである。坑は固もとより暗
い。明かるくなくつちやならない灯も暗い。どす黒く燃えて煙けぶり
を吹いている所は、濁った液体が動いてるように見えた。濁つ
た先が黒くなつて、煙と変化するや否や、この煙が暗いもの
の中に吸い込まれてしまう。だから坑の中がぼうとしている。そ

うして動いている。

カンテラは三人の頭の上に刺さっていた。だから三人のうち

で比較的判然見えたのは、頭だけである。ところが三人共頭が

黒いので、つまりは、見えないのと同じ事である。しかも三つ

とも集つていたから、なおさら変であつたが、自分が這入るや

否や、三つの頭はたちまち離れた。その間から、壺が見えたん

である。壺の下から賽が見えたのである。壺と、賽と、三人の

異なる叫び声を聞いた自分は、次に三人の顔を見たんである。よ

くはわからない顔であつた。一人の男は頬骨の一点と、小鼻の

片傍だけが、灯に映つた。次の男は額と眉の半分に光が落ちた。

残る一人は総体にぼんやりしている。ただ自分の持つていた、

カンテラを四五尺手前から真向に浴びただけである。——三人

はこの姿勢で、ぎろりと眼を据えた。自分の方に。

ようやく人間に逢^あつて、やれ嬉^{うれ}しやと思つた自分は、この三対^{ついで}の眼球^{めだま}を見るや否や、思わずぴたりと立ち留^{とど}つた。

「手前^{てまえ}は……」

と云い掛けて、一人が言葉を切つた。残る二人はまだ口を開^{ひら}かない。自分も立ち留^{とど}まつたなり、答^{こた}えなかつた。——答^{こた}えられなかつた。すると

「新^{しん}めえだ」

と、初さんが、威勢のいい返事をしてくれた。本当のところを白状すると、三人の眼球が光つて、「手前^{てまえ}は……」と聞かれた時は、初さんの傍^{そば}にいる事も忘れて、ただおやつと思つた。立すくむと云うのはこれだろう。立ちすくんで、硬^{かた}くこわ張り掛けたところへ「新^{しん}めえだ」と云う声がした。この声が自分の左の耳^{みみ}の、つい後^{うしろ}から出て、向うへ通り抜けた時、なるほど初さん

がついてたなと思ひ出した。それがため、こわ張りかけた手足も、中途でもとへ引き返した。自分は一步^{わき}傍へ退いた。初さんに前へ出てもらうつもりであつた。初さんは注文通り出た。

「相変らずやつてるな」

とカンテ^さラを提げたまま、上から三人の真中に転がつてる、壺と賽を眺^{なが}めた。

「どうだ仲間入は」

「まあよそう。今日は案内だから」

と初さんは取り合わなかつた。やがて、四つ^よや丸太^{まるた}の上へうんとこしよと腰をおろして、

「少し休んで行くかな」

と自分の方を見た。立ちすくむまで恐ろしかつた、自分は急に嬉しくなつて元氣が出て来た。初さんの側^{そば}へ腰をおろす。ア、テ、

シ、この利目ききめは、ここで始めて分つた。旨い具合うまに尻うまが乗つて、柔らかに局部こたへ応える。かつ冷えないで、結構だ。実はさつきから、眼が少し眩くらんで——眩くらんだか、眩くらまないんだか、坑あなの中ではよく分らないが、何しろ好い気持ではなかったが、こ
う尻を掛けて落ちつくと、大きに楽らくになる。四人よつたりがいろいろな話はなをしている。

「広本ひろもとへは新らしい玉たまが来たが知つてるか」

「うん、知つてる」

「まだ、買わねえか」

「買わねえ、お前めえは」

「おれか。おれは——ハハハハ」

と笑つた。これは這入はいつて来た時、顔中ぼんやり見えた男である。今でもぼんやり見える。その証拠には、笑つても笑わなくつ

でも、顔の輪廓りんかくがほとんど同じである。

「随分手廻しがいいな」

と初さんもいささか笑っている。

「シキ、へ這入へえると、いつ死ぬか分らねえからな。だれだつて、そうだろう」

と云う答があつた。この時、

「御互に死なねえうちの事だなあ」

と一人だれかが云つた。その語調には妙に咏嘆えいたんの意が寓ぐうしてあつた。

自分はあまり突然のように感じた。

そうしているうちに、一間置いっけんいて隣りの男が突然自分に話しかけた。

「御前おめえはどこから来た」

「東京です」

「ここへ来て儲けようたつて駄目だぜ」

と他のほかのが、すぐ教えてくれた。自分は長蔵さんに逢うや否や儲かる儲かるを何遍となく聞かせられて驚いたが、飯場はんばへ着くが早い、今度は反対に、儲からない儲からないで立てつづけに責められるので、大いに辟易へきえきした。しかし地の底ではよもやそんな話も出まいと思つてここまで降りて来たが、人に逢えばまた儲からないを繰り返された。あんまり馬鹿馬鹿しいんで何とか答弁をしようかとも考えたが、滅多めったな事を云えば擲はりつけられるだけだから、まあやめにして置いた。さればと云つて返事をしなければまたやりつけられる。そこで、こう云つた。

「なぜ儲からないんです」

「この銅山やまには神様がいます。いくら金を蓄ためて出ようとしたつて駄目だ。金は必ず戻つてくる」

「何の神様ですか」

と聞いて見たら、

「達磨だ」
だるま

と云つて、四人よつたりながら面白そうに笑つた。自分は黙つていた。

すると四人は自分を措おいてしきりに達磨の話始めた。約十分
余りも続いたろう。その間自分はほかの事を考えていた。いろ
いろ考えたうちに一番感じたのは、自分がこんな泥だらけの服
を着て、真暗な坑あなのなかに屈しやがんでるところを、艶子つやこさんと澄江すみえさ
んに見せたらばと云う問題であつた。氣の毒がるだろうか、泣
くだろうか、それともあさましいと云つて愛想あいそを尽かすだろ
うかと疑つて見たが、これは難なく氣の毒がつて、泣くに違ちがひ
いと結論してしまつた。それで一目ひとめくらはこの姿を二人に見せ
たいような氣がした。それから昨夜ゆうべ囲炉裏いろりの傍そばでさんざん馬鹿

にされた事を思い出して、あの有様を二人に見せたらばと考えた。ところが今度は正反对で、二人共傍そばにいてくれないで仕合せだと思つた。もし見られたらと想像して眼前に、意気地いけぢのない、大いに苛めいじられてゐる自分の風体ふうていと、ハイカラの女を二人描えがき出したら、はなはだ氣恥きぢずかしくなつて腋わきの下から汗が出そうになつた。これで見ると、坑夫に墮落すると云う事實その物はさほど苦にならぬのみか、少しは得意の氣味で、ただ坑夫になりたての幅はばの利きかないところだけを、女に見せたくなかつた訳になる。自分の器量を下げるところは、誰にも隠したいが、ことに女には隠したい。女は自分を頼るほどの弱いものだから、頼られるだけに、自分は器量のある男だと云う証拠をどこまでも見せたいものと思われる。結婚前の男はことにこの感じが深いようだ。人間はいくら窮した場合でも、時々芝居しばい氣を出す。

自分がア、テ、シ、コ、を臀しりに敷いて、深い坑のなかで、カン、テ、ヲ、を提ひつきげたまま、休んだ時の考えは、全く芝居じみていた。ある意味から云うと、これが苦痛の骨休めである。公然の骨休めとも云うべき芝居は全くここから発達したものと思う。自分は発達しない芝居の主人公を腹の中で演じて、落胆しながら得意がつていた。

ところへ突然肺臓を打ち抜かれたと思うくらい大きな音がした。その音は自分の足の下で起ったのか、頭の上で起ったのか、尻を懸かけた丸太まるたも、黒い天井てんじょうも一度に躍おどり上ったから、分らない。自分の頸くびと手と足が一度に動いた。縁側えんがわに脛はざをぶらさげて、膝頭ひざがしらを丁ちようと叩たたくと、膝から下がぴくんと跳はねる事がある。この時自分の身体からだの動き方は全くこれに似ている。しかしこれよりも倍以上劇烈に來たような気がした。身体ばかりじや

ない、精神がその通りである。一人芝居の真最中でとんぼ返りを打つて、たちまち我れに帰った。音はまだつづいてゐる。落雷を、土中どちゆうに埋めて、自由の響きを束縛そくばくしたように、渋しぶつて、焦いらいつて、陰いんに籠こもつて、抑おさえられて、岩にあたつて、包まれて、激して、跳はね返されて、出端でを失つて、ごうと吼ほえている。

「驚いちやいけねえ」

と初さんが云つた。そうして立ち上がった。自分も立ち上がった。三人の坑夫も立ち上がった。

「もう少した。やつちまうかな」

と、鑿のみを取り上げた。初さんと自分は作事場さくじばを出る。ところへ煙けむが来た。煙硝えんしょうの臭においが、眼まなこへも鼻はなへも口くちへも這はい入いつた。噎むせつぽくつて苦しいから、後うしろを向いたら、作事場ではかあん、かあんともう仕事を始めだした。

「なんですか」

と苦しい中で、初さんに聞いて見た。実はさっきの音が耳に応えた時、こりや坑内で大破裂が起つたに違ないから、逃げないと生命が危ない^{いのち}とまで思い詰めたくらいなのに、初さんはますます深く這入る気色^{けしき}だから、気味が悪いとは思つたが、何しろ自由行動のとれる身体ではなし、精神は無論独立の気象^{きしよう}を具え^{そな}ていないんだから、いかに先輩だつて逃げていい時分には、逃げてくれるだろうと安心して、後^{あと}をつけて出ると、むつとするほどの煙^{けむ}が向うから吹いて来たんで、こりや迂濶^{うっかり}深入はできないわと云う腹もあつて、かたがた後^{うしろ}を向く途端^{とたん}に、さっきの連中がもう、煙の中にかあん、かあん、鉦^{あらがね}を叩^{たた}いているのが聞えたんで、それじゃやつぱり安心なのかと、不審のあまりこの質問^{せき}を起して見たのである。すると初さんは、煙の中で、咳^{せき}を二

つ三つしながら、

「驚かなくつてもいい。ダイナ、マイト、だ」

と教えてくれた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫でねえかも知れねえが、シキへ這入った以上、仕方がねえ。ダイナ、マイト、が恐ろしくつちや一日だつて、シキへは這入れねえんだから」

自分は黙っていた。初さんは煙の中を押し分けるようにずんずん潜くぐって行く。満まんざら更苦しくない事もないんだろうが、一つは新参の自分に対して、景気を見せるためじゃないかと思つた。それとも煙は坑あなから坑へ抜け切つて、陸おかの上なら、大抵晴れ渡つた時分なのに、路が暗いんでいつまでも煙が這はつてるように感じたり噎むせつぽく思つたのかも知れない。そうすると自分の方

が悪くなる。

いずれにしても苦いところを我慢して尾^ついて行つた。また胎^た内^{ない}潜^{くぐ}りのような穴を抜けて、三四間^{さんしうかん}ずつの段々を、右へ左へ折れ尽すと、路^{ふたまた}が二股^{ふたまた}になつてゐる。その条路^{えだみち}の突き当りで、カラランと云う音がした。深い井戸へ石片^{いしころ}を抛^なげ込んだ時と調子は似てゐるが、普通の井戸よりも、遙^{はるか}に深いように思われた。と云うものは、落ちて行く間^まに、側^{がわ}へ当つて鳴る音が、冴^さえている。ばかりか、よほど長くつづく。最後のカラランは底の底から出て、出るにはよほど手間^{てま}がかかる。けれども一本道を、真直^{まつすぐ}に上へ抜けるだけで、ほかに逃道^{にぎみち}がないから、どんなに暇取つても、きつと出てくる。途中で消えそうになると、壁の反響が手伝つて、底で出ただけの響は、いかに微^{かすか}な遠くであつても、洩^もらすところなく上まで送り出す。——ざつとこんな音

である。カララン。カカラアン。……

初さんが留^{とま}った。

「聞えるか」

「聞えます」

「スノコへ鉋を落してる」

「はああ……」

「ついでだからスノコを見せてやろう」

と、急に思いついたような調子で、勢いよく初さんが、一足後へ引いて草鞋^{わらじ}の踵^{かかと}を向け直した。自分が耳の方へ気を取られて、返事もしないうちに、初さんは右へ切れた。自分も続いて暗いなかへ這入る。

折れた路はわずか四尺ほどで行き当る。ところをまた右へ廻り込むと、一間ばかり先が急に薄明るく、縦にも横にも広がっ

ている。その中に黒い影が二つあつた。自分達はその傍^{そば}まで近づいた時、黒い影の一つが、左の足と共に、精一杯前へ出した力^{うしろ}を後へ抜く拍子^{ひょうし}に、大きな箕^みを、斜^{はす}に抛^なげ返した。箕は足掛りの板の上に落ちた。カカン、カラカランと云う音が遠くへ落ちて行く。一尺前は大きな穴である。広さは畳二畳^{にじようじき}敷ぐらいはあるだろう。箕に入れたばら^{あらがね}の鉋^{ほりこ}を、掘子^{かすか}が抛^なげ込んだばかりである。突き当りの壁は突立^{つ立た}っている。微^{かすか}なカンテラに照らされて、色さえしつかり分らない上が、一面に濡^ぬれて、濡れた所だけがきらきら光っている。

「覗^{のぞ}いて見ろ」

初さんが云った。穴の手前が三尺ばかり板で張り詰めてある。自分は板の三分の一ほどまで踏み出した。

「もつと、出ろ」

と初さんが後から催促する。自分は躊躇ちゆうちよした。これでさえ踏板はすが外れれば、どこまで落ちて行くか分らない。ましてもう一尺前へ出れば、いざと云う時、土の上へ飛び退とく手間てまが一尺だけ遅くなる。一尺は何でもないようだが、ここでは平地ひらちの十間にも当る。自分は何分なにぶんにも躊躇ちゆうちよした。

「出ろやい。吝けちな野郎だな。そんな事で掘子が勤まるかい」と云われた。これは初さんの声ではなかった。黒い影の一人が云ったんだろう。自分は振り返って見なかった。しかし依然として足は前へ出なかった。ただ眼だけが、露で光った薄暗い向うの壁を伝わって、下の方へ、しだいに落ちて行くと、約一間ばかりは、どうにか見えるが、それから先は真暗だ。真暗だからどこまで視線に這入はいるんだか分らない。ただ深いと思えば際限もなく深い。落ちちゃ大変だと神経を起すと、後から背中を

突かれるような気がする。足は依然としてもとの位地を持ち応えていた。すると、

「おい邪魔だ。ちよつと退きな」

と声を掛けられたんで、振り向くと、一人の掘子が重そうに俵を抱えて立っている。俵の大きさは米俵の半分ぐらいしかない。しかし両手で底を受けて、幾分か腰で支えながら、うんと気合を入れているところは、全く重そうだ。自分はこの体を見て、すぐ傍へ避けた。そうして比較的安全な、板が折れても差支なく地面へ飛び退けるほどの距離まで退いた。掘子は、俵で眼先がつかえてるから定めし剣呑がるだろうと思いのほか、容赦なく重い足を運ばして前へ出る。縁から二尺ばかり手前まで出て、足を揃えたから、もう留まるだろうと見ていると、また出した。余る所は一尺しきやあない。その一尺へまた五寸ほど切り込ん

だ。そうして行儀よく右左を揃えた。そうして、うんと云った。胸と腰が同時に前へ出た。危ない。のめったと思う途端に、重い俵は、とんぼ返りを打って、掘子の手を離れた。掘子はもの所へ突つ立つている。落ちた俵はしばらく音沙汰おとさたもない。と思うと遠くでどきつと云った。俵は底まで落切つたと見える。

「どうだ、あの芸が出来るか」

と初さんが聞いた。自分は、

「そうですねえ」

と首を曲げて、恐れ入つた。すると初さんも掘子ほりこもみんな笑い出した。自分は笑われても全く致し方がないと思つて、依然として恐れ入つた。その時初さんがこんな事を云つて聞かした。

「何になつても修業は要いるもんだ。やつて見ねえうちは、馬鹿

にや出来ねえ。お前が掘子になるにしたつて、おつかながつて、手先ばかりで抛なげ込んで見ねえ。みんな板の上へ落ちちまつて、肝心の穴へは這入はいりやしねえ。そうして、鉤あらがねの重みで引つ張り込まれるから、かえつて剣呑けんおんだ。ああ思い切つて胸から突き出してかからにや……」

と云い掛けると、ほかの男が、

「二三度ス、ノ、コへ落ちて見なくつちや駄目だ。ハハハハ」と笑つた。

あともしり

後戻をして元の路みちへ出て、半町ほど行くと、掘子は右へ折れた。初さんと自分は真直に坂を下りる。下り切ると、四五間平らな路を縫うように突き当つた所で、初さんが留まつた。

「おい。まだ下りられるか」

と聞く。実はよほど前から下りられない。しかし途中で降参こうさんし

たら、落第するにきまつてゐるから、我慢に我慢を重ねて、ここ
まで来たようなものの、内心ではその内もうどん底へ行き着く
だろうくらいの目算はあつた。そこへ持つて来て、相手がぴた
りと留まつて、一段落いちだんらくつけた上、さて改めて、まだ下りる気か
と正式に尋ねられると、まだ下りるべき道程みちのりはけつして一丁や
二丁でないと云う意味になる。——自分は暗いながら初さんの
顔を見て考えた。御免蒙ごめんこうぶろうかしらと考えた。こう云う時の出
処進退は、全く相手の思わく一つできまる。いかな馬鹿でも、
いかな利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するより
も、初さんの顔色で判断する方が早く片がつく。つまり自分の
性格よりも周囲の事情が運命を決する場合である。性格が水準
以下に下落する場合である。平生へいぜい築き上げたと自信している性
格が、めちやくちやに崩くずれる場合のうちでもつとも顕著けんちよなる例

である。——自分の無性格論はここからも出ている。

前申す通り自分は初さんの顔を見た。すると、下りようじやないかと云う親密な情合も見えない。下りなくつちや御前のためにならないと云う忠告の意も見えない。是非下ろして見せると云う威嚇もあらわれていない。下りたかろうと焦らす気色は無論ない。ただ下りられまいと云う侮辱の色で持ち切っている。それは何ともなかった。しかしその色の裏面には落第と云う切実な問題が潜んでいる。この場合における落第は、名誉より、品性より、何よりも大事件である。自分は窒息しても下りなければならぬ。

「下りましょう」

と思ひ切つて、云つた。初さんは案に相違の様子であつたが、「じゃ、下りよう。その代り少し危ないよ」

と穏かに同意の意を表した。なるほど危ないはずだ。九十度の角度で切つ立つた、屏風のような穴を真直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子が懸つてゐる。勾配も何にもない。こちらの壁にぴったり食つついて、棒を空にぶら下げたように、覗くと端が見えかねる。どこまで続いてるんだか、どこで縛りつけてあるんだか、まるで分らない。

「じゃ、己が先へ下りるからね。気をつけて来たまえ」

と初さんが云つた。初さんがこれほど丁寧な言葉を使おうとは思ひも寄らなかつた。おおかた神妙に下りましようと思つたので、幾分か憐愍の念を起したんだろう。やがて初さんは、ぐるりと引つ繰り返つて、正式に穴の方へ尻を向けた。そうして屈んだ。と思うと、足からだんだん這入つて行く。しまいには顔だけが残つた。やがてその顔も消えた。顔が出ている間は、多少の安

心もあつたが、黒い頭の先までが、ずぼりと穴へはまつた時は、さすがに心配なのと心細いので、じつとしていられなくつて、足をつま立てるようにして、上から見下した。初さんは下りて行く。黒い頭とカン、テラの灯だけが見える。その時自分は気味の悪いうちにも、こう考えた。初さんの姿が見えるうちに下りてしまわないと、下り損なうかも知れない。面目ない事が出来る。早くするに越した分別はないと決心して、いきなり後ろ向になつて初さんのように、膝を地につけて、手で摺り下りながら、草鞋の底で段々を探った。

両手で第一段目を握つて、足を好加減な所へ掛けると、背中が海老のように曲つた。それから、そろそろ足を伸ばし出した。真直に立つと、カン、テラの灯が胸の所へ来る。じつとしてゐると燻されてしまう。仕方がないから、片足下げる。手もこれに

応じて握り更かえなくつちやならない。おろそうとすると、指で提さげてるカンテラが、とんだところで、始末の悪いように動く。滅めつた多に振ると、着物が焼けそうになる。大事を取ると壁へぶつかって灯が揉もみ潰つぶされそうになる。親指へカ、ツ、を差し込んで、振子のように動かしした時は、はなはだ軽便な器械だと思つたが、こうなると非常に邪魔になる。その上梯子はしごの幅は狭い。段と段の間がすこぶる長い。一段さがるに、普通の倍は骨が折れる。そこへもつて来て恐怖が手伝う。そうして握り直したんびに、段木だんぎがぬらぬらする。鼻を押しつけるようにして、乏しい灯で透すかして見ると、へな土が一面に粘っいている。上り下りの草鞋のぼさで踏つけたものと思われる。自分は梯子の途中で、首を横へ出して、下を覗のぞいた。よせば善かつたが、つい覗いた。すると急にぐらぐらと頭が廻まつて、かたく握った手がゆるんで来た。これ

は死ぬかも知れない。死んじや大變だと、噛^{かじ}りついたなり、いきなり眼を閉^{ねむ}つた。石^{シヤボン}鱈^{だま}球の大きなのが、ぐるぐる散らついてるうちに、初さんが降りて行く。本当を云うと、下を覗いた時にこそ、初さんの姿が見えれば見えるんで、ねぶつた眼の前に湧^わいて出る石^{シヤボン}鱈^{だま}球の中に、初さんがいる訳がない。しかし現にいる。そうして降りて行く。いかにも不思議であつた。今考えると、目^め舞^{まい}のする前に、ちらりと初さんを見たに違ないんだが、ぐらぐらと咄^{とつち}癡^ちて、死ぬ方が怖^{こわ}くなつたもんだから、初さんの影は網膜に映じたなり忘れちまつたのが、段木に噛^{かじ}りついて眼を閉るや否や生き返つたんだらう。ただしそう云う事が学理上あり得るものか、どうか知らない。その当時は夢中である。坑^{あな}は暗い、命は惜しい、頭は乱れている。生きてるか死んでるか判然しない。そこへ初さんが降りて行く。眼の中で降りて行く

んだか、足の下で降りて行くんだかめちやくちやであつた。が不思議な事に、眼を開けるや否やまた下を見た。するとやはり初さんが降りている。しかも切つ立つた壁の向う側を降りていようだ。今度は二度目のせい、落ちるほど眩暈めまいもしなかつたんで、よくよく眸ひとみを据すえて見ると、まさに向う側を降りて行く。はてなと思つた。ところへカンテラがまたじいと鳴つた。保証つきの灯火あかりだが、こうなるとまた心細い。初さんはずんずん行くようだ。自分もここに至れば、全速力で降りるのが得策だと考えついた。そこでぬるぬるする段木だんぎを握り更かえ、握り更えてようやく三間ばかり下がると、足が土の上へ落ちた。踏んで見たがやッぱり土だ。念のため、手を離さずに足元の様子をみると、梯子はしごは全く尽きている。踏んでいる土も幅一尺で切れている。あとは筒拔つつぬけの穴だ。その代り今度は向側むこうがわに別の梯子が

ついている。手を延ばすと届くように懸^かけてある。仕方がないから、自分はまたこの梯子へ移った。そうして出来るだけ早く降りた。長さは前と同様である。するとまた逆の方向に、依然として梯子が懸けてある。どうも是非に及ばない。また移った。やつとの思いでこれも片づけると、新しい梯子はもとのごとく向側に懸っている。ほとんど際限がない。自分が六つめの梯子まで来た時は、手が怠^{だる}くなつて、足が悸^{ふる}え出して、妙な息が出て来た。下を見ると初さんの姿はとくの昔に消えている。見れば見るほど真闇^{まつくら}だ。自分のカンテラへはじいじいと点滴^{しずく}が垂れる。草鞋^{わらじ}の中へは清水^{しみず}がしみ込んで来る。

しばらく休んでいたら、手が抜けそうになった。下り出すと足を踏^はみ外^{はず}しかねぬ。けれども下りるだけ下りなければ、のめつて逆^{さか}さに頭を割るばかりだと思つと、どうか、どうか、段々を下

り切る力が、どつかから出て来る。あの力の出所はとうてい分らない。しかしこの時は一度に出ないで、少しずつ、腕と腹と足へ煮染み出すように来たから、自分でも、ちゃんと自覚していた。ちやうど試験の前の晩徹夜をして、疲労の結果、うつとりして急に眼が覚めると、また五六頁は読めると同じ具合だと思ふ。こう云う勉強に限って、何を読んだか分らない癖に、とにかく読む事は読み通すものだが、それと同じく自分もたしかに降りたとは断言しにくいが、何しろ降りた事はたしかである。下読をする書物の内容は忘れても、頁の数は覚えているごとく、梯子段の数だけは明かに記憶していた。ちやうど十五あつた。十五下り尽しても、まだ初さんが見えないには驚いた。しかし幸い一本道だったから、どぎまぎしながらも、細い穴を這い出すと、ようやく初さんがいた。しかも、例のように無敵な文句

は並べずに、

「どうだ苦しかったか」

と聞いてくれた。自分は全く苦しいんだから、

「苦しいです」

と答えた。次に初さんが、

「もう少しだ我慢しちや、どうだ」

と奨励^{しょうれい}した。次に自分は、

「また梯子があるんですか」

と聞いた。すると初さんが、

「ハハハハもう梯子はないよ。大丈夫だ」

と好意的^{えみ}の笑を洩^もらした。そこで自分も我慢のしついでだと観

念して、また初さんの尻について行くと、また下りる。そうして下りるに従って路へ水が溜^{ため}って来た。ぴちやぴちやと云う音

がする。カン、テ、ラの灯^ひで照らして見ると、下谷^{したや}辺の溝渠^{どぶ}が溢^{あふ}れ
たように、薄鼠^{うすねずみ}になつてだぶだぶしている。その泥水がまた馬
鹿に冷たい。指の股が切られるようである。けれども一面の水
だから、せつかく水を抜いた足を、また無惨^{むざん}にも水の中へ落さ
なくつちやならない。片足を揚げると、五位^{ごいざぎ}鷺のようにそのま
まで立つていたくなる。それでも仕方なしに草鞋^{わらじ}の裏を着ける
とぴちやりと云うが早いか、水際から、魚の鰭^{ひれ}のような波が立
つ。その片側がカン、テ、ラの灯できらきらと光るかと思うと、す
ぐ落ちついてもとに帰る。せつかく平^{たいら}になつた上をまたぴちや
りと踏み荒らす。魚の鰭がまた光る。こう云う風にして、奥へ
奥へと這^{はい}入つて行くと、水はだんだん深くなる。ここを潜^{くぐ}り抜
けたら、乾いた所へ出られる事かと、受け合われない行先をあ
てにして、ぐるりと廻ると、足の甲でとまつた水が急に脛^{すね}ま

で来た。この次にはと、辛抱して、右に折れると、がつくり落ちがして膝ひざまで漬つかつちまう。こうなると、動きたんびにぎぶぎぶ云う。膝で切る波が渦うずを捲まいて流れる。その渦がだんだんもも股の方へ押し寄せてくる。全く危険だと思った。ことによれば、何かの原因で水が出たんだから、今に坑あなのなかで、いっばいになりやしないかと思うと急に腰から腹の中までが冷たくなつて来た。しかるに初さんは辟易へきえきした体ていもなく、さつさと泥水を分けて行く。

「大丈夫なんですか」

と後うしろから聞いて見たが、初さんは別に返事もせずに、依然として、ぎぶりぎぶりと水を押し分けて行く。自分の考えるところによると、いくら銅山でも水に漬つかつていては、仕事ができるはずがない。こうどぶつく以上は、何か変事でもあるか、また

は廃坑へでも連れ込まれたに違いない。いずれにしても災難だと、不安の念に冒おかされながら、もう一遍初さんに聞こうかしらと思つてるうち、水はとうとう腰まで来てしまった。

「まだ這入るんですか」

と、自分はたまらなくなつたから、後うしろから初さんを呼び留めた。この声は普通の質問の声ではない。吾身わがみを思うの余り、命が口から飛び出したようなものである。だから、いざと云う間際まぎわには単音たんいんの叫声となつてあらわれるところを、まだ初さんの手前まへを憚はばかるだけの余裕があるから、しばらく恐怖の質問と姿を變じたままでである。この声を聞きつけた時は、さすがの初さんも水の中で留ひとみまつたなり、振り返まゆつた。カン、テ、ラ、を高く差し上げる。眸まゆを据すえると初さんの眉の間に八の字が寄つて来た。しかも口元は笑っている。

「どうした。降参したか」

「いえ、この水が……」

と自分は、腰の辺を、物凄^{ものすご}そうに眺^{なが}めた。初さんは毫^{ごう}も感心しない。やつぱりにこにこしている。出水^{でみず}の往来を、通行人が尻をまくって面白^{おもしろ}そうに渉^{わた}る時のように見えた。自分もこれで疑いは晴れたが、根が臆病だから、念のため、もう一度、

「大丈夫でしようか」

を繰返した。この時初さんはますます愉快そうな顔つきだった
が、やがて真面目^{まじめ}になつて、

「八番坑だ。これがどん底だ。水ぐらいあるなあ当前^{あたりめえ}だ。そんなに、おっかながるにや当らねえ。まあ好いからこつちへ来ねえ」

となかなか承知しないから、仕方なしに、股^{また}まで濡^ぬらしてつい

て行つた。たださへ暗い坑あなの中だから、思い切つた喩たとえを云えば、頭から暗闇くらやみに濡れてると形容しても差支さしつかえない。その上本当の水、しかも坑と同じ色の水に濡れるんだから、心持の悪い所が、倍悪くなる。その上水は踝くるぶしからだんだん競せり上がつて来る。今では腰まで漬つかっている。しかも動きたんびに、波が立つから、実際の水際以上までが濡れてくる。そうして、濡れた所は乾かないのに、波はことによると、濡れた所よりも高く上がるから、つまりは一寸二寸と身体からだが腹まで冷えてくる。坑で頭から冷えて、水で腹まで冷えて、二重に冷え切つて、不知案内ふちあんないの所を海鼠なまこのようについて行つた。すると、右の方に穴があつて、洞ほらのようひらに深く開いてる中から、水が流れて来る。そうしてその中では、かあんかあんと云う音がする。作事場さくじばに違いない。初さんは、穴の前に立つたまま、

「そうら。こんな底でも働いてるものがあるぜ。真似ができるか」

と聞いた。自分は、胸が水に浸る^{ひた}まで、屈^{こじ}んで洞の中を覗^{のぞ}き込んだ。すると奥の方が一面に薄明^{はくめい}るく——明るくと云うが、締りのない、取り留めのつかない、微^{かす}な灯^ひを無理に広い間^まへ使つて、引つ張り足りないから、せつかくの光が暗闇^{くらやみ}に圧倒^{あつぱく}されて、茫然^{ぼうぜん}と濁^{にご}っている体^{てい}であつた。その中に一段と黒いものが、斜めに岩へ吸いついてゐる辺^{あたり}から、かあんかあんと云う音が出た。洞の四面へ響いて、行き所のない苦しまぎれに、水に跳ね返^はつたものが、纏^{まと}まつて穴の口から出て来る。水も出てくる。天井の暗い割には水の方に光がある。

「這^へ入^えつて見るか」

と云う。自分はぞつと寒気がした。

「這入らないでも好いです」

と答えた。すると初さんが、

「じや止め^やにして置こう。しかし止めるなあ今日だけだよ」

と但^{ただ}し書^{がき}をつけて、一応自分の顔をとくと見た。自分は案^{あん}の定^{じょう}釣り出された。

「明日^{あした}つから、ここで働くんでしょうか。働くとするば、何時

間水に漬かつてる——漬かつてれば義務が済むんですか」

「そうさなあ」

と考えていた初さんは、

「一昼夜に三回の交替だからな」

と説明してくれた。一昼夜に三回の交替ならひとくぎり八時間になる。自分は黒い水の上へ眼を落した。

「大丈夫だ。心配しなくつてもいい」

初さんは突然慰めてくれた。気の毒になつたんだろう。

「だつて八時間は働かなくっちゃならないんでしよう」

「そりやきまりの時間だけは働かせられるのは知れ切つてらあ。だが心配しなくつてもいい」

「どうしてですか」

「好いいてえ事よ」

と初さんは歩き出した。自分も黙つて歩き出した。二三歩水をざぶざぶ云わせた時、初さんは急に振り返つた。

「新前しんめえは大抵二番坑か三番坑で働くんだ。よつぽど様子が分らなくつちや、ここまで下りちや来られねえ」

と云いながら、にやにやと笑つた。自分もにやにやと笑つた。

「安心したか」

と初さんがまた聞いた。仕方がないから、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんは大得意であつた。時にどぶどぶ動く水が、急に膝まで減つた。爪先で探ると段々がある。一つ、二つと勘定すると三つ目で、水は踝くるぶしまで落ちた。それで平らに続いている。意外に早く高い所へ出たんで、非常に嬉うれしかった。それから先は、とんとん拍子びょうしに嬉しくなつて、曲れば曲るほど地面が乾いて来る。しまいにはぴちやりとも音のしない所へ出た。時に初さんが器械を見る気があるかと尋ねたが、これは諸方のスノコから落ちて来た鉋あらがねを聚あつめて、第一坑へ揚げて、それから電車でシキの外へ運び出す仕掛を云うんだと聞いて、頭あすから御免蒙ごめんこうぶつた。いくら面白く運転する器械でも、明日の自分に用のない所は見る気にならなかつた。器械を見ないとするところ、まあ坑内の模様を一応見物した訳になる。そこで案内の

初さんが帰るんだと云う通知を与えてくれた。腰きり水に漬か
るのは、いかな初さんも一度でたくさんだと見えて、帰りには
比較的濡ぬれないで済む路を通つてくれた。それでも十間ほどは
腫ふくら脛はぎまで水が押し寄せた。この十間を通るときに、様子を
知らない自分はまた例の所へ来たなと感じて、往きに臍へその近所
が氷りつきそうであつた事を思い出しつつ、今か今かと冷たい
足を運んで行つたが、鵜いすかの嘴はしと善いい方へばかり、食い違つて、行
けば行くほど、水が浅くなる。足が軽くなる。ついにはまた乾
いた路へ出てしまった。初さんに、

「もう済んだでしょうか」

と聞いて見ると、初さんはただ笑つていた。その時は自分も愉
快だったが、しばらくすると、例の梯子はしごの下へ出た。水は胸ま
でくらい我慢するがこの梯子には、——せめて帰り路だけでも

好いから、遁のがれたかつたが、やつぱりちようどその下へ出て来た。自分は蜀しよくの棧道さんどうと云う事を人から聞いて覚えていた。この梯子は、棧道を逆さかに釣さかるして、未練なく傾斜の角度を抜きにしたものである。自分はそこへ来ると急に足が出なくなった。突然脚かっけ氣に雇かかつたような心持になると、思わず、腰うしろを後へ引つ張られた。引つ張られたのは初さんに引つ張られたのかと思う読者もあるかもしれないが、そうじゃない。そう云う気分が起つたんで、強いて形容すれば、疝せんき氣に引つ張られたとでも叙じよしたら善かろう。何しろ腰が伸のせない。もつともこれは逆棧道さかさんどうの祟たたりだと一概に断言する氣でもない、さつきから案内の初さんおなさけの方で、だいぶ御機嫌ごきげんが好いので、相手の寛大な御情おなさけにつけ上つて、奮発たがの箍ががしだいに緩ゆるんだのもたしかな事実である。何しろ歩けなくなつた。この腰附を見ていた初さんは、

「どうだ歩けそうもねえな。まるで屁^へつぴり腰だ。ちつと休むが好い。おれは遊びに行つて来るから」

と云つたぎり、暗い所を潜^{くぐ}つて、どこへか出て行つた。

あとは云うまでもなく一人になる。自分はべつとりと、尻を地^{おかげ}びたへ着けた。ア、テ、シ、コ、はこう云うときに非常に便利になる。御蔭^{おかげ}で、岩で骨が痛んだり、泥で着物が汚^{よご}れたりする憂いがないだけ、惨憺^{みじめ}なうちにも、まだ嬉しいところがあつた。そうして、硬く曲つた背中を壁へ倚^もたせた。これより以上は横のものを豎^{たて}にする気もなかった。ただそのままの姿勢で向うの壁を見詰めていた。身体^{からだ}が動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだから、身体が怠けるのか、とにかく、双方相^{あい}び合^あつて、生死^{せいし}の間に彷徨^{ほうこう}していたと見えて、しばらくは万事が不明瞭^{ふめいりょう}であつた。始めは、どうか一尺立方でもいいから、明かるい空氣が吸つて

見たいような気がしたが、だんだん心が昏くらくなる。と坑あなのなかの暗いのも忘れてしまう。どっちがどっちだか分らなくなつて朦朧もうろうのうちに合体稠和がったいちゅうわして来た。しかしけつして寝たんじやない。しんとして、意識が稀薄になつたまでである。しかしその稀薄な意識は、十倍の水に溶いた娑婆氣しやばきであるから、いくら不透明でも正気は失わない。ちやうど差し向いの代りに、電話で話しをするくらいの程度——もしくはこれよりも少しく不明瞭な程度である。かように水平以下に意識が沈んでくるのは、浮世の日が烈はげし過ぎて困る自分には——東京にも田舎いなかにもおり終おひせない自分には——煩悶はんもんの解熱劑げねつざいを頓服とんぷくしなければならない自分には——神経纖維しんけいせんいの端はじの端まで寄つて来た過度の刺激を散らさなければならぬ自分には——必要であり、願望であり、理想である。長蔵さんに引張られながら、道々空想に描いた坑夫

生活よりも、たしかに上等の天国である。もし驅落^{かけおち}が自滅の第一着なら、この境界^{きょうがい}は自滅の——第何着か知らないが、とにかく終局地を去る事遠からざる停車場^{ステーション}である。自分は初さんに置いて行かれた少時^{しばし}の休憩時間内に、図^{はか}らずもこの自滅の手前まで、突然釣り込まれて、——まあ、どんな心持がしたと思う。正直に云えば嬉しかった。しかし嬉しいと云う自覚は十倍の水に溶き交ぜられた正気の中に遊離しているんだから、ほかの娑婆^{せば}気と同じく、劇烈には来ない。やっぱり稀薄である。けれど自覚はたしかにあった。正気を失わないものが、嬉しいと云う自覚だけを取り落す訳がない。自分の精神状態は活動の区域^{せきよく}を狭められた片輪の心的現象とは違う。一般の活動^{ほし}を恣にする自由の天地はもとのごとくに存在して、活動その物の強度が滅却して来たのみだから、平常の我とこの時の我との差はただ濃淡の

差である。その最も淡い生涯うすしょうがいの中に、淡い喜びがあつた。

もしこの状態が一時間続いたら、自分は一時間の間満足して
いたろう。一日続いたら一日の間満足したに違ない。もし百年
続いたにしても、やっぱり嬉しかったろう。ところが——ここ
でまた新しい心の活作用に現参げんざんした。

というのはあいにく、この状態が自分の希望通同じ所に留つ
ていてくれなかつた。動いて来た。油の尽きかかったランプの
灯ひのように動いて来た。意識を数字であらわすと、平生へいぜい十のも
のが、今は五になつて留まつていた。それがしばらくすると四
になる。三になる。推して行けばいつか一度は零れいにならなけれ
ばならない。自分はこの経過に連れて淡くなりつつ変化する嬉うれ
しさを自覚していた。この経過に連れて淡く変化する自覚の度
において自覚していた。嬉しさはどこまで行つても嬉しいに違

ない。だから理窟りくつから云うと、意識がどこまで降さがつて行こうとも、自分は嬉しいとのみ思つて、満足するよりほかに道はないはずである。ところがだんだんと競せりおろして来て、いよいよ零に近くなつた時、突然として暗あん中ちゆうから躍おどり出した。こいつは死ぬぞと云う考えが躍り出した。すぐに続いて、死んじや大變だと云う考えが躍り出した。自分は同時に、かつと眼を開あいた。足の先が切れそうである。膝から腰までが血が通かよつて氷りついている。腹は水でも詰めたようである。胸から上は人間らしい。眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思うと、「死ぬぞ、死んじや大變だ」までが順々につながつて来て、そこで、ぷつりと切れている。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作しよさになる。つまり「死ぬぞ」で命の方向転換をやつて、やつてからの第一所作が眼を開いた訳になるから、二つのものは全く離れている。

それで全く続いている。続いている証拠しょうこには、眼を開いて、身の周囲まわりを見た時に、「死ぬぞ……」と云う声が、まだ耳に残っていた。たしかに残っていた。自分は声だの耳だのと云う字を使うが、ほかには形容しようがないからである。形容どころではない、実際に「死ぬぞ……」と注意してくれた人間があつたとしきや受け取れなかつた。けれども、人間は無論いるはずはなし。と云つて、神——神はだいきらひ大嫌だ。やっぱり自分が自分の心に、あわてて思い浮べたまでであろが、それほど人間が死ぬのを苦に病んでいようとは夢にも思い浮べなかつた。これだから自殺などはできないはずである。こう云う時は、魂の段取だんどりが平生と違うから、自分で自分の本能に支配されながら、まるで自覚しないものだ。気をつけべき事と思う。この例なども、解釈のしようでは、神が助けてくれたともなる。自分の影身かげみにつ

き添っている——まあ恋人が多いようだが——そう云う人々の魂が救ったんだともなる。年の若い割に、自分がこの声を艶子さんとも澄江さんとも解釈しなかったのは、己惚うぬぼれの強い割には感心である。自分は生れつきそれほど詩的でなかったんだろう。

そこへ初さんがひょつくり帰って来た。初さんを見るが早いか、自分の意識はいよいよ明瞭めいりょうになった。これから例の逆棧道さかさんどうを登らなくっちゃならない事も、明日あしたから、鑿のみと槌つちでかあんかあんやらなくっちゃならない事も、南京米ナンキンまいも、南京虫ナンキンむしも、ジャ、ンボだるまも達磨だるまも一時に残らず分つてしまい、そうして最後に自分の墮落がもつとも明かに分つた。

「ちつたあ気分は好いか」

「ええ少しは好いようです」

「じゃ、そろそろ登つてやろう」

と云うから、礼を云つて立つていると、初さんは景氣よく段木だんぎを捕つかえて片足踏ふん掛かけながら、

「登りは少し骨が折れるよ。そのつもりで尾おいて来ねえ」

と振り返つて、注意しながら登り出した。自分は何となく寒々しい心持になつて、下から見上げると、初さんは登つて行く。猿のように登つて行く。そろそろ登つてくれる様子も何もありやしない。早くしないとまた置いてきぼりを食う恐れがある。自分も思い切つて登り出した。すると二三段足を運ぶか運ばないうちになるほどと感心した。初さんの云う通り非常に骨が折れる。全く疲れているばかりじゃない。下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、幾分か背の重みを梯子はしごに託する事ができる。しかし上りになると、全く反対で、ややともすると、身体うしろが後へ反それる。反れた重みは、両手で持ち応こたえなければなら

ないから、二の腕から肩へかけて一段ごとに余分の税がかかる。のみならず、手の平ひらと五本の指で、このしめだか高を握らなければならぬ。それが前に云った通りぬるぬるする。梯子を一つ片づけるのは容易の事ではない。しかもそれが十五ある。初さんは、とつくの昔に消えてなくなつた。手を離しさえすれば真暗闇にまつくらやみ逆落さかおとしになる。離すまいとすれば肩が抜けるばかりだ。自分は七番目の梯子の途中で火焰かえんのような息を吹きながら、つくづく労働の困難を感じた。そうして熱い涙で眼がいつぱいになつた。

二三度上瞼うわまぶたと下瞼を打ち合して見たが、依然として、視覚はぼうつとしてゐる。五寸と離れない壁さえたしかには分らない。手の甲で擦こすろうと思うが、あやにく両方とも塞ふさがつてゐる。自分くやしは口惜くなつた。なぜこんな猿の真似をするように零落おちぶれたのかと思つた。倒れそうになる身体からだを、できるだけ前の方への

めらして、梯子に倚もたれるだけ倚れて考えた。休んだと註釈する方が適當かも知れない。ただ中途で留まったと云い切つてもよろしい。何しろ動かなくなつた。また動けなくなつた。じつとして立つていた。カン、テ、ウのじいと鳴るのも、足の底へ清水しみずが沁み込むのも、全く気がつかなくつた。したがつて何分過なんぶんつたのかとんと感じに乗らない。するとまた熱い涙が出て来た。心が存外たしかであるのに、眼だけが霞かすんでくる。いくら瞬まばたきをしても駄目だ。湯の中に眸ひとみを漬つけてるようだ。くしゃくしゃする。焦心じれつたくなる。癩かんが起る。奮興ふんこうの度が烈はげしくなる。そうして、身体は思うように利きかない。自分は齒を食い締しばつて、両手で握つた段木を二三度揺り動かした。無論動きやしない。いつその事、手を離しちまおうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ碎ける方が、早く片がついていい。とむらむらと死ぬ氣が起つた。――

梯子の下では、死んじや大變だと飛び起きたものが、梯子の途中へ来ると、急に太い短い無分別を起して、全く死ぬ氣になつたのは、自分の生涯しょうがいにおける心理推移の現象のうちで、もつとも記憶すべき事実である。自分は心理学者でないから、こう云う変化を、どう説明したら適切であるか知らないけれども、心理学者はかえつて、實際の経験に乏しいようにも思うから、杜撰ずさんながら、一応自分の愚見だけを述べて、参考にしたい。

ア、テ、シ、コを尻に敷いて、休息した時は、始めから休息する覺悟であつた。から心に落ちつきが有る。刺激が少い。そう云う状態で壁へ倚よりかかっていると、その状態がなだらかに進行するから、自然の勢いとしてだんだん氣が遠くなる。魂が沈んで行く。こう云う場合における精神運動の方向は、いつもきまつたもので、必ず積極から出立してしだいに消極に近づくけいろ徑路を

取るのが普通である。ところがその普通の径路を行き尽くして、もうこれがどん詰づまりだと云う間際まぎわになると、魂が割れて二様の所作しよさをする。第一は順風に帆を上げる勢いで、このどん底まで流れ込んでしまう。するとそれぎり死ぬ。でなければ、大切の手前おおぎりまで行つて、急に反対の方角に飛び出してくる。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると、命がたちまち確実になる。自分が梯子はしごの下で経験したのはこの第二に当る。だから死に近づきながら好い心持に、三途さんずのこちら側まで行つたものが、順路をてくてく引き返す手数を省はぶいて、急に、娑婆しやばの真中に出現したのである。自分はこれを死を転じて活に帰す経験と名づけている。

ところが梯子の中途では、全くこれと反対の現象に逢あつた。自分は初さんの後あとを追つ懸けて登らなければならぬ。その初

さんは、とつくに見えなくなつてしまった。心は焦る^{あせ}、気は揉め^もる、手は離せない。自分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。——万事が痛切である。自覚の強度がしだいしだい^{はげ}に劇しくなるばかりである。だからこの場合における精神運動の方向は、消極より積極に向つて登り詰める状態である。さてその状態がいつまでも進行して、奮興^{ふんこう}の極度に達すると、やはり二様の作用が出る訳だが、とくに面白いと思うのはその一つ、——すなわち積極の頂点からとんぼ返りを打つて、魂が消極の末端にひよつくり現われる奇特^{きどく}である。平たく云うと、生きてる事実が明瞭になり切った途端^{とたん}に、命を棄てようと決心する現象を云うのである。自分はこれを活上^{かつじよう}より死に入る作用と名^{なづ}けている。この作用は矛盾のごとく思われるが實際から云うと、矛盾でも何でも、魂の持前だから存外自然に行われるものである。論よ

り証拠^{しょうこ}発奮^{はつふん}して死ぬものは奇麗^{きれい}に死ぬが、いじけて殺されるものは、どうも旨^{うま}く死に切れないようだ。人の身の上はとにかく、こう云う自分が好い証拠である。梯子の途中で、ええ忌々^{いまいま}しい、死んじまえと思つた時は、手を離すのが怖^{こわ}くも何ともなかつた。無論例のごとくどきんなどとはけつしてしなかつた。ところがいざ死のうとして、手を離しかけた時に、また妙な精神作用を^{しょうとう}承当^{しょうとう}した。

自分は元來が小説的の人間じゃないんだが、まだ年が若かつたから、今まで浮氣に自殺を計画した時は、いつでも花々しくやつて見せたいと云う念があつた。短銃^{ピストル}でも九寸五分^{くすんごぶ}でも立派に——つまり人が賞^ほめてくれるように死んでみたいと考えていた。できるならば、華嚴^{けげん}の瀑^{たき}まででも出向きたいなどと思つた事もある。しかしどうしても便所や物置で首を縊^くるのは下等だ

と断念していた。その虚栄心が、この際突然首を出した。どこから出したか分らないが、出した。つまり出すだけの余地があつたから出したに相違あるまいから、自分の決心はいかに真面目であつたにしても、さほど差し逼つてはいなかつたんだらう。しかしこのくらい断乎^{だんこ}として、現に梯子段^{はしごだん}から手を離しかけた、最中に首を出すくらいだから、相手もなかなか深い勢力を張つていたに違ない。もつともこれは死んで銅像になりたがる精神と大した懸隔^{けんかく}もあるまいから、普通の人間としては別に怪しむべき願望とも思わないが、何しろこの際の自分には、ちと贅沢^{ぜいたく}過ぎたようだ。しかしこの贅沢心のために、自分は発作性^{ほつさせい}の急往生を思いとまつて、不束^{ふつつか}ながら今日まで生きている。全く今

はの際^{きわ}にも弱点を引張つていた御蔭である。

話すところなる。——いよいよ死んじまえと思つて、体を心

持後^{あと}へ引いて、手の握^{にぎり}をゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、ここで死んだって冴^さえない。待て待て、出てから華嚴^{けごん}の瀑^{たき}へ行けと云う号令——号令は変だが、全く号令のようなものが頭の中に響き渡った。ゆるめかけた手が自然と緊^{しま}った。曇^{くも}った眼が、急に明かなくなつた。カンテラが燃えている。仰向^{あおもむ}くと、泥で濡^ぬれた梯子段が、暗い中まで続いている。是非共登らなければならぬ。もし途中で挫折^{させつ}すれば犬死になる。暗い坑^{あな}で、誰も人のいない所で、日の目も見ないで、鉤^{あらがね}と同じようにころげ落ちて、それつきり忘れられるのは——案内の初さんにさえ忘れられるのは——よし見つかつても半獸半人の坑夫共に輕蔑^{けいべつ}されるのは無念である。是非共登り切つちまわなければならぬ。カンテラは燃えている。梯子は続いている。梯子の先には坑が続いている。坑の先には太陽が照り渡っている。広い野がある、

高い山がある。野と山を越して行けば華嚴の瀑がある。——ど
うあつても登らなければならぬ。

左の手を頭の上まで伸ばした。ぬらつく段木を指の痕のつくほ
ど強く握った。濡れた腰をうんと立てた。同時に右の足を一尺
上げた。カンテラの灯は暗い中を豎に動いて行く。坑は層一層
と明かるくなる。踏み棄てて去る段々はしだいしだいに暗い中
に落ちて行く。吐く息が黒い壁へ当る。熱い息である。そうし
て時々は白く見えた。次には口を結んだ。すると鼻の奥が鳴つ
た。梯子はまだ尽きない。懸崖からは水が垂れる。ひらりとカ
ンテラを翻えすと、崖の面を掠めて弓形にじいと、消えかかつ
て、手の運動の止まる所へ落ちついた時に、また真直に油煙を
立てる。また翻えす。灯は斜めに動く。梯子の通る一尺幅を外
れて、がんがらがんの壁が眼に映る。ぞつとする。眼が眩む。

眼を閉^{ねむ}つて、登る。灯も見えない、壁も見えない。ただ暗い。手と足が動いている。動く手も動く足も見えない。手障足障^{てざわりあしざわり}だけで生きて行く。生きて登つて行く。生きる^{さと}と云うのは登る事で、登ると云うのは生きる事であつた。それでも——梯子はま
である。

それから先はほとんど夢中だ。自分で登つたのか、天佑^{てんゆう}で登つたのかほとんど判然しない。ただ登り切つて、もう一段も握る梯子がないと云う事を覚^{さと}つた時に、坑の中へぴたりと坐つた。

「どうした。上がつて来たか。途中で死にやしねえかと思つて、

——あんまり長えから。見に行こうかと思つたが、一人じゃ氣味がわるいからな。だけでも、好く上がつて来たな。えらいや」と待ちかねて、もじもじしていた初^{はしご}さんが大いに喜んでくれた。何でも梯子^{はしご}の上でよつほど心配していたらしい。自分はただ、

「少し気分が悪^{わる}るかったから途中で休^{やす}んでいました」と答えた。

「気分が悪い？ そいつあ困^{こま}ったろう。途中^{ちゆうちゆう}つて、梯子^{はし}の途中^{ちゆうちゆう}か」

「ええ、まあそうです」

「ふうん。じゃ明日^{あす}は作業^{さぎょう}もできめえ」

この一言^{いちごん}を聞いた時、自分は糞^{くそ}でも食^{くら}えと思^{おも}った。誰^{たれ}が土竜^{もぐらもち}

の真似^{まね}なんかするものかと思^{おも}った。これでも美^{うつく}しい女^をに惚^ほれられたんだと思^{おも}った。坑^{あな}を出^でれば、すぐ華^け厳^{げん}の瀑^{たき}まで行^いくんだと

思^{おも}った。そうして立派^{りっぺい}に死^しぬんだと思^{おも}った。最後^{さいご}に半時^{はんじ}もこ^んな獣^{けだもの}を相手^{あいて}にしてい^いられるものかと思^{おも}った。そこで、自分^{自分}は初^{はつ}

さんに向^{むか}って、簡単^{かんぱん}に、

「よければ上がりましよう」

と云つた。初さんは怪訝けげんな顔をした。

「上がる？　元氣だなあ」

自分は「馬鹿にするねえ、この明盲あきめくら目め。人を見損みそくなやがつて」と云いたかつた。しかし口だけは叮嚀ていねいに、一言ひとこと、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんはまだぐずぐずしている。驚いたと云うよりも、やつぱり馬鹿にしたぐずつき方かたである。

「おい大丈夫かい。冗談じょうだんじゃねえ。顔色が悪いぜ」

「じゃ僕が先へ行きますよう」

と自分はむつとして歩き出した。

「いけねえ、いけねえ。先へ行つちやいけねえ、後あとから尾ついて来ねえ」

「そうですか」

「あたりめえ当前だあな。人つけ。誰が案内を置き去ざりにして、先へ行く奴があるかい、何でい」

と初さんは、自分を払い退のけないばかりにして、先へ出た。出たと思うと急に速力を増した。腰を折つたり、四つに這はつたり、背中を横よこつ丁ちよにしたり、頭だけ曲げたり、坑あなの恰好かつこうしだいでいろいろに変化する。そうして非常に急ぐ。まるで土の中で生れて、銅脈の奥で教育を受けた人間のようである。畜生中ちゅうじゅうつ腹はらで急ぎやがるなど、こつちも負けない気で歩き出したが、そこへ行く、と、いくら気ばかり張つていても駄目だ。五つ六つ角を曲つて、下りたり上あがつたり、がたつかせているうちに、初さんは見えなくなつた。と思うと、何とかして、何とか、ててててと云う歌を唄うたう。初さんの姿が見えないのに、初さんの声だけは、坑の四方へ反響して、籠こもつたように打ち返してくる。意地の悪い

野郎だと思つた。始めのうちこそ、追つついてやるから今に見
ていろと云う勢いきおいで、根限こんかぎり這はつたり屈かかんだりしたが、残念な事
には初さんの歌がだんだん遠くへ行つてしまふ。そこで自分は
追いつく事はひとまず断念して、初さんのでててててを道案内
にして進む事にした。当分はそれで大概の見当けんとうがついたが、し
まいにはそのてててても怪しくなつて、とうとうまるで聞え
なくなつた時には、さすがに茫然ぼうぜんとした。一本道なら初さんな
んどを頼りにしなくつても、自力じりきで日の当る所まで歩いて出て
見せるが、何しろ、長年掘荒ながねんした坑あなだから、まるで土蜘蛛つちぐもの根
拠地めつたみたようにいろいろな穴が、とんでもない所に開あいている。
滅多めつたな穴へ這入はいるとまた腰きり水に漬つかる所か、でなければ、例
の逆ささかの栈道さんどうへ出そうで容易に踏み込めない。

そこで自分は暗い中に立ち留つて、カンテラの灯ひを見詰めな

がら考えた。往きには八番坑まで下りて行つたんだから歸りには是非共電車の通る所まで登らなければならぬ。どんな穴でも上りのぼならば好いとする。その代り下りなら引返して、また出直す事にする。そうして迂路うろついていたら、どこかの作事場さくじばへ出るだろう。出たら坑夫に聞くとしよう。こう決心をして、東西南北の判然しない所を好い加減に迷まよついていた。非常に気が急せいて息が切れたが、めちやめちやに歩いたために足の冷たいのだけは癒なほつた。しかしなかなか出られない。何だか同じ路を往つたり来たりするような案排あんばいで、あんまり、もどかしものだから、壁へ頭をぶつけて割つちまいたくなつた。どつちを割るんだと云えば無論頭を割るんだが、幾分か壁の方も割れるだろうくらいかんしやくの疳癩かんしやくが起つた。どうも歩けば歩くほど天井てんじやうが邪魔になる、左右の壁が邪魔になる。草鞋わらじの底で踏む段々が邪魔にな

る。坑総体が自分を閉じ込めて、いつまで立つても出してくれないのがもつとも邪魔になる。この邪魔ものの一局部へ頭を擲たきつけて、せめて罅ひびでも入らしてやろうと——やらないまでも時々思うのは、早く華嚴けげんの瀑たきへ行きたいからであつた。そうこ
うしているうちに、向うから一人の掘子ほりこが来た。ばらの銅あかがねをス、
ノコへ運ぶ途中と見えて例の箕みを抱だいてよちよちカンテラを揺ゆ
りながら近づいた。この灯を見つけた時は、嬉しくつて胸がど
きりと飛び上がった。もう大丈夫と勇んで近寄つて行くと、近
寄るがものはない、向うでもこつちへ歩いて来る。二つのカン
テラが一間ばかりの距離に近寄つた時、待ち受けたように、自分
は掘子の顔を見た。するとその顔が非常な蒼あおん蔵ぞうであつた。こ
の坑のなかですら、只事ただごととは受取れない蒼ん蔵である。あかる
みへ出して、青い空の下で見たら、大変な蒼ん蔵ちがに違ちがない。そ

れで口を利くのが厭いやになった。こんな奴の癖に人に調戯からかつたり、
黽なぶつたり、辱はずかしめたりするのかと思つたら、なおなお道を聞く
のが厭いやになった。死んだつて一人で出て見せると云う氣になつ
た。手前共に口を聞くような安っぽい男じゃないと、腹の中で
たしかに申し渡して擦すれ違つた。向うは何にも知らないから、
これは無論だまつて擦れ違つた。行く先は暗くなつた。カンテ
ラは一つになつた。氣はますます焦慮いらつて来た。けれどもなか
なか出ない。ただ道はどこまでもある。右にも左にもある。自
分は右にも這入つた、また左にも這入つた、また真直にも歩い
て見た。しかし出られない。いよいよ出られないのかと、少し
く途方に暮れている鼻の先で、かあんかあんと鳴り出した。五
六歩で突き当つて、折れ込むと、小さな作事場があつて、一人
の坑夫がしきりに槌つちを振り上げて鑿のみを敲たたいている。敲くたんび

に鉋あらがねが壁から落ちて来る。その傍そばに俵はたけがある。これはさつきス、ノコへ投げ込んだ俵と同じ大きさで、もういっぱい詰ふっている。掘子ほりこが来て担かいで行くばかりだ。自分は今度こそいつに聞いてやろうと思つた。が肝心かんじんの本人が一生懸命にかあんかあん鳴らしている。おまけに顔もよく見えない。ちようどいいから少し休んで行こうと云う気が起つた。幸い俵がある。この上へ尻をおろせば、持つて来いの腰掛になる。自分はどきつとア、テ、シ、コを俵の上に落した。すると突然かあんかあんがやんだ。坑夫の影が急に長く高くなつた。鑿のみを持つたままである。

「何をしやがるんでい」

鋭い声が穴いっぱいに響いた。自分の耳には敲たたき込まれるように響いた。高い影は大股に歩いて来る。

見ると、足の長い、胸の張つた、体格たぐまの逞たくましい男であつた。顔

は背の割に小さい。その輪廓りんかくがやや判然する所まで来て、男は留まった。そうして自分を見下みおろした。口を結んでいる。二重瞼ふたえまぶたの大きな眼を見張っている。鼻筋が真直まつすぐに通っている。色が赭黒あかぐろい。ただの坑夫ではない。突然として云った。

「貴様は新前しんめえだな」

「そうです」

自分の腰はこの時すでに俵を離れていた。何となく、向うから近づいてくる坑夫が恐ろしかった。今まで一万余人の坑夫を畜生のように輕蔑けいべつしていたのに、——誓って死んでしまおうと覚悟をしていたのに、——大股に歩いて来た坑夫がたちまち恐ろしくなった。しかし、

「何でこんな所を迷子まごついてるんだ」

と聞き返された時には、やや安心した。自分の様子を見て、故

意に俵の上へ腰をおろしたんでないと見極めた語調である。

「実は昨夕飯場へ着いて、様子を見に坑へ這入ったばかりです」

「一人でか」

「いいえ、飯場頭から人をつけてくれたんですが……」

「そうだろう、一人で這入れる所じゃねえ。どうしたその案内は」

「先へ出ちまいました」

「先へ出た？ 手前を置き去りにしてか」

「まあ、そうです」

「太え野郎だ。よしよし今に己が送り出してやるから待ってろ」

と云ったなり、また鑿と槌をかあんかあん鳴らし始めた。自分

は命令の通り待っていた。この男に逢ったら、もう一人が出る気がなくなつた。死んでも一人で出て見せると威張つた決心が、

急にどこへか行つてしまった。自分はこの変化に気がついてゐた。それでも別に恥かしいとも思わなかつた。人に公言した事でないから構わないと思つた。その後人に公言したために、やらないでも済む事、やつてはならない事を毎度やつた。人に公言すると、しないのとは大變な違があるもんだ。その内かあんかあんがやんだ。坑夫はまた自分の前まで来て、胡坐をかきなから、

「ちよつと待ちねえ。一服やるから」

と、煙草入を取り出した。茶色の、皮か紙か判然しないもので、股引に差し込んである上から筒袖が被さつてゐた。坑夫は旨そうに腹の底まで吸つた煙を、鼻から吹き出している間に、短い羅宇の中途を、煙草入の筒でぽんと払いた。小さい火球が雁首から勢いよく飛び出したと思つたら、坑夫の草鞋の爪先へ落ち

てじゆうと消えた。坑夫は殻からになつた煙管をぷつと吹く。羅宇の中に籠こもつた煙が、一度に雁首から出た。坑夫はその時始めて口を利きいた。

「御前おめえはどこだ。こんな所へ全体何しに來た。身体からだつきは、すらりとしてゐるようだが。今まで働いた事はねえندろう。どうして來た」

「実は働いた事はないんです。が少し事情があつて、來たんです。……」

とまでは云つたが、坑夫には愛想が尽きたから、もう、歸るんだとは云わなかつた。死ぬんだとはなおさら云わなかつた。しかし今までのように、腹なかの内で畜生おもむきあつかいにし、口先くさきばかり叮嚀ていねいにしていたのとはだいぶん趣が違ちがう。自分はただ洗い攪ざらい自分の思わくを話してしまわないだけで、話しただけは真面

目に話したのである。すこしも裏表はない。腹から叮嚀^{ていねい}に答えた。坑夫はしばらくの間黙つて雁首^{かり}を眺^{なが}めていた。それからまた煙草を詰めた。煙が鼻から出だした真最中に口を開いた^{ひら}。

自分がその時この坑夫の言葉を聞いて、第一に驚いたのは、彼の教育である。教育から生ずる、上品な感情である。見識である。熱誠である。最後に彼の使つた漢語である。——彼^かれは坑夫などの夢にも知りようはずがない漢語を安々と、あたかも家庭の間で昨日^{きのう}まで常住坐臥^{じようじゆうざが}使つていたかのごとく、使つた。自分はその時の有様をいまだに眼の前に浮べる事がある。彼れは大きな眼を見張つたなり、自分の顔を熟視したまま、心持頸^{くび}を前の方に出して、胡坐^{ひざ}の膝へ片手を逆^{さか}に突いて、左の肩を少し聳^{そび}して、右の指で煙管を握つて、薄^そい唇^{くちびる}の間から奇麗^{きれい}な齒を時々あらわして、——こんな事を云つた。句の順序や、単語の

使い方は、たしかな記憶をそのまま写したものである。ただ語声だけはどうしようもない。――

「亀の甲より年の功と云うことがあるだろう。こんな賤しい商売はしているが、まあ年長者の云う事だから、参考に聞くがよい。青年は情の時代だ。おれも覚がある。情の時代には失敗するもんだ。君もそうだろう。己もそうだ。誰でもそうにきまつてる。だから、察している。君の事情と己の事情とは、どのくらい違うか知らないが、何しろ察している。咎めやしない。同情する。深い事故もあるだろう。聞いて相談になれる身体なら聞きもするが、シキから出られない人間じゃ聞いたつて、仕方なし、君も話してくれない方がいい。おれも……」

と云い掛けた時、自分はこの男の眼つきが多少異様にかがやいていたと云う事に気がついた。何だか大変感じている。これが

当人の云うごとくシキを出られないためか、または今云い掛け
たおれもの後へ出て来る話のためか、ちよつと分りにくいが、
何しろ妙な眼だった。しかもこの眼が鋭く自分をも見詰めてい
る。そうしてその鋭いうちに、懷旧かいきゅうと云うのか、沈吟ちんぎんと云うの
か、何だか、人を引きつけるなつかしみがあつた。この黒い坑あな
の中で、人気ひとけはこの坑夫だけで、この坑夫は今や眼だけである。
自分の精神の全部はたちまちこの眼球めだまに吸いつけられた。そう
して彼の云う事を、とつくり聞いた。彼はおれもを二遍繰り返
した。

「おれも、元は学校へ行つた。中等以上の教育を受けた事もある。
ところが二十三の時に、ある女と親しくなつて——詳しい
話はしないが、それが基もとで容易ならん罪を犯した。罪を犯して
気がついて見ると、もう社会に容いれられない身体からだになつていた。

もとより酔興すいぎょうでした事じやない、やむを得ない事情から、やむを得ない罪を犯したんだが、社会は冷刻なものだ。内部の罪はいくらでも許すが、表面の罪はけつして見逃みのがさない。おれは正しい人間だ、曲った事が嫌きらいだから、つまりは罪を犯すようになつたんだが、さて犯した以上は、どうする事もできない。学問も棄すてなければならぬ。功名も抛なげうたなければならぬ。万事が駄目だ。口惜くやしいけれども仕方がない。その上制裁の手に捕とらえられなければならない。(故意か偶然か、彼はとくに制裁の手と云う言語を使用した。)しかし自分が悪い覚おぼえがないのに、むやみに罪を着るなあ、どうしても己おれの性質としてできない。そこで突つ走つた。逃げられるだけ逃げて、ここまで来て、とうとうシキの中へ潜もぐり込んだ。それから六年というもの、ついに日光ひのめを見た事がない。毎日毎日坑の中でかんかんたた敲いているば

かりだ。丸六年敲いた。来年になればもうシキを出たつて構わない、七年目だからな。しかし出ない、また出られない。制裁の手には捕つかまらないが、出ない。こうなりや出たつて仕方がない。娑婆しやばへ帰れたつて、娑婆でした所業は消えやしない。昔は今でも腹ん中にある。なあ君昔は今でも腹ん中にあるだろう。君はどうだ……」

と途中で、いきなり自分に質問を掛けた。

自分は藪やぶから棒ぼうの質問に、用意の返事を持ち合せなかつたら、はつと思つた。自分の腹ん中にあるのは、昔むかしどころではない。一二年前から一昨日おとといまで持ち越した現在に等しい過去である。自分はいつその事自分の心事をこの男の前に打ち明けてしまおうかと思つた。すると相手は、さも打ち明けさせまいと自分を遮かへぎるごとくに、話の続きを始めた。

「六年ここに住んでいるうちに人間の汚ないところは、大抵見^{みつ}悉^くした。でも出る気にならない。いくら腹が立つても、いくら嘔吐^{おうと}を催^{もよお}し^{もよお}そうでも、出る気にならない。しかし社会には、——日の当る社会には——ここよりまだ苦しい所がある。それを思うと、辛抱も出来る。ただ暗く^{せば}つて狭い所だと思えばそれで済む。身体も今じや銅臭^{あかがねくさ}くなつて、一日もカンテラの油を嗅^かがなくなつちやいられなくなつた。しかし——しかしそりやおれの事だ。君の事じゃない。君がそうなつちや大變だ。生きてる人間が銅臭くなつちや大變だ。いや、どんな決心でどんな目的を持つて来ても駄目だ。決心も目的もたつた二三日で突ツつき殺されてしまふ。それが気の毒だ。いかにも可哀想^{かわいそう}だ。理想も何にもない鑿^{のみ}と槌^{つち}よりほかに使う術^{すべ}を知らない野郎なら、それで結構だ^が。しかし君のような——君は学校へ行つたろう。——どこへ

行つた。——ええ？ まあどこでもいい。それに若いよ。シ、キ、
へ抛り込まれるには若過ぎるよ。ここは人間の屑くずが抛り込まれ
る所だ。全く人間の墓所はかしよだ。生きて葬ほうごられる所だ。一度踏ふん込
んだが最後、どんな立派な人間でも、出られつこのない陥穽おとしあなだ。
そんな事とは知らずに、大方ボン引びきの言いなりしだいになつて、
引張られて来たんだろう。それを君のために悲しむんだ。人一
人を墮落させるのは大事件だ。殺しちまう方がまだ罪が浅い。
墮落した奴はそれだけ害をする。他人に迷惑を掛ける。——実
はおれもその一人いちにんだ。が、こうなつちや墮落しているよりほか
に道はない。いくら泣いたつて、悔くやんだつて墮落しているより
ほかに道はない。だから君は今のうち早く帰るがいい。君が墮
落すれば、君のためにならないばかりじゃない。——君は親が
あるか……」

自分^{ひとこと}はただ一言あると答えた。

「あればなおさらだ。それから君は日本人だろう……」

自分は黙っていた。

「日本人なら、日本のためになるような職業にいたらよかろう。学問のあるものが坑夫になるのは日本の損だ。だから早く帰るがよかろう。東京なら東京へ帰るさ。そうして正当な——君に適当な——日本の損にならないような事をやるさ。何と云つてもここはいけない。旅費がなければ、おれが出してやる。だから帰れ。分つたろう。おれは山中組にいる。山中組へ来て安^{やす}さんと聞きやあすぐ分る。尋ねて来るが好い。旅費はどうでも都合してやる」

安さんの言葉はこれで終つた。坑夫の数は一万人と聞いていた。その一万人はことごとく理^{りひにんじよう}非人情を解しない畜類の発達し

た化物とのみ思い詰めたこの時、この人に逢^あつたのは全くの小説である。夏の土用に雪が降ったよりも、坑^{あな}の中で安さんに説諭された方が、よほどの奇蹟^{きせき}のように思われた。大晦日^{おおみそか}を越すとお正月が来るくらいは承知していたが、地獄で仏と云う諺^{ことわざ}も記憶していたが、窮^{きわ}まれば通ずという熟語も習った事があるが、困った時は誰か来て助けてくれそうなものだからに思つて、芝居気を起しては困つていた事もたびたびあるが、——この時はまるで違う。真から一万人を畜生と思ひ込んで、その畜生がまたことごとく自分の敵だと考え詰めた最強度の断案を、忘るべからざる痛忿^{つうふん}の焰^{ほのお}で、胸に焼きつけた折柄だから、なおさらこの安さんに驚かされた。同時に安さんの訓戒が、自分の初志を一度に翻^{ひるが}えし得るほどの力をもつて、自分の耳に応^{こた}えた。

しばらくは二人して黙っていた。安さんは一応云うだけの事

を云つてしまつたんだから、口を利^きかないはずであるが、自分は先方^{せんぽう}に対して、何とか返事をする義務がある。義務をかいては安さんに済まない。心底^{しんそこ}から感謝の意を表^{ひょう}した上で、自分の考えも少し聞いてもらいたいのは山々であつたが、何分にも鼻の奥が詰つて不自由である。しかも強^しいて言葉を出そうとする、口へ出ないで鼻へ抜けそうになる。それを我慢すると、唇の両端^{りょうたん}がむずむずして、小鼻がぴくついて来る。やがて鼻と口を塞^せかれた感動が、出端^{でたん}を失つて、眼の中にたまつて来た。睫毛^{まつげ}が重くなる。瞼^{まぶた}が熱くなる。大に困^{おおい}つた。安さんも妙な顔をしている。二人ともばつが悪くなつて、差し向いで胡坐^{あぐら}をかいたまま、黙つていた。その時次の作事場^{さくじば}で鉋^{あらがね}を敲^{たた}く音がかあんかあん鳴つた。今考えると、自分と安さんが默然^{もくねん}と顔を見合せていた場所は、地面の下何百尺くらいな深さだか、それを正確に

知つて置きたかつた。都会でも、こんな奇遇は少い。銅山やまの中
では有ろうはずがない。日の照らない坑あなの底で、世から、人か
ら、歴史から、太陽からも、忘れられた二人が、ありがたい誨おしえ
を垂れて、尊たつとい涙を流した舞台があらうとは、胡坐をかいて、
黙然と互に顔を見守っていた本人よりほかに知るものはあるま
い。

安さんはまた煙草たばこを呑み出した。ふかりふかりと煙けむが出た。
その煙が濃く出ては暗がりに消え、濃く出ては暗がりに消える
間に、自分はようやく声が自由になった。

「ありがたいです。なるほどあなたのおつしやる通り人間のいる
所じゃないでしょう。僕もあなたに逢あうまでは、今日限り銅山やま
を出ようかと思つてたんです。……」

さすが山を出て死ぬつもりだったとは云いかねたから、ここ

でちよつと句を切つたら、

「そりやなおさらだ。さつそく帰るがいい」

と、安さんが勢いをつけてくれた。自分はやつぱり黙っていた。すると、

「だから旅費はおれが拵こしらえてやるから」

と云う。自分はさつきから旅費旅費と聞かされるのを、ただ善意に解釈していたが、さればと云つて毫ごうも貰う氣は起らなかつた。昨日飯場頭の合力きのうはんばがしらごうりよくを断つた時の料簡りようけんと同じかと云うと、そ

れとも違ちがう。昨日は是非貰もらいたかつた、地平じびたへ手を突ついてまで

貰もらいたかつた。しかし草鞋わらじ銭せんを貰もらうよりも、坑夫になる方が得

だと勘定したから、手を出して頂いただきたいところを、無理に断つたのである。安さんの旅費は始めから貰もらいたくない。好意を空むなしくすると云う点から見れば、貰もらわなければ濟すまないし、坑夫

をやめるとすれば貰う方が便利だが、それにもかかわらず貰いたくなかった。これは今から考えると、全く向うの人格に対して、貰つては恥ずべき事だ、こちらの人格が下がるという念から萌^{きざ}したものらしい。先方がいかにも立派だから、こつちも出来るだけ立派にしたい、立派にしなければ、自分の体面を損^{そこな}う虞^{おそれ}がある。向うの好意を享^うけて、相当の満足を先方に与えるのは、こちらも悦^{よろこ}ばしいが、受けるべき理由がないのに、濫^{みだ}りに自己の利得のみを標^め準^{やす}に置くのは、乞食と同程度の人間である。自分はこの尊敬すべき安さんの前で、自分は乞食である、乞食以上の人物でないと云う事実上の証明を与えるに忍びなかった。年が若いと馬鹿な代りに存外奇麗^{きれい}なものである。自分は

「旅費は頂きません」

と断つた。

この時安さんは、煙草を二三ぶく吸^{ふか}して、煙管^{きせる}を筒^{つつ}へ入れかけていたが、自分の顔をひよいと見て

「こりゃ失敬した」

と云ったんで、自分は非常に氣の毒になった。もしやるから貰^{もら}つて置けとでも強いられたならきつと受けたに違^{ちが}ない。その後氣^きをつけて、人が金を貰^{もら}うところを見ていると、始めは一応辞退^でして、後では大抵懷^{ふところ}へ入れるようだが、これは全くこの心理状態の發達した形式に過ぎないんだろうと思う。幸い安さんがえらい男で、「こりゃ失敬した」と云ってくれたんで、自分はこの形式に陥^{おちい}らずに済んだのはありがたかった。

安さんはすぐさま旅費の件を撤回して

「だが東京へは帰るだろうね」

と聞き直した。自分は、死ぬ決心が少々鈍^{にぶ}つた際だから、こと

によれば、旅費だけでも溜めた上、帰る事にしようと云う腹もあつたんで、

「よく考えて見ましょう。いずれその中^{うち}また御相談に参りますから」

と答えた。

「そうか。それじゃ、とにかく路の分る所まで送つてやろう」

と煙草入^{たばこいれ}を股引^{ももひき}へ差し込んで、上から筒服^{つつぽう}の胴^{かぶ}を被^{かぶ}せた。自分

はカンテラ^さを提^さげて腰を上げた。安さんが先へ立つ。坑^{あな}は存外

登り安かつた。例の段々を四五遍通り抜けて、二度ほど四つん

這^ばいになつたら、かなり天井^{てんじよう}の高い、真直^{まつすぐ}に立つて歩けるよう

な路へ出た。それをだらだらと廻り込んで、右の方へ登り詰め

ると、突然第一見張所の手前へ出た。安さんは電気灯の見える

所で留つた。

「じゃ、これで別れよう。あれが見張所だ。あすこの前を右へついて上がると、軌道レールの敷いてある所へ出る。それから先は一本道だ。おれはまだ時間が早いから、もう少し働いてからでなくつつちやあ出られない。晩には帰る。五時過ならいるから、暇があつたら来るがいい。気をつけて行きたまえ。さようなら」

安さんの影はたちまち暗い中へ這入はいった。振り向いて、一口ひとくち礼を云った時は、もうカンテラが角を曲つていた。自分は一人でシキの入口を出た。ふらふら長屋まで帰つて来る。途中でいろいろ考えた。あの安さんと云う男が、順当に社会の中で伸びて行つたら、今頃は何に成つてゐるか知らないが、どうしたつて坑夫より出世しているに違ない。社会が安さんを殺したのか、安さんが社会に対して済まない事をしたのか——あんな男らしい、すつきりした人が、そうむやみに乱暴を働く訳がないから、

ことによると、安さんが悪いんでなくって、社会が悪いのかも知れない。自分は若年じやくねんであつたから、社会とはどんなものか、その当時明瞭めいりょうに分らなかつたが、何しろ、安さんを追い出すような社会だから碌ろくなもんじゃなかうと考えた。安さんを鼯鼠ひいきにするせいか、どうも安さんが逃げなければならぬ罪を犯したとは思われない。社会の方で安さんを殺したとしてしまわなければ気が済まない。その癖今云う通り社会とは何者だか要領を得ない。ただ人間だと思つていた。その人間がなぜ安さんのような好い人を殺したのかなおさら分らなかつた。だから社会が悪いんだと断定はして見たが、いっこう社会が憎らしくならなかつた。ただ安さんが可哀想かわいそうであつた。できるなら自分と代つてやりたかつた。自分は自分の勝手で、自分を殺しにここまで来たのである。厭いやになれば帰つても差支さしかえない。安さんは人間から

殺されて、仕方なしにここに生きてゐるのである。帰ろうたつて、帰る所はない。どうしても安さんの方が氣の毒だ。

安さんは墮落したと云つた。高等教育を受けたものが坑夫になつたんだから、なるほど墮落に違ない。けれどもその墮落がただ身分の墮落ばかりでなくつて、品性の墮落も意味しているようだから痛ましい。安さんも達磨だるまに金を注ぎ込むのかしら、あな坑の中で一六勝負をやるのかしら、ジャンボいちろくしやうぶを病人に見せて調戲からかうのかしら、女房を抵当に——まさか、そんな事もあるまい。昨日着き立ての自分を見て愚弄ぐろうしないものないうちで、安さんだけは暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めてくれた。安さんは坑夫の仕事はしているが、心しんまでの坑夫じゃない。それでも墮落したと云つた。しかもこの墮落から生涯しょうが出る事ができないと云つた。墮落の底に死んで活いきてるんだと云つた。

それほど墮落したと自覚していながら、生きて働いている。生きてかんかんたた叩いている。生きて——自分を救おうとしている。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。……

こう決心をして、何でも構わないから、ひとまず坑夫になつた上として、できるだけ急ぎ足で帰つて来ると、長屋の半丁ばかり手前に初さんが石へ腰を掛けて待っている。雨は歇やんだ。空はまだ曇っているが、濡ぬれる気遣きづかいはない。山から風が吹いて来る。寒くても、世界の明かるいのが、非常に嬉うれしい。自分が嬉しさの余り、疲れた足を擦すりながら、いそいそ近づいてくると、初さんは奇怪けげんな顔をして、

「やあ出て来たな。よく路みちが分つたな」と云つた。自分が案内につけられながら、他ひとを置き去りにして、

何とかして何とか、ててててと云う唄をうたつて、大いに焦じらして置いて、他が大迷おおまじつきに、迷まじついて、穴の角かどへ頭をぶつけて割つて見ようとまで思ったあげく、やつとの事で安さんのおなさけ御情で出て来れば、「よく路が分つたな」と空とぼけている。その癖親方が怖こわいものだから、途中で待ち合せて、いっしょに連れて帰ろうと云う目算もくろみである。自分は石へ腰を掛けて薄笑いをしているこの案内の頭の上へ唾液つばきを吐きかけてやろうかと思つた。しかし自分は死ぬのを断念したばかりである。当分はここに留とどまらなくつちやならない身体からだである。唾液を吐きかければ、喧嘩けんかになるだけである。喧嘩をすれば負けるだけである。負けた上にス、ノ、コの中へぶちこまれてはせつかく死ぬのを断念した甲斐かいがない。そこで、こう云う答をした。

「どうか、こうか出て来ました」

すると初さんはなおさら不思議な顔をして、

「へえ。感心だね。一人で出て来たのか」

と聞いた。その時自分は年の割にはうまくやった。旨く^{うま}やったと云うくらいだから、ただ自分の損にならないようにと云うだけで、それより以外に賞める価値^{ねうち}のある所作^{しよさ}じゃないが、とにかく十九にしては、なかなか複雑な曲者^{くせもの}だと思う。と云うのは、こう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉^{のど}の先まで出たんだある。ところをとうとう云わずにしまったのが自慢なのだ。随分くだらない自慢だが訳を話せば、こんな料簡^{りょうけん}であつた。山中組の安さんは勢力のある坑夫に違ない。この安さんがわざわざ第一見張所の傍^{そば}まで見ず知らずの自分を親切に連れて来てくれたと云う事が知れ渡れば、この案内者は面目を失うにきまつてゐる。責任のある自分が、責任を抛^{ほう}り出して、先へ坑^{あな}を飛び出し

てしまったと分る以上は——しかもそれが悪意から出たと明瞭めいりように証拠しやうこだてられる以上は、こいつは親方に対して済ましちやいられない。となると後できつと敵かたきを打つだろう。無責任が露見ばれるのは痛快だが——自分はけつして寛大の念に制せられたなんやヤソきようりゆうソ耶蘇教流の嘘うそはつかない。——そこまでは痛快だが、敵打かたきうちはおお大に迷惑する。実のところ自分はこの迷惑の念に制せられた。それで、

「ええ、いろいろ路を聞いて出て来ました」
とおとなしい返事をして置いた。

初さんは半分失望したような、半分安心したような顔つきをしたが、やがて石から腰を上げて、

「親方の所へ行こう」

とまた歩き出した。自分は黙って尾おいて行つた。昨日きのう親方あに逢つ

たのは飯場はんばだが、親方の住んでる所は別にある。長屋の横を半丁のぼほど上ると、石垣で二方の角かどを取つて平ならした地面の上に二階建がある。家はさほど見苦しくもないが、家のほかには木も庭もない。相変らず二階の窓から悪魔が首を出している。入口まで来て、初さんが外から声を掛けると、窓をがらりと開けて、飯場頭はんばがしらが顔を出した。米利安めりやすの襯衣シヤツの上へど、てらを着たままである。

「帰けえつたか。御苦労だつた。まああつちへ行つて休みねえ」

と云うが早いか初さんは消えてなくなった。後あとは二人になる。親方は窓の中から、自分は表に立つたまま、談話はなしをした。

「どうです」

「大概見て来ました」

「どこまで降りました」

「八番坑まで降りました」

「八番坑まで。そりや大変だ。随分ひどかったでしょう。それで……」

と心持首を前の方へ出した。

「それで——やっぱりいるつもりです」

「やっぱり」

と繰り返したなり、飯場頭はじつと自分の顔を見ていた。自分も黙って立っていた。二階からは依然として首が出ている。おまけに二つばかり殖ふえた。この顔を見ると、厭いやで厭でたまらない。飯場へ帰ってから、この顔に取り巻かれる事を思い出すと、ぞつとする。それでもいる気である。どんな辛抱をしてもいる気である。しかし「やっぱりいるつもりです」と断然答えて置いて、二階の顔を不意に見上げた時には、さすがに情なかった。

こんな奴といつしよに置いてくれと、手を合せて拝まなければ始末がつかないようになり下がったのかと思うと、身体からだも魂も塩かを懸けた海鼠なまこのようにたわいなくなつた。その時飯場頭はよくやく口を利きいた。奇麗きれいさっぱりと利いた。

「じゃ置く事にしよう。だが規則だから、医者に一遍見て貰つてね。健康の証明書を持つて来なくっちゃいけない。——今日と——今日は、もう遅いから、明日あしたの朝、行つて見て貰つたらよからう。——診察場かい。診察場はこれから南の方だ。上がつて来る時、見えたろう。あの青いペンキ塗りの家うちだ。じゃ今日は疲れたろうから、飯場へ歸つて緩ゆっくり御休み」と云つて窓を閉たてた。窓を閉てる前に自分はちよつと頭を下げ、飯場へ引返した。緩ゆっくり御休と云つてくれた飯場頭はんばがしらの親切はありがたいが、緩ゆっくり寝られるくらいなら、こんなに苦しみ

はしない。起きていれば^{どうもうぐみ}獐猛組、寝れば^{ナンキンむし}南京虫に責められるばかりだ。たまたま飯の蓋^{ふた}を取れば咽喉^{のど}へ通らない壁土が出て来る。——しかしいる。いるときめた以上は、どうしてもいて見せる。少くとも安さんが生きてるうちはいる。シキの人間がみんな南京虫になつても、安さんさえ生きて働いてるうちは、自分も生きて働く考えである。こう考えながら半丁ほどの路を降りて飯場^{はんば}へ帰つて、二階へ上がった。上がると案のじよう大勢^{いろうり}囲炉裏^{そぼ}の傍に待ち構えている。自分はくさくさしたが、できるだけ何喰わぬ顔をして、邪魔にならないような所へ坐つた。すると始まつた。皮肉だか、冷評だか、罵詈^{ばり}だか、滑稽^{こっけい}だか、のべつに始まつた。

一々覚えてい^{しょうがい}る。生涯忘れられないほどに、自分の柔らかな頭を刺激したから、よく覚えてい^{しょうがい}る。しかし一々繰返す必要は

ない。まず大体昨日と同じ事と思えば好い。自分は急に安さんに逢あいたくなつた。例の夕食を我慢して二杯食つて、みんなの眼につかないようにそつと飯場を抜け出した。

山中組はジ、ヤン、ボ、の通つた石垣の間を抜けて、だらだら坂の降り際ぎわを、右へ上ると斜はすに頭の上に被かぶさつてゐる大きな槐えんじゅの奥にある。夕暮の門口かどぐちを覗のぞいたら、一人の掘子ほりこがカンテラの灯ひで筒服の掃除をしていた。中は存外静かである。

「安さんは、もうお帰りになりましたか」

と叮嚀ていねいに聞くと、掘子は顔を上げてちよいと自分を見たまま、奥を向いて、

「おい、安さん、誰か尋ねて来たよ」

と呼び出しにかかるや否や、安さんは待つてたと云わんばかりに足音をさせて出て来た。

「やあ来たな。さあ^{あが}上れ」

見ると安さんは唐棧^{とうざん}の着物に豆紋^{まめしぼり}か何^なにかの三尺を締めて立っている。まるで東京の馬丁^{べつとう}のような服装^{なり}である。これには少し驚いた。安さんも自分の様子を眺^{なが}めて首^{かし}を傾^かげて、

「なるほど東京を走ったまんまの服装^{なり}だね。おれも昔はそう云う着物を着たこともあつたつけ。今じゃこれだ」

と両袖^{りょうそで}の衿^{ゆき}を引つ張つて見せる。

「何と見える。車引かな」

と云うから、自分は遠慮してにやにや笑つていた。安さんは、「ハハハハ根性^{こんじょう}はこれよりまだ墮落^{だらく}しているんだ。驚いちゃいけない」

自分は何と答えていいか分らないから、やはりにやにや笑つて立っていた。この時分は手持無沙汰^{てもちぶさた}でさえあればにやにやし

て済ましたもんだ。そこへ行くと安さんは自分より遙か世馴れ
ている。この体を見て、

「さつきから来るだろうと思つて待つていた。さあ上れ」

と向うから始末をつけてくれた。この人は世馴れた知識を応用
して、世馴れない人を救ける方の側だと感心した。こいつを逆に
して馬鹿にされつけていたから特別に感心したんだろう。そこ
で安さんの云う通り長屋へ上つて見た。部屋はやつぱり広いが、
自分の泊つた所ほどでもない。電気灯は点いている。囲炉裏も
ある。ただ人数が少い、しめて五六人しかない。しかも、そ
れが向うに塊つてゐるから、こつちはたった二人である。そこで
また話を始めた。

「いつ帰る」

「帰らない事にしました」

安さんは馬鹿だなあと云わないばかりの顔をして呆あきれている。
「あなたのおつしやつた事は、よく分っています。しかし僕だつて、酔興すいきようにここまで来た訳じゃないんですから、帰るつたつて帰る所はありません」

「じゃやつぱり世の中へ顔が出せないような事でもしたのか」と安さんは鋭い口調で聞いた。何だか向うの方がぎよつとしたらしい。

「そうでもないんですが——世の中へ顔が出したくないんです」と答えると、自分の態度と、自分の顔つきと、自分の語勢を注意していた安さんが急に噴ふき出した。

「冗談云っちゃいけねえ。そんな酔狂ぜいたくがあるもんか。世の中へ顔が出したくないた何の事だ。贅沢ぜいたくじゃねえか。そんな身分に一日でも好いからなつて見てえくらいだ」

「代れれば代つて上げたいと思います」

と至極真面目に云うと、安さんは、また嘖き出した。

「どうも手のつけようがないね。考えて御覧な。世の中へ顔が出したくないものがさ、このシキへ顔が出したくなれるかい」

「ちつとも出したくはありません。仕方がないから——仕方がないんです。昨夕も今日も散々苛責いじめられました」

安さんはまた笑い出した。

「太え野郎だ。誰が苛責ふてた。年の若いものつらまえて。よしよしおれが今に敵かたきを打つてやるから。その代り帰るんだぜ」

自分はこの時大変心丈夫になった。なおなお留とどまる氣になった。あんな獯猛どうもうもこつちさえ強くなりやちつとも恐ろしくないんだ、十把一束じっぱひとからげに罵倒するくらいじつぱひとからげの勇氣がだんだん出てくるんだと思つた。そこで安さんに敵は取つてくれないでも好いから、

どうか帰さずに当分置いて貰えまいかと頼んだ。安さんは、あまりの馬鹿らしさに、氣の毒そうな顔をして、呆れ返つていたが、

「それじゃ、いるさ。——何も頼むの頼まないのつて、そりや君の勝手だあね。相談するがものはないや」

「でも、あなたが承知して下さらないと、いにくいですから」「せつかくそう云うんなら、当分にするがいい。長くいちやいけない」

自分は謹つつしんで安さんの旨むねを領りようした。實際自分もその考えでい

たんだから、これはけつして御交際おつきあいの挨拶あいさつではなかった。それか

らいろいろな話をしたがシ、キ、の中なかの述懐と大した変りはなかつ

た。ただ安さんの兄あにさんが高等官になつて長崎にしていると云う事

を聞いて、大いに感動した。安さんの身になつても、兄さんの

身になつても、定めし苦しいだろうと思うにつけ、自分と自分の親と結びつけて考え出したら何となく悲しくなつた。帰る時に安さんが出口まで送つて来て、相談でもあるならいつでも来るが好いと云つてくれた。

表へ出ると、いつの間にか曇つた空が晴れて、細い月が出ている。路は存外明るい、その代り大変寒い。袷あわせを通して、襯衣シヤツを通して、蒲鉾形かまぼこなりの月の光が肌まで浸み込んで来るようだ。両袖を胸の前へ合せて、その中へ鼻から下を突込んで肩をできるだけ聳そびやかして歩行あるき出した。身体からだはいじけているが腹の中はさつきよりだいぶん豊かになつた。何の当分のうちだ。馴なれればそう苦にする事はない。何しろ一万余人もかたまつて、毎日いっしょに働いて、いっしょに飯を食つて、いっしょに寝ているんだから、自分だつて七日も練習すれば、一人前いちにんまえに墮落

する事はできるに違ない。——この時自分の頭の中には、墮落の二字がこの通りに出て来た。しかしただこの場合に都合のいい文字として湧^わいて出たまでで、墮落の内容を明かに代表していなかったから、別に恐ろしいとも思わなかった。それで、比較的元気づいて飯場^{はんば}へ帰つて来た。五六間手前まで来ると、何だかわいおい云っている。外は淋^{さび}しい月である。自分は家の騒ぎを聞いて、淋しい月を見上げて、しばらく立っていた。そうしたら、どうも這入^{はい}るのが厭^{いや}になった。月を浴びて外に立っているのも、つらくなつた。安さんの所へ行つて泊めてもらいたくなつた。一步引き返して見たが、あんまりだと気を取り直して、のそのそ長屋へ這入^{はい}つた。横手に広い間^まがあつて、上り口からは障子^{しょうじ}で立て切つてある。電気灯が頭の上にあるから影は一つも差さないが、騒ぎはまさにこの中^{うち}から出る。自分は下駄^{げた}

を脱いで、足音のしないように、障子の傍そばを通つて、二階へ上がった。段々を登り切つて、大きな部屋を見渡した時、ほつと一息ついた。部屋には誰もいない。

ただ金きんさんが平たく煎餅せんべいのようになって寝ている。それから例の帆木綿ほもめんにくるまつて、ぶら下がつてゐる男もいる。しかし両方とも極きわめて静かだ。いてもいないと同じく、部屋は漠然ぼくぜんとしてただ広いものだ。自分は部屋の真中まで来て立ちながら考えた。床を敷いて寝たものだろうか、ただしは着のみ着のまままで、ごろりと横になるか、または昨夕ゆうべの通り柱へ倚よれて夜を明そうか。ごろ寝は寒い、柱へ倚より懸かるのは苦しい。どうかして布団ふとんを敷きたい。ことによれば今日は疲れ果てているから、南京虫ナンキンむしがいても寝られるかも知れない。それに蒲団ふとんの奇麗きれいなのを選ぶたらよからう。ことさらによつて、南京虫の数が違わないと

も限るまい。いろいろな理窟りくつをつけて布団を出して、そうつと潜り込んだ。

この晩の、経験を記憶のまま、ここに書きつけては、自分がお話しにならない馬鹿だと吹聴ふいちようする事になるばかりで、ほかに何の利益も興味もないからやめる。一口ひとくちに云うと、昨夜ゆうべと同じような苦しみを、昨夜以上に受けて、寝るが早いかな、すぐ飛び起きちまった。起きた後で、あれほど南京虫に螫さされながら、なぜ性懲しょうこりもなくまた布団ふとんを引つ張り出して寝たもんだろうと後悔した。考えると、全くの自業自得じごうじとくで、しかも常識のあるものなら誰でも避けられる、また避けなければならぬ自業自得だから、我れながら浅ましい馬鹿だと、つくづく自分が厭いやになつて、布団の上へ胡坐あぐらをかいたまま、考え込んでいると、また猛烈にちくりと螫しりされた。臀しりと股ももと膝頭ひざがしらが一時に飛び上がった。自分

は五位鷺ごいさぎのように布団の上に立った。そうして、四囲あたりを見廻した。そうして泣き出した。仕方がないから、紺こんの兵児帯へこおびを解いて、四つに折つて、裸の身体中所嫌わず、ぴしゃぴしゃ敲たたき始めた。それから着物を着た。そうして昨夜の柱の所へ行つた。柱に倚よりかかった。家が恋うちしくなつた。父よりも母よりも、艶子さんよりも澄江さんよりも、家の六畳の間が恋しくなつた。戸棚に這入はいつて更紗さらさの布団と、黒天鷲絨くろびろうどの半襟はんえりの掛かつた中形の搔捲かいまきが恋しくなつた。三十分でも好いから、あの布団を敷いて、あの搔捲を懸かけて、暖あつたかにして楽々寝て見たい、今頃は誰がああの部屋へ寝ているだろうか。それとも自分がいなくなつてから後は、机のちを据すえたまんま、空がらん胴どうにしてあるかしらん。そうすると、あの布団も搔捲も、畳んだなり戸棚にしまつてあるに違ちがない。もつたないもんだ。父も母も澄江さんも艶子さん

も南京虫に食われないで仕合せだ。今頃は熟睡しているだろう。
羨ましい。——それとも寝られないで、のつそつしているかし
らん。父は寝られないと疳癪かんしやくを起して、夜中に灰吹をぽんぽん
敲たたくのが癖だ。煙草たばこを呑のむんだと云うが、煙草は仮託かこつけで、実は、
腹立紛れに敲きつけるんじゃないかと思う。今頃はしきりに敲
いてるかも知れない。苦々にくにくしい倅せがれだと思つて敲いてるか、どう
なつたろうと心配の余り眼を覚まして敲いてるか。どっちにし
ても氣の毒だ。しかしこつちじやそれほどにも思つていないか
ら、先方さきでもそう苦にしちやいまい。母は寝られないと手水ちようずに
起きる。中庭の小窓を明けて、手を洗つて、棧さんをおろすのを忘れ
て、翌朝あくるあさよく父に叱られている。昨夜も今夜もきつと叱られる
に違ない。澄江さんはぐうぐう寝ている——どうしても寝てい
る。自分のいる前では、丸くなつたり、四角になつたりいろい

ろな芸をして、人を釣つてゐるが、いなくなれば、すぐに忘れて、平生へいぜいの通り御膳ごぜんをたべて、よく寝る女だから、是非に及ばない。あんな女は、今まで見た新聞小説にはけつして出て来ないから、始めは不思議に思ったが、ちゃんと証拠があるんだから確かである。こう云う女に恋着しなければならぬのは、よッぽどの因果いんがだ。随分憎らしいと思うが、憎らしいと思ひながらもやッぱり惚ほれ込んでゐるらしい。不都合な事だ。今でも、あの色の白い顔が眼前めさきにちらちらする。怪けしからない顔だ。艶子さんは起きてる。そうして泣いてるだろう。はなはだ氣の毒だ。しかしこつちで惚れた覚おぼえもなければ、また惚れられるような悪戯いたずらをした事がないんだから、いくら起きていても、泣いてくれない仕方がない。氣の毒がる事は、いくらでも氣の毒がるが仕方がない。構わない事にする。——そこで最後には、ほかの事はど

うともするから、ただ安々と楽寝がさせて貰いたい。不断の白い飯も虫唾むしずが走るように食いたい、それよりか南京虫ナンキンむしのいな床とこへ這入りたい。三十分でも好いからぐっすり寝て見たい。その後あとでなら腹でも切る。……

こう考えているとまた夜が明けた。考えている途中でいつか寝たものと見えて、眼が覚さめた時は、何にも考えていなかった。それからあとは、のそのそ下へ降りて行つて、顔を洗つて、南京米ナンキンまいを食う。万事昨日きのうの通りだから、省はぶいてしまふ。九時の例刻を待ちかねて病院へ出掛ける。病院は一昨日山おとといを登つて来る時に見た、青いペンキ塗の建物と聞いているから道うちも家も間違えようがない。飯場はんばを出て二丁ばかり行くと、すぐ道端みちばたにある。木造ではあるがなかなか立派な建築で、広さもかなりだけに、寧猛組どうもうぐみとはまるで不釣合である。野蠻人が病氣をするんでさえすでに

不思議なくらいだのに、病氣に罹^かつたものを治療してやるための器械と薬品と医者と建物を具^{そな}えつけたんだから、世の中は妙だと言^う感じがすぐに起る。まるで泥棒が金を出し合^つて、小学校を建てて子弟を通学させてるようなもんだ。文明と蒙^{もう}昧^{まい}の両極端がこのペンキ塗の青い家の中で出逢^{であ}つて、一方が一方へ影響を及ぼすと、蒙昧がますますぴんぴん蒙昧になつてくる。下手^{へた}に食い違^{ちが}つた結果が起るもんだ。と考^えながら歩いて来ると、また鬼共が窓から首を出して眺^{なが}めている。せつかくの考^えもこの氣味のわるい顔を見上げるとたちまち崩^{くず}れてしまう。あの顔のなかに安さんのようなのが、たった一つでもあれば、生き返るほど嬉しいだろうに、どれもこれも申し合せたように獐^{しやう}猛^{もう}の極致を尽している。あれじゃ、どうしたって病院の必要があるはずがないとまで思^つた。

天氣だけは好都合にすっかり晴れた。赤土を劈いたような山の壁へ日が当る。昨日、一昨日の雨を吸込んだ土は、東から差す日を受けて、まだ乾かない。その上照る日をいくらでも吸い込んで行く。景色は晴れがましいうちに湿とりと調子づいて、長屋と長屋の間から、下の方の山を見ると、真蒼な色が笑み割れそうに濃く重なっている。風は全く落した。昨夕と今朝とはほとんど十五度以上も違うようである。道傍に、たった一つ蒲公英が咲いている。もったいないほど奇麗な色だ。これも獮猛とはまるで釣り合ない。

病院へ着いた。和土の廊下が地面と擦れ擦れに五六間続いている突き当りに、診察室と云う札が懸つて、手前の右手に控所と書いてある。今云った一間幅の廊下を横切つて、控所へ這入ると、下はやはり和土で、ベンチが二脚ほど並べてある。小さ

硝子窓には受附と楷書で貼りつけてある。自分はこの窓口へ行つて、自分の姓名を書いた紙片かみきれを出すと、窓の中に腰を掛けていた二十二三の若い男が、その紙片を受取つて、ありもしない眉まみえへ八の字を寄せて、むずかしそうにとくと眺ながめた上、

「こりや御前か」

と、さも横風おうふうに云つた。あまり好い心持ではなかつた。何の必要があつて、こう自分を軽蔑けいべつするんだか不平に堪たえない。それで単に、

「ええ」

と出来るだけ愛嬌あいぎようのない返事をした。受附は、それじゃ、まだ挨拶あいさつが足りないと云わんばかりに、しばらくは自分を睨にらめていたが、こつちもそれつ切り口を結んで立つていたもんだから、
「少し待っている」

と、ぴしやりと硝子戸ガラスドを締めて出て行つた。草履ぞうりの音がする。

あんなにばたばた云わせなくつても好きそうなもんだと思つた。

自分はベンチへ腰を掛けた。受附はなかなか帰つて来ない。

ぼんやりしていると、眼の前にジ、ヤ、ン、ボ、ーが出て来た。金さんきん

がよつしよいよつしよいと担かつがれて来るところが見える。あれ

でも病院が必要なのかと思つた。何のために薬を盛つて、患者

を施療せりようするのか、ほとんど意義をなさない。こんな体裁ていさいのいい

偽善はない。病人はいじめるだけいじめる。ジ、ヤ、ン、ボ、ーは囃はやし

たいだけ囃す。その代り医者にかけてやると云うのか。鄭重ていちょうの

至りである。

「おいあっちへ廻れ」

と突然受附の声がした。見ると受附は硝子窓の中に威丈高いたけだかに突

立つて、自分を眼下に睥睨へいげいしている。自分は控所を出た。右へ

折れて、廊下伝いに診察場へ上がったら、薬の臭がにおいぷんとした。この臭を嗅ぐと等しく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思ひ出した。死んでここの土になったら不思議なものだ。こう云うのを運命というんだろう。運命の二字は昔から知ってたが、ただ字を知ってるだけで意味は分らなかつた。意味は分つても、納得がむずかしかつた。西洋人が筭を想像するようたけのこに定義だけを心得て満足していた。けれども人間の一大事たる死と云う實際と、人間の獸類たる坑夫の住んでいるシ、キとを結びつけて、二三日前まで不足なく生い立つた坊っちゃんを突然宙に釣るして、この二つの間に置いたとすると、坊っちゃんは始めてなるほどと首肯する。運命は不可思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもんだと云う事が分る。すると今までただの山であつたものが、ただの山でなくなる。ただの土であつたものがただの土でなくな

る。青いばかりと思つた空が、青いだけでは済まなくなる。この病院の、この診察場の、この薬品の、この臭いまでが夢のよ
うな不思議になる。元来この椅子いすに腰を掛けている本人からし
てが、何物だかほとんど要領を得ない。本人以外の世界は明瞭めいりょう
に見えるだけで、どんな意味のある世界かさっぱり見当けんとうがつか
ない。自分は、診察場と薬局とをかねたこの一室の椅子に倚よつ
て、敷物と、洋卓テーブルと、薬瓶くすりびんと、窓と、窓の外の山とを見廻した。
もつとも明瞭な視覚で見廻したが、すべてがただ一幅の画えと見
えるだけで、その他ほかには何物をも認める事ができなかつた。

そこへ戸を開けて、医者があらわれた。その顔を見ると、やつ
ぱり坑夫タイプの類型である。黒のモーニングに縞しまの洋袴ズボンを着て、襟えり
の外あじへ顎あごを突き出して、

「御前か、健康診断をして貰うのは」

と云つた。この語勢には、馬に対しても、犬に対しても、是非腹の内なかで云うべきほどの敬意が籠こもつていた。

「ええ」

と自分は椅子を離れた。

「職業は何だ」

「職業つて別に何にもないんです」

「職業がない。じゃ、今まで何をして生きていたのか」

「ただ親の厄介やっかいになつていました」

「親の厄介になつていた。親の厄介になつて、ごろごろしていたのか」

「まあ、そうです」

「じゃ、ごろつきだな」

自分は答をしなかつた。

「裸になれ」

自分は裸になった。医者は聴診器で胸と背中をちよつと視^みた上、いきなり自分の鼻を撮^{つま}んだ。

「息をして見ろ」

息が口から出る。医者は口の所へ手をあてがった。

「今度^{こんだ}口を塞^{ふさ}ぐんだ」

医者は鼻の下へ手をあてた。

「どうでしょう。坑夫になれますか」

「駄目だ」

「どこか悪いですか」

「今書いてやる」

医者は四角な紙片^{かみぎれ}へ、何か書いて抛^{ほう}り出すように自分に渡し

た。見ると気管支炎とある。

気管支炎と云えば肺病の下地したじである。肺病になれば助かりようがない。なるほどさつき薬の臭においを嗅かいで死ぬんだなと虫が知らせたのも無理はない。今度はいよいよ死ぬ事になりそうだ。これから先二三週間もしたら、金さんきんのようによつしよいよつしよいでジャン、ポーを見せられて、そのあげくには自分がとうとうジャン、ポーになって、それから思う存分はや嘔し立てられて、^{たた}嘔き立てられて、——もつとも新参だから嘔してくれるものも、
——どうなる事か自分にも分らない。それは分らなくつてもよろしい。生きて動いている今ですら分らない。ただ世界がのべつ、のつぺらぼうに続いているうちに、あざやかな色が幾通りも並んでるばかりである。坑夫は世の中で、もつとも穢きたないもの

と感じていたが、かように万物を色の変化と見ると、穢ないも穢なくないもある段じゃない。どうしても構わないから、どうとも勝手にするがいい、自分が懷手ふとしろでをしていたら運命が何とか始末をつけてくれるだろう。死んでもいい、生きてもいい。華嚴けげんの瀑たきなどへ行くのは面倒になった。東京へ帰る？ 何の必要があつて帰る。どうせ二三度咳せきをせくうちの命だ。ここまで運命が吹きつけてくれたもんだから、運命に吹き払われるまでは、ここにゐるのが、一番骨が折れなくつて、一番便利で、一番順当な訳だ。ここにいて、ただ墮落の修業さえすれば、死ぬまでは持てるだろう。肺病患者にほかの修業はむずかしいかも知れないが、墮落の修業なら——ふと往きに眼についた蒲公英たんぽぽに出逢であつた。さつきはもつたないほど美しい色だと思つたが、今見ると何ともない。なぜこれが美しかったんだろうと、しばらく立

ち留まつて、見ていたが、やつぱり美しくない。それからまたあるき出した。だらだら坂を登ると、自然と顔が仰向あおむきになる。すると例の通り長屋から、坑夫が頬杖ほおづえを突いて、自分を見下みおろしている。さつきまではあれほど厭いやに見えた顔がまるで土細工つちざいくの人形の首のように思われる。醜みにくくも、怖こわくも、憎らしくもない。ただの顔である。日本一の美人の顔がただの顔であるごとく、坑夫の顔もただの顔である。そう云う自分も骨と肉で出来ただだの人間である。意味も何もない。

自分はこう云う状態で、無人むにんの境さかいを行くような心持で、親方の家までやつて来た。案内を頼むと、うちから十五六の娘が、がらりと障子しょうじをあけて出た。こう云う娘がこんな所にいようはずがないんだから、平生へいぜいならはつと驚く訳だが、この時はまるで何の感じもなかった。ただ器械のように挨拶あいさつをすると、娘は

片手を障子へ掛けたまま、奥を振り向いて、

「御父さん。おとつ 御客」

と云った。自分はこの時、これが飯場頭はんばがしらの娘だなとと合点がてんしたが、ただ合点したままで、娘がまだそこに立っているのに、娘の事は忘れてしまった。ところへ親方が出て来た。

「どうしたい」

「行つて来ました」

「健康診断を貰つて来たかい。どれ」

自分は右の手に握っていた診断書を、つい忘れて、おやどこへやっつたろうかと、始めて気がついた。

「持つてるじゃないか」

と親方が云う。なるほど持つていたから、皺しわを伸のして親方に渡した。

「氣管支炎。病氣じゃないか」

「ええ駄目です」

「そりゃ困つたな。どうするい」

「やつぱり置いて下さい」

「そいつあ、無理じゃないか」

「ですが、もう帰れないんだから、どうか置いて下さい。小使でも、掃除番でもいいですから。何でもしますから」

「何でもするつたつて、病氣じゃ仕方がないじゃないか。困つたな。しかしせつかくだから、まあ考えてみよう。明日までには大概様子が分るだろうからまた来て見るがいい」

自分は石のようになつて、飯場はんばへ歸つて来た。

その晩は平気で囲炉裏いろりの側そばに胡坐あぐらをかいていた。坑夫共が何と云つても相手にしなかった。相手にする料簡りようけんも出なかった。

いくら騒いでも、愚弄^{からか}つても、よしんば踏んだり蹴^けたりしても、彼らは自分と共に一枚の板に彫りつけられた一団の像のように思われた。寝るときは布団^{ふとん}は敷かなかつた。やはり囲炉裏の傍^{そば}に胡坐をかいていた。みんな寝着いてから、自分もその場へ仮寝をした。囲炉裏へ炭を継^つぐものがないので、火の氣^けがだんだん弱くなつて、寒さがしだいに増して来たら、眼が覚めた。襟^{えり}の所がぞくぞくする。それから起きて表へ出て空を見たら、星がいつぱいあつた。あの星は何しに、あんなに光つてるのだろうかと思つて、また内へ這^{はい}入つた。金^{きん}さんは相変らず平たくなつて寝ている。金さんはいつジヤンボ^ーになるんだらう。自分と金さんとどっちが早く死ぬだらう。安^あさんは六年このシ^きに這^{はい}入つてると聞いたが、この先何年^{あらがね}鉾^たを敲^{たた}くだらう。やつぱりしまいには金さんのように平たくなつて、飯場^{かたすみ}の片隅に寝るんだらう。

そうして死ぬだろう。——自分は火のない囲炉裏の傍はたに坐つて、夜明まで考えつづけていた。その考えはあとから、あとから、仕切りなしに出て来たが、いずれも干枯ひからびていた。涙も、情なさけも、色も香かもなかった。怖い事こわも、恐ろしい事も、未練も、心残りもなかった。

夜が明けてから例のごとく飯を済まして、親方の所へ行つた。親方は元氣のいい声をして、

「来たか、ちようど好い口が出来た。実はあれからいろいろ探したがどうも思わしいところがないんでね、——少し困つたんだが。とうとう旨うまい口を見附めつけた。飯場の帳附ちやうつけだがね。こりや無ければ、なくつても済む。現に今までは婆さんがやつてくらいたが、せつかくの御頼みだから。どうだねそれならどうか、おれの方で周旋ができればと思うが」

「はあありがたいです。何でもやります。帳附と云うと、どんな事をするんですか」

「なあに訳はない。ただ帳面をつけるだけさ。飯場にああ多勢いる奴が、やや草鞋^{わらじ}だ、やや豆だ、ヒジキだつて、毎日いろいろなものを買うからね。そいつを一々帳面へ書き込んでいて貰やあ好いんだ。なに品物は婆さんが渡すから、ただ誰が何をいくら取ったと云う事が分るようにして置いてくれればそれで結構だ。そうするとこつちでその帳面を見て勘定日に差し引いて給金を渡すようにする。——なに力業^{ちからわざ}じゃないから、誰でもできる仕事だが、知つての通りみんな無筆^{よりあい}の寄合だからね。君がやつてくれるとこつちも大変便利だが、どうだい帳附は」

「結構です、やりましょう」

「給金は少くつて、まことに御気の毒だ。月に四円だが。——

食料を別にして」

「それでたくさんです」

と答えた。しかし別段に嬉しいとも思わなかった。ようやく安心したとまでは固^{もとよ}り行かなかった。自分の鉾山における地位はこれでやつときまつた。

^{あくるひ}

翌日から自分は台所の片隅に陣取つて、かたのごとく帳附を始

めた。すると今まであのくらい人を輕蔑^{けいべつ}していた坑夫の態度が

がらりと變つて、かえつて向うから御世辞を取るようになった。

自分もさつそく墮落の稽古^{けいこ}を始めた。南京米^{ナンキンまい}も食つた。南京虫^{ナンキンむし}

にも食われた。町からは毎日毎日ポン引^{びき}が椋鳥^{むくどり}を引張つて来る。

子供も毎日連れられてくる。自分は四円の月給のうちで、菓子

を買つては子供にやつた。しかしその後東京^{のち}へ歸ろうと思つて

からは断然やめにした。自分はこの帳附を五箇月間無事に勤め

た。そうして東京へ帰った。——自分が坑夫についての経験はこれだけである。そうしてみんな事実である。その証拠には小説になっていないんでも分る。

坑夫

底本：「夏目漱石全集 4」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和 63）年 1 月 26 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999 年 4 月 13 日公開

2004 年 2 月 26 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。